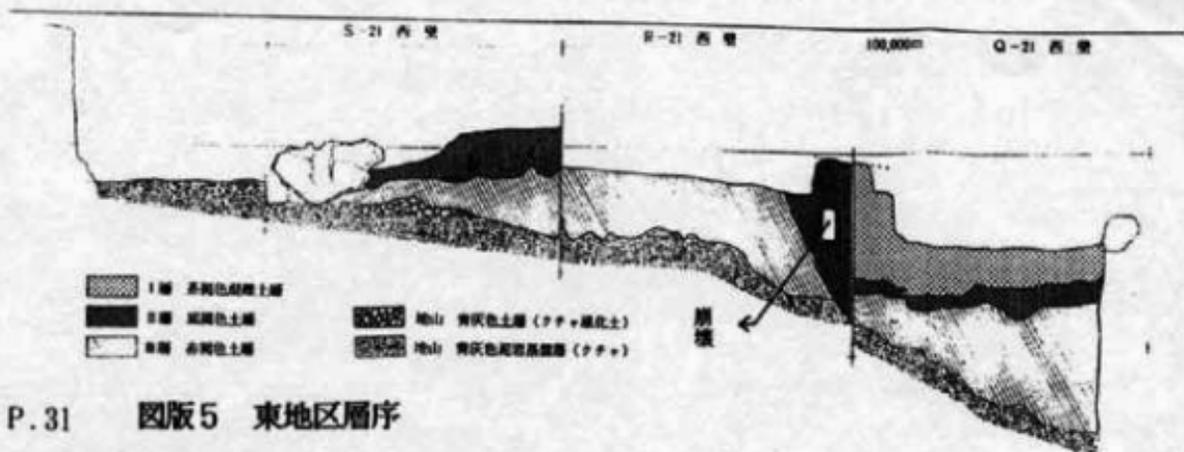


# 室川貝塚

——総合庁舎建設に伴う範囲確認調査——  
及び東地区発掘調査の報告書

1993年

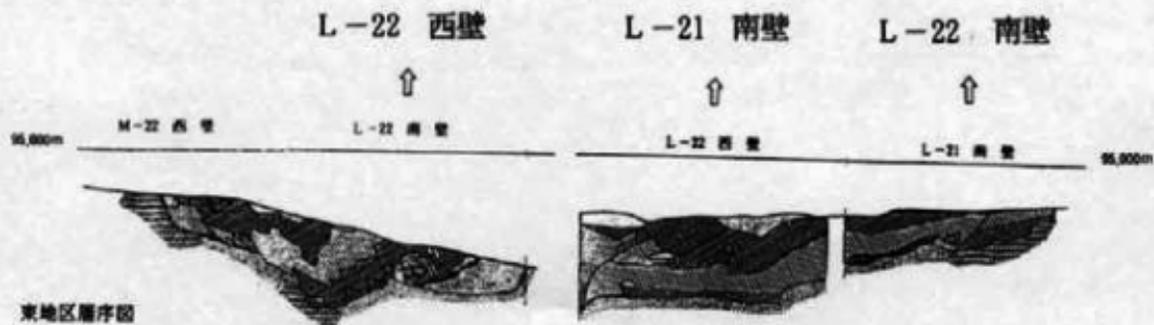
沖縄市教育委員会



P. 31 図版5 東地区層序

例言 [植物調査] 沖縄野外植物研究室会の方々5名 ⇨ 沖縄野外植物研究会の…

P. 33 図版6 東地区層序



東地区層序図

## PL. 空撮及び調査状況



P.L. 室川貝塚一帯の空撮（東方向より）



P L. 1960年代初期の室川貝塚一帯（米軍撮影・沖縄市役所市民交流室の広報担当より提供）



PL. 室川貝塚一帯遠景

上：北より

下：東より



P.L. 上：室川貝塚一帶近景（西より）  
下：室川貝塚東地区近景（南より）



PL. 室川貝塚本体部  
上：近景（北より）  
下：周辺の発掘状況



P L. 室川貝塚東地区  
上：斜面の転石状況（東より）  
下：斜面の近景（南より）



P L. 室川貝塚東地区の発掘状況



P L. 室川貝塚東地区の発掘状況



P L. 室川貝塚東地区の発掘状況



P L. 室川貝塚東地区の発掘状況



P L. 室川貝塚東地区の発掘状況



P L. 室川貝塚東地区の発掘状況



P L. 室川貝塚東地区

上：北東部の黒色遺物包含層凹地部の調査状況

下：石灰岩基盤の出土状況



P.L. 室川貝塚東地区

上：北東部の黒色遺物包含層凹地部分分布

下：土層断面



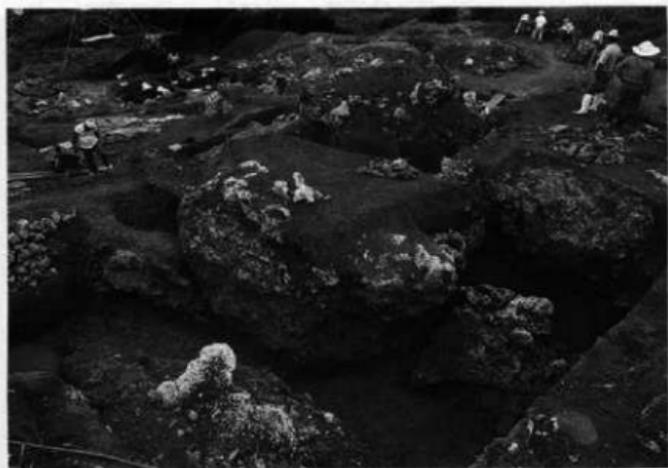
P.L. 室川貝塚東地区  
急傾斜部における地すべりの状況



P L. 沖縄市役所一帯の調査状況



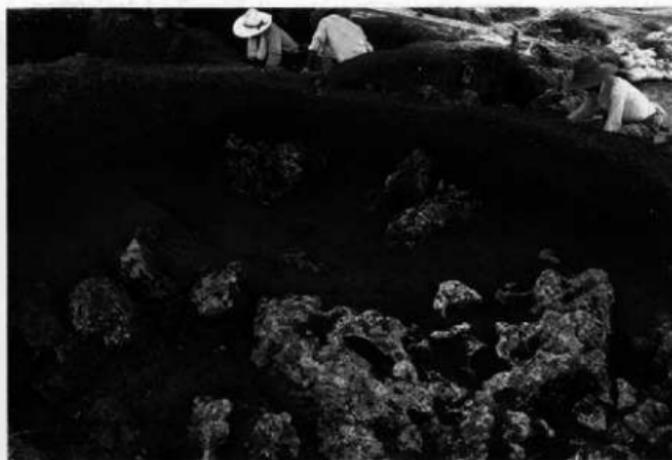
P.L. 室川貝塚東地区の調査状況



P L. 室川貝塚東地区の調査状況



P L. 室川貝塚西地区の調査状況



P L. 室川貝塚東地区の調査状況

# 室川貝塚

——総合庁舎建設に伴う範囲確認調査——  
及び東地区発掘調査の報告書

1993年

沖縄市教育委員会

## はじめに

本報告書は、沖縄市総合庁舎の建設に伴い1986年、88年、89年の3年度にわたり実施した室川貝塚の範囲確認調査と貝塚東地区記録保存調査の成果を記したものです。

室川貝塚は1974年の発見以来1978年にかけて沖縄国際大学考古学研究室による5次の発掘調査を実施した経過があり、出土遺物の数や規模からみても、また層序から推しても沖縄県考古学の編年の指標となる屈指の貝塚として学史上重要な位置づけを与えられています。

ご承知のように、貝塚の調査によって得られる遺物や遺構はわたしたちの祖先の暮らしや文化の原点を探る生きた歴史資料として重要な価値もっており、その活用の望ましいあり方が郷土愛をつちかう起点になるものと信じております。

このようなことを念頭において、沖縄市の誇る室川貝塚の本体部が、「歴史公園」として将来にわたり保存されていくことが決定したことは望外の喜びとするところであります。

本書の発刊が所期の目的を達成し、これからの文化財愛護思想の形成に資する一助になればと願うものであります。

おわりに、本発掘調査に際しご苦勞を共にされた多くの関係者の皆様に厚くお礼を申し上げますとともに、今後の変わらぬご協力をお願いし序といたします。

平成5年3月

沖縄市教育委員会  
教育長 當 眞 哲 雄

## 例 言

1. 本書は沖縄市総合庁舎建設に伴う室川貝塚一帯の範囲確認と室川貝塚東地区の発掘調査報告書です。

2. 調査は沖縄市教育委員会が沖縄市役所の依頼を受けて実施しました。

第一次範囲確認調査	1986年度	沖縄市教育委員会	文化課	文化財係
第二次範囲確認調査	1988年度	沖縄市立郷土博物館	学芸係	文化財担当
第三次範囲確認調査	1989年度	沖縄市立郷土博物館	学芸係	文化財担当
室川貝塚東地区発掘調査	1989年度	沖縄市立郷土博物館	学芸係	文化財担当

3. 調査員及び資料整理

### 【調査員】

比嘉賀盛(郷土博物館)	囑託	宮里信勇( "	囑託・現浦添市教育委員会)
中村直樹( "	非常勤)		
恩河 尚( "	学芸係	文化財担当・現平和文化振興課市史編集担当)	
比嘉良憲( "	学芸係長	博物館担当)	宮城利旭( " 学芸係 文化財担当)

### 【資料整理】(郷土博物館 非常勤)

島袋宏美 棚原千恵美 稲嶺和江 波平裕子 新屋良博 玉那覇知樹

4. 調査及び本書発刊に際し下記の機関と方々の絶大な御協力と御教示をいただいた。記して謝意を表します。(敬称略)

### 【考古学調査】

高宮廣衛(沖縄国際大学教授).....	沖縄国際大学考古学研究室
金武正紀(沖縄市文化財調査審議委員)	松村恵司(文化庁)
岸本義彦(沖縄県教育庁文化課)	仲村 愿(北谷町教育委員会)
島袋春美(沖縄国際大学考古学研究室卒業生)	湖城 清(糸満市教育委員会)
沖縄県教育庁	沖縄市文化財調査審議会
	与那嶺豊(現豊見城村教育委員会)

### 【植物調査】 沖縄野外植物研究室会の方々5名

池原直樹(沖縄市文化財調査審議委員)	伊波善勇(石川高校)	兼城洋邦(石川高校)
伊礼洋代(貝志川商業高校)	渡嘉敷玲子(宜野座高校)	

### 【地形調査】

仲里栄三 (沖縄市文化財調査審議委員)

### 【石器と石材の石質鑑定】

大城逸郎 (沖縄県立教育センター)

### 【ハブ対策調査】

大谷 勉 (高田爬虫類研究所沖縄分室)

[写真測量調査]

㈱エステック

[磁気探査調査]

㈱沖縄計測

[調整及び器材提供]

沖縄市役所 総務部 総合庁舎建設室 沖縄市役所 総務部 用度管財課

沖縄市役所 企画部 財政課 沖縄市役所 企画部 企画課

沖縄市役所 市民部 環境衛生課 沖縄市役所 建設部 土木課

沖縄市役所 建設部 下水道課 沖縄市役所 水道部

[発掘作業員及び庶務]

福島宏義(沖縄市シルバー人材センター) 沖縄市シルバー人材センター(約40名の方々)

御来訪者は下記の方々。(なお、機関名で表示したのは次々と多数の方々が見学に来られましたので紙面の都合で複数の方々の場合、失礼ながらも個人名は省略しました。)

沖縄考古学会(高元政秀会長ならびに学兄諸氏)

リチャード・ピアソン(カナダ、ブリティッシュコロンビア大学人類学教室)

白木原和美(熊本大学文学部考古学研究室)

西谷正(九州大学文学部考古学研究室)

具志川市教育委員会 浦添市教育委員会 宜野湾市教育委員会

北中城村教育委員会 読谷村教育委員会 名護市教育委員会

沖縄県史跡整備協議会 沖縄国際大学考古学研究室

安慶田小学校 室川小学校理科クラブ コザ中学校

琉球新報社 沖縄タイムス社

6. 室川貝塚一帯の地区割

室川貝塚の範囲は周知と新発見を含めると広範囲になります。発掘に際しては、室川貝塚東地区(東地区)と室川貝塚西地区(西地区)に分け、更に後者は室川貝塚崖下地区(崖下地区)と室川貝塚本体部(本体部)に細分しました。

7. 本書に掲載した地図は、国土地理院発行の図面を複製したものと総合庁舎作成の図面を修正して使用しました。

8. 本報告では遺物の実測図版と写真図版の番号がほぼ一致しています。文中では単に「図」と略します。例 (図5-1) → (図版5-1)(PL. 5-1)

9. 出土遺物・調査資料は沖縄市立郷土博物館で保管しています。

# 目 次

第I章 序 言 .....	6
I. 調査に至るまで .....	6
II. 総合庁舎建物配置と遺跡の取り扱い経過 .....	6
III. 総合庁舎と付帯施設地内の発掘調査 .....	7
IV. 関連する文化財調査 .....	7
1. 植物調査 .....	7
2. 地質・地形調査 .....	12
3. ハブ対策の調査 .....	13
第II章 環 境 .....	13
I. 沖縄市の位置 .....	13
II. 室川貝塚一帯の地理的環境 .....	13
第III章 室川貝塚一帯の諸々の動向 .....	17
I. 第二次世界大戦後から現在までの諸開発 .....	17
1. 米軍基地 .....	17
2. 区画整理事業 .....	17
3. コザ市役所庁舎の建設 .....	17
II. 遺跡との関わりに伴う開発調整 .....	17
1. 室川貝塚東地区 .....	17
2. 室川貝塚西地区 .....	18
III. 総合庁舎建設に伴う範囲確認調査 .....	18
1. 現本庁舎周辺の調査 .....	18
2. 室川貝塚一帯の調査 .....	18
3. パレス開館と本庁舎脇駐車場の調査 .....	21
IV. 発掘調査 .....	21
1. 学術調査 .....	21
2. 当教育委員会の調査 .....	22
第IV章 出土遺物及び調査の概要 .....	22
I. 土器の分類 .....	22

II. 室川貝塚範囲確認調査 .....	26
1. 概要 .....	26
2. 出土遺物(土器) .....	26
III. 東地区発掘調査の層序・出土遺物 .....	29
1. 概要 .....	29
2. 層序 .....	35
A. 包含層中心部の層序 .....	35
B. 包含層東端近くの層序 .....	35
C. 北東部の黒色遺物包含層凹地部 .....	35
3. 出土遺物 .....	36
(1) 土器 .....	36
A. 東地区全域 .....	37
B. 北東部の黒色遺物包含層凹地部 .....	38
(2) 石器 .....	42
あとなぎ .....	50
<附 録> .....	52
総合庁舎建設に伴う室川貝塚一帯の事前協議の経過 .....	52
<参考文献及び注釈> .....	57

## 図 版 目 次

図版 1 沖縄市の位置 .....	14
図版 2 沖縄市遺跡分布図 .....	15
図版 3 室川貝塚一帯平面図 .....	19
図版 4 東地区発掘グリット .....	30
図版 5 東地区層序図 .....	31
図版 6 " " .....	33
図版 7~36・土器 .....	59
図版 37~44・石器 .....	89

## P L. 目 次

P L. 7~36・土器 .....	97
P L. 37~45・石器 .....	127

# 第I章 序 言

## I 調査に至るまで

調査は沖縄市役所による「総合庁舎建設」に伴うものです。開発地は、沖縄市仲宗根町室川原と馬上原で面積22,000㎡を有します。

工事に先立ち、当教育委員会は事業計画者から文化財有無と範囲確認調査の依頼を受け、室川貝塚本体部は沖縄県考古学編年の学史上の重要であることを報告。その後、くり返し調整・協議を経て歴史公園として「保存、整備」の同意が得られました。

当初、室川貝塚一帯は保存区域も含めて遺跡の範囲を確定してなかったため、先決事業として庁舎敷地で広域の範囲確認調査を実施しました。調査終了後、事業計画者と調整・協議を随時重ね室川貝塚本体部の保存区域の設定。それと関連して総合庁舎の位置をずらしたために建物配置内にどうしてもかかる部分の線引き。(例えば、室川貝塚崖下地区・室川貝塚東地区・馬上原遺跡等がそれに該当します)3地区の中でも室川貝塚東地区と馬上原遺跡は新発見の遺跡で、特に馬上原遺跡は総合庁舎の建物配置が煮詰まって後、総合庁舎建設室から文化財有無の照会を受け試掘調査で新たに確認した遺跡です。

本貝塚は1974年度に当山一博氏によって発見されてから、今回の調査に至るまで足かけ16年の歳月が過ぎました。その間には沖縄国際大学考古学研究室と当教育委員会による学術調査、さらに当地一帯の開発行為に伴う事前協議と調整及び発掘調査等、その経過を集約すると枚挙にいとまがなくそれらの詳細は別項の『室川貝塚の様々な動向』で述べ、本書では主に1989年度範囲確認調査と1990年度室川貝塚東地区の調査成果を報告します。

## II 総合庁舎建物配置と遺跡の取り扱い経過

総合庁舎の建物配置が確定するまで室川貝塚本体部は下記の取り扱いで沖縄市役所と調整しました(次頁の図参照)。

### (第1案)

室川貝塚本体部を「記録保存調査後」に総合庁舎を建設。沖縄市役所へ再考を促しました。

### (第2案)

室川貝塚本体部を「箱庭」として保存その周囲を総合庁舎が取り囲む。沖縄市役所へ再考を促しました。

### (第3案)

総合庁舎を全面的に南側へずらし「室川貝塚本体部は歴史公園」として保存・整備、その周辺は発掘調査。上記第1～2案を再考後、第3案になって総合庁舎と付帯施設の配置が確定。事業者と調整・協議の結果、室川貝塚本体部は先述の同意が得られ(馬上原遺跡・室川貝塚東地区・室川貝塚崖下地区)は総合庁舎付帯施設地内に含まれるため発掘調査の対象となりました。



### Ⅲ 総合庁舎と付帯施設地内の発掘調査

先述のとおり室川貝塚東地区・馬上原遺跡・室川貝塚崖下地区が計画地に位置するため、発掘調査の依頼を受けました。

#### 1. 室川貝塚東地区

期 間 1989年8月31日～11月22日

調査面積 約625㎡ (25.00×25.00m)

#### 2. 馬上原遺跡

期 間 1989年12月4日～1990年6月27日

調査面積 約800㎡ (20.00×40.00m)

#### 3. 室川貝塚崖下地区

期 間 1989年12月4日～1990年7月23日

調査面積 約240㎡ (10.00×24.00m)

### Ⅳ 関連する文化財調査

考古学調査以外に植物・地形の記録保存調査さらにハブ対策の生息調査を行いました。

#### 1. 植物調査

発掘調査に先立って室川貝塚一帯の伐採を実施する必要が生じたため伐採前にその記録保存調査を行いました。

- ① 調査年月日 1991年7月30日  
 ② 調査場所 室川貝塚  
 ③ 調査員 池原直樹・伊波善勇・兼城洋邦・伊礼洋代・渡嘉敷玲子  
 ④ 参考文献 初島佳彦・天野鉄夫著 「琉球植物目録」でいご出版社

室川貝塚一帯の植物目録 (分類表)

	科	属	種
シダ植物	6	9	10
裸子植物	1	1	1
双子葉植物	37	61	68
单子葉植物	9	23	24
計	53	94	103

調査区内の植物目録

科名	和名	学名	備考
シダ植物	Pteridophyta		
カニクサ科	カニクサ	<i>Lygodium japonicum</i> Sw.	
ウラボシ科	コシダ	<i>Dicranopteris dichotoma</i> Bernh.	
ワラビ科	ホウライシダ	<i>Adiantum capillus-Veneris</i> L.	
	リュウキュウイノモトソウ	<i>Pteris ryukyuensis</i> Tagawa	
シノブ科	タマシダ	<i>Nephrolepis auriculata</i> Trimen	
	ホウビカンジュ	<i>Nephrolepis biserrata</i> Schott	
オシダ科	ホラカグマ	<i>Ctenitis eatoni</i> Ching	
	オニヤブソテツ	<i>Cyrtomium falcatum</i> Presl	
	ホシダ	<i>Thelypteris acuminata</i> Morton	
チャセンシダ科	シマオオクニワタリ	<i>Asplenium nidus</i> L.	
種子植物	Spermatophyta		
裸子植物	Gymnospermae		
ソテツ科	ソテツ	<i>Cycas revoluta</i> Thunb.	
被子植物	Angiospermae		
双子葉植物	Dicotyledoneae		

科名	和名	学名	備考
古生花被区	Archichlamydeae		
ニレ科	クワノハエノキ	<i>Celtis boninensis</i> Koidz.	
クワ科	イスビユ	<i>Ficus erecta</i> Thunb.	
	ガジュマル	<i>Ficus microcarpa</i> L. f.	
	オオイタビ	<i>Ficus pumila</i> L.	
	アコウ	<i>Ficus superba</i> Miq. Var. <i>japonica</i> Miq.	
	ハマイスビワ	<i>Ficus virgata</i> Reinw.	
	シマグワ	<i>Morus australis</i> Poir.	
イラクサ科	ノカラムシ	<i>Boehmeria nivea</i> Gaudich f <i>viridula</i> Hatusima	
ウマノスズクサ科	リュウキュウウマノスズクサ	<i>Aristolochia liukiuensis</i> Hatusima	
タデ科	ツルソバ	<i>Polygonum chinense</i> L.	
ヒユ科	ムラサキイノコズチ	<i>Achyranthes aspera</i> L. var. <i>rubrofusca</i> Hook. f.	
	イスビユ	<i>Amaranthus lividus</i> L.	
ナデシコ科	ウシハコベ	<i>Stellaria aquatica</i> Scop.	
キンボウゲ科	リュウキュウボタンズル	<i>Clematis grata</i> wall. var. <i>ryukyuenis</i> Tamura	
ツツラフジ科	コバノハスノハカズラ	<i>Stephania japonica</i> Miers var. <i>australis</i> Hatusima.	
クスノキ科	ヤブニッケイ	<i>Cinnamomum japonicum</i> Sieb.	
	ハマビワ	<i>Litsea japonica</i> Juss.	
	タブノキ	<i>Persea thunbergii</i> Kosterm.	
トベラ科	トベラ	<i>Pittosporum tobira</i> Dryand ex Ait.	
バラ科	ヒカンザクラ	<i>Prunus campanulata</i> Maxim.	
	ナワシロイチゴ	<i>Rubus parvifolius</i> L.	
マメ科	ギンネム	<i>Leucaena leucocephala</i> de Wit	
	タンキリマメ	<i>Rhynchosia volubilis</i> Lour.	
カタバミ科	カタバミ	<i>Oxalis corniculata</i> L.	
	ムラサキカタバミ	<i>Oxalis corymbosa</i> DC.	
ミカン科	ゲッキツ	<i>Murraya paniculata</i> Jack.	

科名	和名	学名	備考
	サルカケミカン	<i>Toddalia asiatica Lamk.</i>	
トウダイグサ科	アカギ	<i>Bischofia javanica Bl.</i>	
	オオシマコバンノキ	<i>Breynia officinalis Hemsl.</i>	
	ツゲモドキ	<i>Drypetes Karapinensis Pax &amp; Hoffm.</i>	
	トウダイグサ	<i>Euphorbia helioscopia L.</i>	
	シマニシキソウ	<i>Euphorbia hirta L.</i>	
	オオバギ	<i>Macaranga tanarius Muell. -Arg.</i>	
	クスノハガシワ	<i>Mallotus philippensis Muell. -Arg.</i>	
ウルシ科	ハゼノキ	<i>Rhus succedanea L.</i>	
ニシキギ科	マサキ	<i>Euonymus japonicus Thunb.</i>	
アワブキ科	ヤンバルアワブキ	<i>Meliosma oldhamii Maxim. var. rhoifolia Hatusima.</i>	
クロウメモドキ科	リュウキュウクロウメモドキ	<i>Rhamnus liukuensis Koidz.</i>	
ブドウ科	テリハノブドウ	<i>Ampelopsis brevipedunculata Trautv. var. hancei Rehd.</i>	
	エビズル	<i>Vitis ficifolia Bunge</i>	
ホルトノキ科	ホルトノキ	<i>Elaeocarpus decipiens Hemsl.</i>	
オトギリソウ科	フクギ	<i>Garcinia subelliptica Merr.</i>	
ウコギ科	リュウキュウハリギリ	<i>Kalopanax pictum Nak. var. luchuensis Nemoto</i>	
ヤブコウジ科	モククチャバナ	<i>Ardisia sieboldii Miq.</i>	
	シマイズセンリョウ	<i>Maesa tenera Mez</i>	
サクラソウ科	リュウキュウコザクラ	<i>Androsace umbellata Merr.</i>	
カキノキ科	リュウキュウガキ	<i>Diospyros maritima Bl.</i>	
モクセイ科	ネズミモチ	<i>Ligustrum japonicum Thunb.</i>	
ヒルガオ科	ノアサガオ	<i>Ipomoea acuminata Roem. &amp; Schult.</i>	
ムラサキ科	チシャノキ	<i>Ehretia acuminata R.Br. var. obovata Johnston.</i>	
クマツヅラ科	オオムラサキシキブ	<i>callicarpa japonica Thunb. var. Luxurians Rehd.</i>	

科名	和名	学名	備考
	ランタナ	<i>Lantana camara</i> L. var. <i>aculeata</i> Moldenke	
	ミツバハマゴウ	<i>Vitex trifolia</i> L.	
ナス科	ヤコウカ	<i>Cestrum nocturnum</i> L.	
	テリミノイヌホウズキ	<i>Solanum alatum</i> Moench.	
	フサナリツルナスビ	<i>Solanum seaforthianum</i> Andr.	
ゴハノハグサ科	トキワハゼ	<i>Mazus pumilus</i> v. Steenis	
アカネ科	ヘクソカズラ	<i>Paederia scandes</i> Merr.	
	ナガミボチョウジ	<i>Psychotria manillensis</i> Bartl.	
スイカズラ科	サンゴジュ	<i>Viburnum odoratissimum</i> spr. var. <i>awabuki</i> K. Koch	
ウリ科	オキナワズズメウリ	<i>Diplocyclos palmatus</i> C. Jeffrey	
キク科	ホウキギク	<i>Aster subulatus</i> Michx.	
	タチアワユキセンダングサ	<i>Bidens pilosa</i> L. var. <i>radiata</i> Scherff.	
	オオアレチノギク	<i>Erigeron floridulus</i> Sch.-Bip.	
	ツワブキ	<i>Farfigium japonicum</i> Kitam.	
	アキノノゲシ	<i>Lactuca indica</i> L.	
	セイヨウタンポポ	<i>Taraxacum officinale</i> Weber	
	オニタビラコ	<i>Youngia japonica</i> Dc.	
単子葉植物	Monocotyledoneae		
タコノキ科	アダン	<i>Pandanus odoratissimus</i> L. f.	
イネ科	ダンチク	<i>Arundo donax</i> L.	
	バラグラス	<i>Brachiaria mutica</i> Stapf.	
	メヒシバ	<i>Digitaria ciliaris</i> Koel.	
	チガヤ	<i>Imperata cylindrica</i> Beauv. var. <i>major</i> C. E. Hubb.	
	ススキ	<i>Miscanthus sinensis</i> Anders.	
	エダウチチヂミザサ	<i>Oplismenus compositus</i> Beauv.	
	オガサワラスズメヒエ	<i>Paspalum conjugatum</i> Berg.	
	ナビアグラス	<i>Pennisetum purpureum</i> Schumach.	

科名	和名	学名	備考
	ツノアイアシ	<i>Rottboellia exaltata</i> L. f.	
	ヨシスキ	<i>Saccharum arundinaceum</i> Retz.	
	ネズミノオ	<i>Sporobolus fertilis</i> W. D. Clayton	
カヤツリグサ科	アオスゲ	<i>Carex breviculmis</i> R. Br.	
	コゴメスゲ	<i>Carex brunnea</i> Thunb.	
ヤシ科	クロツグ	<i>Arenga tremula</i> Becc. var. <i>engleri</i> Hatusima	
	ピロウ	<i>Livistona chinensis</i> R. Br. var. <i>subglobosa</i> Becc.	
サトイモ科	オウゴンカズラ	<i>Raphidophora aurea</i> Birdsey	
	クワズイモ	<i>Alocasia odora</i> Spach	
	ミツバカズラ	<i>Philodendron trifoliatum</i> Schott	
ツユクサ科	シマツユクサ	<i>Commelina diffusa</i> Burm. f.	
ユリ科	テッポウユリ	<i>Lilium longiflorum</i> Thunb.	
	オキナワサルトリイバラ	<i>Smilax china</i> L. var. <i>Kuru Sakaguchi</i> ex Yamamoto	
ショウガ科	ゲットウ	<i>Alpinia speciosa</i> K. Schum.	
ラン科	ユウコクラン	<i>Liparis formosana</i> Reichb. f.	

## 2. 地質・地形調査

室川貝塚一帯は琉球石灰岩の転石(0.5~5.0m前後)が地表面に点在しているのと埋まっているのが見られました。また馬上原遺跡付近の米軍基地が撤去されて後、その崖上から投棄されたと思われる建築廃材のセメント・ブロック塊等の現代遺物も多数転がっており、礫と転石は室川貝塚崖下地区で最も多く発掘調査も困難でした。その詳細は次回の「室川貝塚崖下地区と馬上原遺跡」で報告します。

本貝塚の東地区では、地表面に転がっている大小の礫とセメント・ブロック塊が発掘中にずれが生じ危険な状況が発生しました。その対応として下方の住宅地域へ被害が及ばないように重機で緊急な土盛りの安全対策を行いました。

この一帯の丘陵と斜面は、沖縄県土木建設部によって地滑り災害地帯に指定されています。今回報告の東地区でも、遺跡形成時の地すべりと思われる痕跡が発掘の土層断面から観察されました。詳細は後述第IV章Ⅲの順序で述べます。

### 3. ハブ対策の調査

室川貝塚一帯では、斜面の市営団地と周辺の民家、崖上の沖縄市役所と消防庁舎付近で過去にハブの捕獲・咬傷事例があります。また、室川貝塚崖下地区の茂みでハブトウヤク（ハブ捕獲人）がヒヨコをおとりに捕獲箱を仕掛けているのも確認しており、この一帯がいかにハブの多い地域であるかを窺わしめます。

ハブ対策の調査は、遺跡の範囲確認調査と発掘調査に伴い植物の伐採が生じたため、現場の作業員や見学者の安全を考慮して実施。調査は大谷勉氏に依頼し主に生息ポイントのチェックを行いました。しかし、調査の時間帯が昼間のためハブは見られませんでした。伐採時と発掘中にハブ・アマミタカチホ・メクラヘビを捕獲しています。確認などはされていないが他に生息可能なのはアカマターが考えられます。

## 第Ⅱ章 環 境

### I 沖縄市の位置

沖縄県は鹿児島島の南方約583km、台湾の基隆から約644kmに位置します。本市は沖縄本島の中央部に位置し、本庁舎は東経127度48分、北緯26度19分にあり那覇市の北方約22km、車でおよそ1時間の圏内にあります。市域は東西7.62km、南北13km。海拔は最高標高210m、最低標高0.1m。総面積48.70km<sup>2</sup>で軍用地が37.47%の18.15km<sup>2</sup>となっています。（人口11,385/世帯数35,409（1992年12月1日現在）

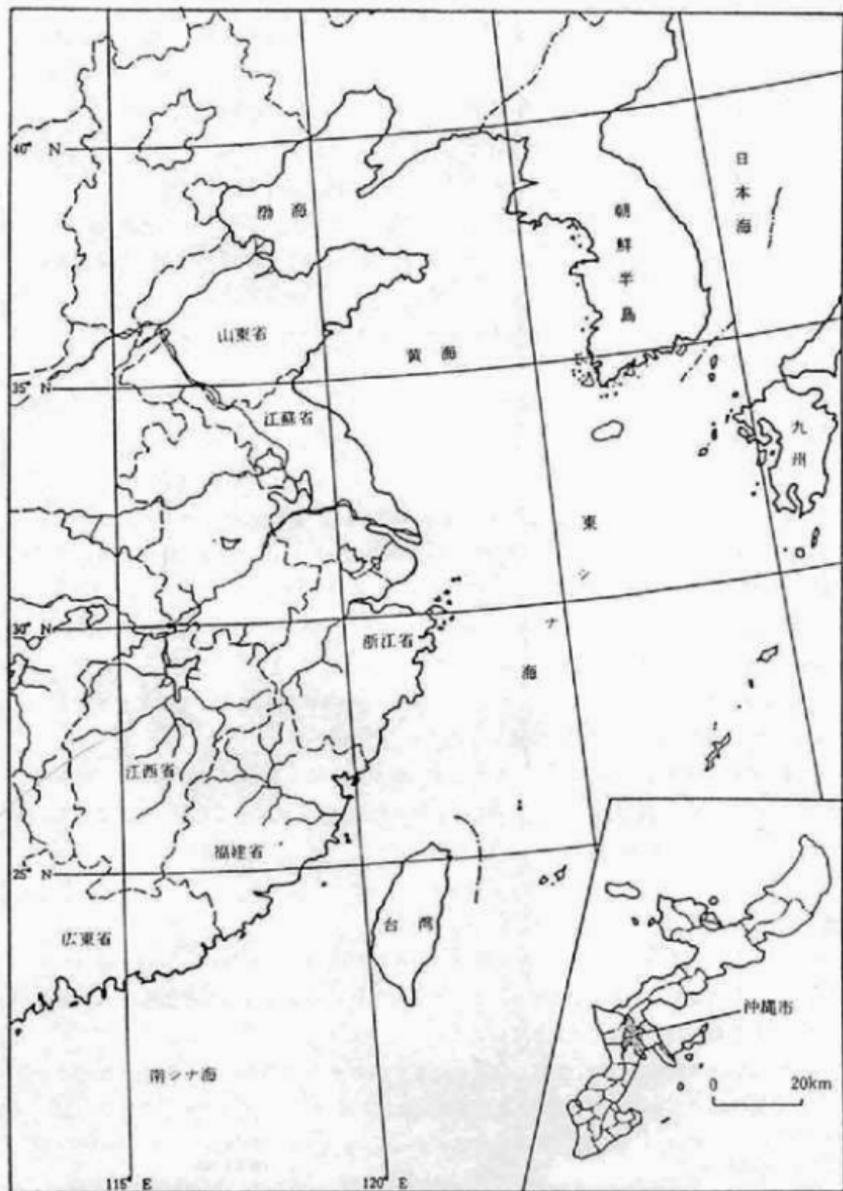
周辺の市町村として、東は具志川市、西は北谷町、嘉手納町、読谷村、南に北中城村、北は石川市、恩納村の7市町村に隣接します。

地勢は本市の字与儀から泡瀬二区一帯の東部地域を除けばおおむね丘陵台地で、地質は珊瑚石灰岩土壌、泥岩土壌、国頭礫層土壌、沖積層土壌に大別することができ、この地質分布は本島北部と南部の境目と言われています。

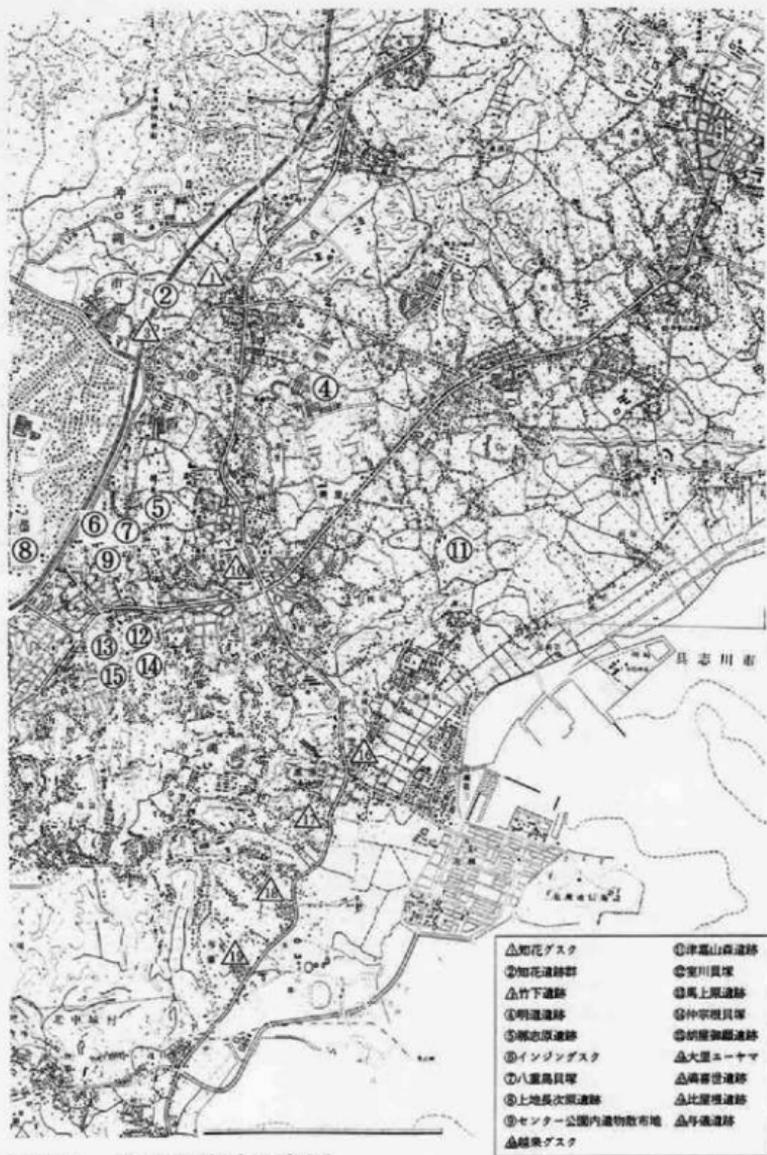
### II 室川貝塚一帯の地理的環境

室川貝塚は琉球石灰岩直下の標高90.00～100.00mの緩斜面に立地します。貝塚一帯の土壌は、島尻層のクチャを基盤層にその上はクチャの風化したジャガールと島尻マーチが堆積しており貝塚は後者に形成されています。

貝塚背後の琉球石灰岩丘陵の崖は、北側に位置するコザボウリング場付近から南側のコザ中学校一帯にかけ約1.00km走行しその沿線は湧水が豊富です。周辺の湧水として、室川井（ムルカーガー）、照又井（チーラマタガー）、富里井（フサトガー）、ナヂチガーが分布しそれぞれ遺跡が近くに位置します。遺跡と隣接する湧水は、室川貝塚と室川井、仲宗根貝塚と照又井、胡屋御願遺跡（現コザ中学校一帯、燻滅？）と富里井及びナヂチガー



図版 1 沖縄市の位置



図版 2 沖縄市遺跡分布図

などが揚げられ胡屋・仲宗根道友会が井御願（カウガン）を、旧暦8月10日に行っています。

過去6回の調査で貝塚からは先史時代の人工遺物に混ざって貝殻・魚骨・イノシシ骨等の食糧残滓が出土しています。魚貝類の採集地は、東海岸の太平洋と西海岸の東シナ海が考えられ、東海岸は具志川市塩屋から北中城村渡口に至る海岸線で貝塚から最短2.50km（現海岸線）。西海岸は嘉手納町比謝川河口一帯から北谷町桑江にかけてのリーフとイノーが発達した海岸線で最短5.00kmを測り両海岸とも近い距離にあります。

イノシシは沖縄本島では北部の山々でしか見ることができませんが、かつては沖縄市にも生息していました。民俗調査で池原と登川集落の古老から聞けた伝承によりますと、市域北側の（現東南植物楽園周辺）では第二次世界大戦後も捕獲事例があります。さらに時代を遡る1945年以前に現瑞慶山ダム付近に位置していた旧倉敷集落では、民家にイノシシが出没し飼育のブタとの交配種（イノブタ）が生まれたと言われます。

イノシシが好むシイ林の市内分布は、先述の東南植物楽園一帯から瑞慶山ダム付近、嘉手納基地に接する米軍弾薬庫地区から地勢北西端の通称クルクー山（別称クールー山）に及びます。特にクルクー山ではシイ林の小規模な群落が見られ植物相も本島北部的です。植物相の特異性は「天願構造線」と称する本島北部と中南部の地質構造の断層が北谷町砂辺から市内知花グスクを横切り具志川市天願に至り走行しているのが反映されます。

室川貝塚と同じ年代の周辺遺跡は、距離的に近いのが馬上原遺跡・仲宗根貝塚・胡屋御願遺跡で400m圏内に点在します。やや離れて北方向約1.00kmに「八重島貝塚」、同方向約2.90kmに「知花遺跡群」、北北東方向約2.60kmに「明道遺跡」、北東方向約2.80kmに「津嘉山森遺跡」等が1.00～3.00km内に分布し、室川貝塚背後の崖上に位置する馬上原遺跡からはそれぞれが指呼の間に眺望できかなり見晴らしがよいです（図版2参照）。

1960年代初期の米軍撮影航空写真（冒頭PL参照）によりますと、室川貝塚下方の市営団地から室川小学校にかけての低地には田畑の区画が明瞭な旧地形が見られます。それと対比的に琉球石灰岩台地上の馬上原遺跡一帯には広大な米軍基地が広がっており、この写真は当地の第二次世界大戦前と戦後の景観を同時に類推できる良い資料です。

◀室川貝塚一帯の古環境は戦後の急激な都市化によって破壊され判然としません。かろうじて当時を類推できるのは、近年まで市内にイノシシが生息していた事例、沖縄本島北部的な要素の植物相の分布、室川貝塚出土の自然遺物等でそれらに魚貝類採集地と周辺の遺跡分布を加味しますと当地の先史時代における古環境がおぼろげながらも想起されます。▶

## 第三章 室川貝塚一帯の諸々の動向

室川貝塚と馬上原遺跡一帯の考古学的な調査ならびに関連事項を述べ今後の基礎資料とします。

### I 第二次世界大戦後から現在までの諸開発

遺跡一帯は終戦後、米軍基地に接収されます。返還後は区画整理事業が行われその後、住宅・ホテル・店舗・市営団地・コザ市役所庁舎などの建設ラッシュが進み、さらに今回の新庁舎建設など、諸開発がめじろおして遺跡の保存状況もそれらにかなり左右されてきました。

#### 1. 米軍基地

施設名「キャンプコザ」で俗称・クロンボー部隊とも称します。おおまかな範囲はコザ中学校付近から国道330号線を隔ててパークアベニュー東側一帯まで至り、基地面積192.169㎡で施設返還は1963年8月31日です。(沖縄市水道局局長・仲宗根健昌氏、同管理課長・仲宗根栄久、沖縄市建設部次長・知念良雄氏、以上3名の方々の御教授)

#### 2. 区画整理事業

基地解放後は「コザマリノキャンプ土地区画整理組合」が造成を行いました。

#### 3. コザ市役所庁舎の建設

最初のコザ市役所庁舎は、胡屋十字路南側の沖縄警察署隣り旧越來村役場跡に1958年建設され、その後1969年に今の場所へ移りました。現在の沖縄市は1974年に美里村とコザ市が合併して誕生しました。

### II 遺跡との関わりに伴う開発調整

室川貝塚周辺の個人有地において1982年～1984年にかけて周知の遺跡範囲外で分譲住宅と公共施設建設の動きがありました。それに伴い文化財有無の調査及び調整と協議を行いました。

#### 1. 室川貝塚東地区

##### A. 1982年度の調整「室川ハイッ宅地造成」工事計画に伴う調整と協議

昭和57年11月19日付、土地開発分譲建築設計施工・(代表者) 富山良一氏より「埋蔵文化財の有無」について照会を受けました。

計画地は周知の室川貝塚範囲からかなり掛け離れていましたが、隣接地として試掘調査を実施。試掘穴の一部から石器材片・土器が出土したので、新発見の遺跡として「室川貝

塚東地区」と命名しました。調査結果を昭和57年12月2日付、沖市教社第159号で回答、その後計画は断念されました。

- B. 1984年度の調整、先述と同一敷地に再度「室川ハイツ宅地造成」工事計画が浮上、それに伴う調整と協議

昭和60年3月7日付、(代表者)徳元行雄・糸満市字米須211番地より照会を受けました。昭和60年3月12日付、沖教文第111号で埋蔵文化財が包蔵されている旨を回答、その後計画は断念されました。

## 2. 室川貝塚西地区

1983年度の調整「室川市営団地の集会所建設予定」に伴う調整と協議

昭和58年6月30日付、沖縄市建設部より照会を受けました。先述の東地区同様の取り扱いで試掘調査を実施。埋蔵文化財等は確認できなかったため、昭和58年7月18日付、沖市教文第43号で回答、その後計画は断念されました。

## III 総合庁舎に伴う範囲確認調査

新庁舎敷地は、1982年度に「室川ハイツ宅地造成工事」が計画されたパレス会館崖下の室川貝塚東地区緩斜面から室川貝塚西地区さらに崖上の現庁舎と周辺の駐車場、消防庁舎、水道局庁舎、パレス会館等を含む広大な区域で面積22,000㎡を有します。

範囲確認調査は新庁舎の敷地全域を対象としましたが地区によっては調査済の箇所もありました。例えば1982年度と1983年度の開発調整の際の調査地点など、後述の1978年度文化庁補助事業による室川貝塚本体部周辺の調査等もそれに含まれます。

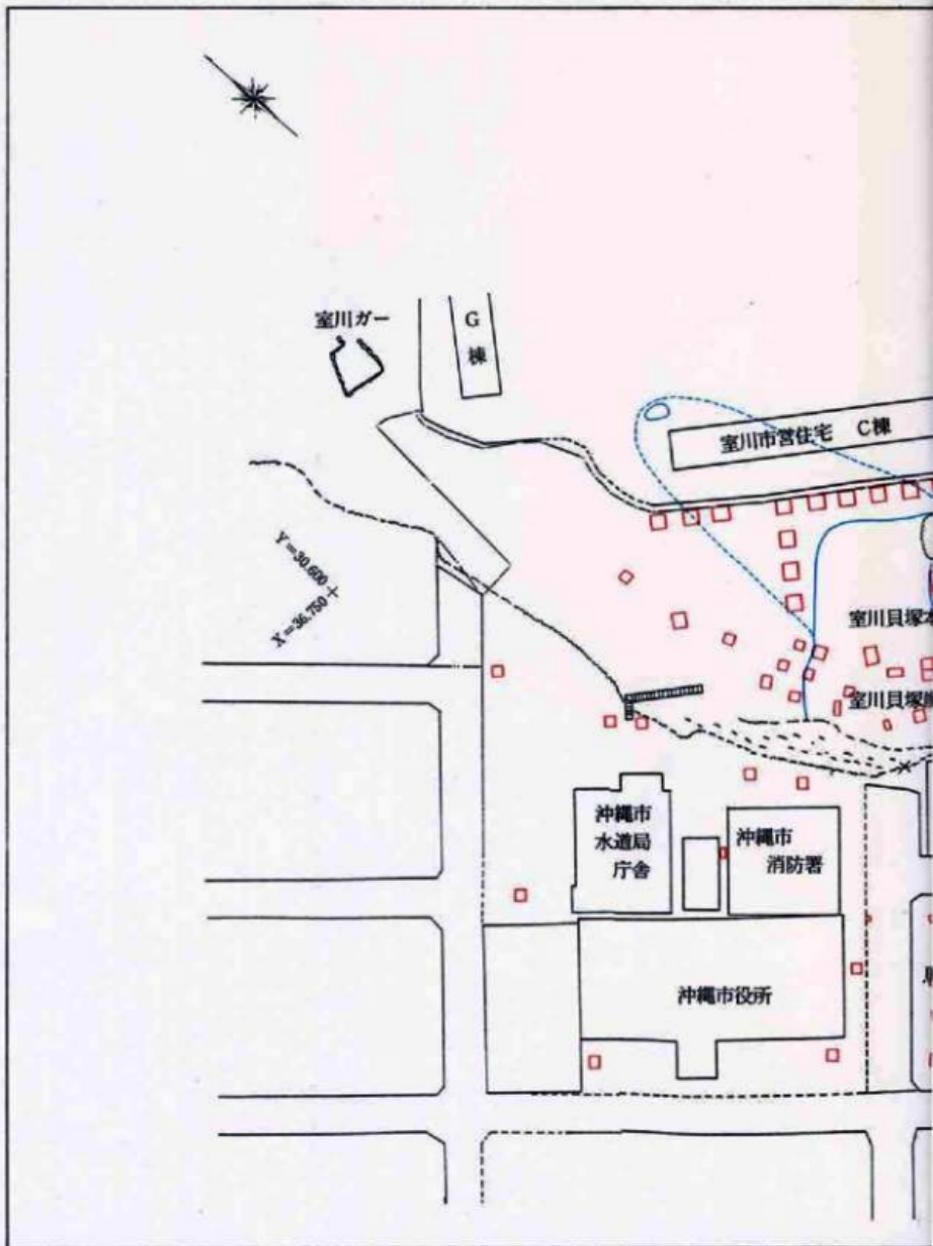
以上の年次的な諸々の調査で室川貝塚一帯の保存状況と詳細な範囲が分かりました。さらに周辺遺跡との関連も把握できました。(図版3 室川貝塚一帯平面図)以下、現本庁舎周辺と室川貝塚一帯の範囲確認調査の概略を述べます。

### 1. 現本庁舎周辺の調査(1986年9月9～11・13日実施)

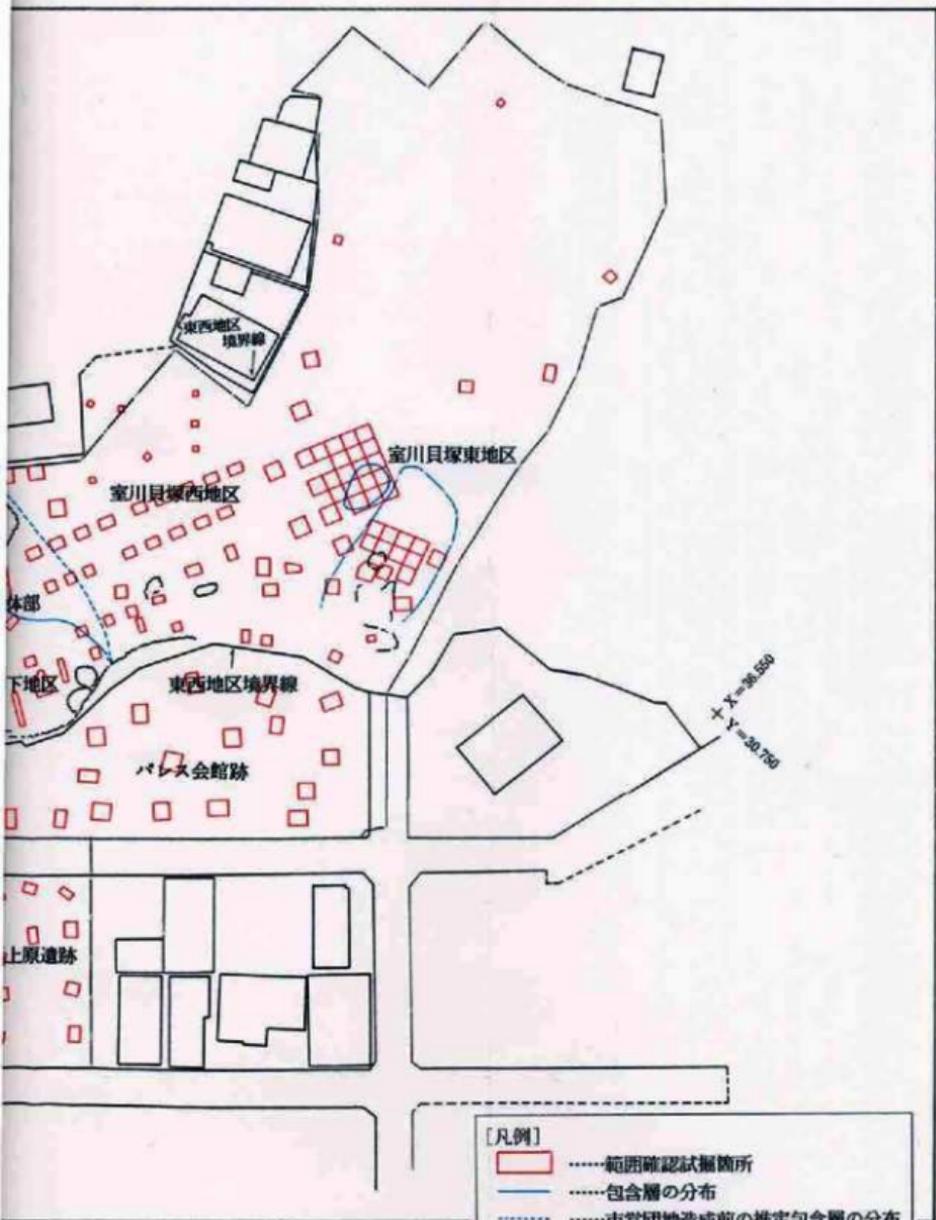
水道局庁舎と消防庁舎の周辺駐車場及び空地で調査を実施。埋蔵文化財は確認できず基礎層の島尻マーチ直上まで造成、もしくは攪乱土で埋土されていました。

### 2. 室川貝塚一帯の調査(1988年12月1日～1989年8月30日実施)

パレス会館崖下の緩斜面から室川貝塚北端の室川市営団地G棟に至る広範囲を調査。この調査で室川貝塚本体部の保存範囲、さらに室川貝塚崖下地区と室川貝塚東地区の残存状況と広がり把握しました。



図版 3 室川貝



家一帯平面図

### 3. パレス会館と本庁舎脇駐車場の調査（1989年8月1日～3日実施）

パレス会館と本庁舎脇駐車場が1989年7月に更地となりました。土地所有権と権利関係の一切が沖縄市役所に取得されましたので、この段階から調査を実施。この一帯は周知の室川貝塚範囲外でありましたが聞き取り調査によって遺跡の存在を予想していましたので、それが適中しました。この遺跡は新発見の遺跡として「馬上原遺跡」と命名、調査の詳細な報告は次回にゆだねます。

## IV 発掘調査

調査は学術調査と総合庁舎に伴う調査に区分されます。前者はさらに沖縄国際大学文学部社会学科考古学研究室（以下、沖国大考古学研究室と称す）と沖縄県教育委員会の調査に細分されます。

### 1. 学術調査

#### A. 沖縄国際大学考古学研究室の調査

調査は考古学専攻生の実習として取り組まれ、室川貝塚本体部を中心に第五次に渡る発掘調査が実施されました。県内の遺跡で学術調査が長期間行われた唯一の事例です。

#### B. 調査年次

- ①第一次発掘調査 1974年12月26日～1975年1月5日
- ②第二次発掘調査 1975年7月8日～7月18日
- ③第三次発掘調査 1976年7月4日～7月21日
- ④第四次発掘調査 1977年8月1日～8月23日
- ⑤第五次発掘調査 1978年8月8日～9月4日

#### C. 調査報告書の発刊

「沖国大考古」	創刊号	1976年	室川貝塚第1次発掘調査速報 沖縄国際大学考古学研究室
「沖国大考古」	第2号	1978年	室川貝塚第1～3次発掘調査概報 沖縄国際大学考古学研究室
「沖国大考古」	第3号	1979年	室川貝塚第3～4次発掘調査概報 沖縄国際大学考古学研究室
「沖国大考古」	第4号	1980年	室川貝塚第2～4次発掘調査概報 沖縄国際大学考古学研究室
「沖国大考古」	第5号	1981年	室川貝塚第3～5次発掘調査概報 沖縄国際大学考古学研究室
「沖国大考古」	第6号	1982年	室川貝塚第4次発掘調査概報 沖縄国際大学考古学研究室

## 2. 当教育委員会の調査

遺跡の範囲を確認するための文化庁補助事業調査で沖国大考古学研究室と合同で室川貝塚本体部を中心にその周辺も発掘調査しました。

### A. 調査年次

1978年8月1日～9月4日

### B. 調査報告書の発刊

「室川貝塚」 沖縄市文化財調査報告書第1集 1979年3月 範囲確認調査報告書  
沖縄市教育委員会

## 第IV章 出土遺物及び調査の概要

### I 土器の分類

本貝塚はあらゆる時代の人々にとって生活するのに適した環境だったようです。そのために出土する遺物も沖縄貝塚時代（約7000年前～12世紀頃）からグスク時代（12世紀～16世紀頃）を経て現代に及んでいます。このように異なる時代・時期の複合遺跡である本貝塚の資料の報告では、時代・時期を区別することが問題になります。

ところが本報告で紹介する土器資料は摩耗した小破片が多数を占めています。編年型式ごとに分類整理を進めると「型式不明」が多数を占めることになり、今度は不明内容の細分が必要となります。そのため、本分では編年の指標とされる土器を型式編年を基に数型式をまとめて9群に大別することにしました。

層序および土器以外の遺物の記述を進める上でも、この土器の分類を目安として記述を進めていきます。

#### 第1群室川下層式土器

本貝塚本体部の最下層の地山近くで単独に出土しました。稀に5mm程の薄手も有りますが、普通は10～12mmと厚手の土器です。一見した様子は褐鉄のようで固いイメージを受けます。器形は深鉢の尖底土器であることが報告されています。施文具や文様などからさらに細分可能ですが、本文では報告する資料点数が少ないので一括して紹介することにしました。

#### 第2群面縄前庭式土器グループ

面縄前庭式土器は徳之島伊仙町面縄第4貝塚前庭部出土の土器を標式とするものです。凸帯と沈線を組み合わせた文様が施されています。器種は口縁で強く外反する肩の張った深鉢が一般的ですが壺形も見られます。この土器と同じ系統に属する土器は沖永良部島神野貝塚、伊是名村具志川島で出土し、数種に細分されることが知られています。

第1群土器は厚手ですが、このグループは厚さ4～5mmほどの灰褐色薄手で他の土器とは一見ただけで区別できます。この群も第1群と同様に資料が少ないので一括して取り扱います。第1群と第2群の底部は丸ないし尖底で第3～5群が平底であるのと対照的です。

### 第3群伊波・荻堂式土器

この群は伊波式土器と荻堂式土器<sup>III</sup>をひとつにまとめます。両者は沖縄貝塚時代を代表する土器で、綾杉文や彫歯状文と列点文などで構成されます。山形口縁あるいは口縁のコブ状の突起が特徴的な平底の深鉢形です。このグループの器種は沖縄の土器の中でも多くの種類が報告されています。

器形や文様の構成などによって両型式に区別されますが、伊波式から荻堂式への変化は緩やかで、小破片では区別することができません。砂質の胎土で触るとザラザラし、厚さは5～8mmです。混和材は角礫状の石英粒が主体となっています。なお、伊波・荻堂式土器は沖縄本島周辺ではどの遺跡から出土する土器も同様な胎土や混和材が用いられるようで、広い地域の土器に共通性が見られます。

### 第4群大山式・室川式土器

大山式<sup>III</sup>は宜野湾市大山貝塚の第Ⅱ類土器を標識として設定されました。このⅡ類土器は荻堂式土器の伝統的な文様や器形を受け継いでいます。しかし、荻堂式の山形口縁やコブ状突起が消えて平口縁となり、文様も水平方向に押捺刻文を施すだけの簡素な土器へと変わっています。

室川式は室川貝塚Tトレンチ16・17区の下部貝層を代表する深鉢形の平底土器です。器形は口縁部で軽く外反する例や、口縁から器体中央付近までほぼ真っすぐの円筒状で、胴部から底部へは緩やかな曲線を描いて収縮していきます。大山貝塚の第Ⅲ類や第Ⅳ類土器と同時期と理解されます。大山式(Ⅱ類)が荻堂式と同様に胴の張るのに対し室川式はやや開く深鉢となっています。どの様な器種の変化がある資料が少ないのが現状です。

大山・室川式の頃から土器の胎土・混和材が遺跡ごとに異なっているのが観察されます。本貝塚でもサンゴ砂と予想される石灰質の白粒を混和材としたため耐久性が極端に悪くなっている例もあります。この傾向は沖縄本島の中南部の琉球石灰岩台地に立地した遺跡で特に目立ちます。一例として浦添市の仲西貝塚では、包含層断面から顔を除かせている土器片より土の方がはるかに固くて採集が困難でした。

当時の社会に土器を作る材料の供給を困難にする問題が起きたのではないかと想像されます。土器の文様も口縁近くの狭い範囲に限られ、無文・単純化の傾向が目立っています。

### 第5群カウチバンタ式土器

国頭村宜名真のカウチバンタ<sup>III</sup>貝塚出土の土器に対して多和田眞淳氏が設定しました。口縁

に沿って鉢巻きを巻いたように市販されている植木鉢の口縁部に良く似ているのが特徴です。平口縁・平底で深鉢形の器形をしています。

多和田眞淳氏は「外部有段口縁土器」と付記しています。深鉢形以外としては壺形もあることが知られています。本文では口縁外側の下方で明確に段が見られる例をこのグループに含めました。有文と無文があり、本貝塚と具志川市地荒原貝塚では有文が多く、伊平屋村久里原貝塚では有文がほとんど出土していません。

本貝塚では混和材と胎土の観察しますと第4群土器とはほぼ同様な例がほとんどです。両群は編年上では平行して存続する期間が考えられるのではないのでしょうか。

なお、本報告および以前に報告された資料では面縄西洞式は稀です。しかし、胎土や混和材などが共通する場合は面縄西洞式がこの群に含まれてしまうと予想されます。また、本貝塚では第4・5群土器には少数ながら奄美諸島の代表的な面縄東洞式の文様の影響と考えられる施文技法が見られる例があります。同期の沖繩土器文化に北（奄美諸島など）からの影響が指摘されています。

#### 第6群宇佐浜式土器

国頭村辺戸の宇佐浜貝塚の土器を標式とし、口縁部の断面を丸ないし三角状に肥厚させています。多和田眞淳氏が設定されたこの群の土器は、奄美大島の「宇宮上層式土器」のグループです。器種は深鉢と壺形があり、稀な例として皿の出土例があります。底は丸底や尖底あるいは底径が2～4cmで底の面が丸くなったものです。なお、この群に大半の室川上層式が含まれると思います。

胎土を観察すると混和材が表面から抜け落ちたり、溶けて無数の小空洞ができた通称「器面がアバタ状の」と呼ばれる脆弱な種類。亜円形で1mm前後と大きさの揃った石英粒を混和材に用いた堅緻なものと2種類に分けられます。なお、前者は本貝塚ではさらに二つに区別可能（次群参照）です。肥厚部でない部分の厚さは4～7mm。

他遺跡出土の器面の保存状況の良い資料で観察すると仕上げは、外面を竹などの籠で「撫で」が施され、丁寧な仕上げの例が目立ちます。この仕上げのためか一般に無文の資料が多いようです。なお、このグループと考えられる喜念I式土器は、本貝塚ではこれまで資料が少数です。

#### 第7群仲原式土器

与那城村伊計島仲原遺跡出土の土器を標式として設定されています。器種は深鉢形と壺形などがありますが深鉢が主体です。仲原遺跡の資料で第6群以降の土器から沖繩貝塚時代後期への土器編年が大きく進展しました。それ以前は那覇市の天久遺跡や読谷村のアカインコ遺跡などで外耳の破片やカヤウチパンタ式に類似する資料の出土例がありました。読谷村渡具知木綿原貝塚の第1号箱式石棺墓内から底部の欠損したこのグループに属する土器が出土し、これら

は弥生時代前期の頃と予想されました。

室川貝塚東地区では一部で第3群が主体の場所を除いては、この群が最も多数出土しました。しかし、得られた資料は小破片が大半のため器形を復元可能な例は有りません。口縁や外耳の資料から胎土、混和材、器面の状況で3種類が確認できました。

A類：厚さは4～6mmと薄手が多く、器面にアバタ状に径が1～3mmの無数の小さな穴が見られ、割れ口でもコルクのような多孔質構造になっています。その密度からサンゴ砂粒を混和材に使用した可能性が高いと考えられます。

なお、第5群と第6群でこれよりもはるかに密度が薄く、器面に点々とアバタ状の小穴が見られる例があります。しかし、この場合は採集した粘土に偶然に混じていた可能性が大きいと判断されます。両者の区別は明瞭です。

B類 混和材に4mm以下の石英粒を用いたもの。第6群混和材の石英粒との大きな違いは角礫状で粒の大きさが不揃いの点です。厚さ5～8mm程です。

C類 混和材の大きさが0.5mm以下と非常に細かいのが特色です。厚さは5～10mm前後で厚手の例が目立ちます。

#### 第8群フェンサ下層式土器

本報告で紹介するこの群の資料は僅かです。フェンサグスク貝塚<sup>III</sup>の下層から出土した「くびれ平底」の甕形土器を標式としています。この群の器種には壺形もあり、口から肩にかけての形がフラスコのように撫で肩なのが特徴です。また、甕形土器の中には口縁上に突起が有る例も知られています。

第8群と次群の第9群と共に最も堅固なグループです。胎土は緻密で混和材も1mm以下のものが大半です。ほとんどすべての資料が摩耗が顕著で、底部資料は確認可能ですが口縁は無文胴部との区別が困難です。

#### 第9群フェンサ上層式土器

現在では普通、沖縄の時代区分で「グスク時代」の土器を総称する意味で使われています。前群と同時の発掘調査で同貝塚の上層から出土した一群の土器を標式としています。器種としては鉢形、壺形、碗形などが知られています。これらの底部は平底が普通で、底部から胴にかけて「削り」の手法が用いられるのが、この時代以前の沖縄の土器と大きく異なっています。

この群の土器も胴部小片は数十片が確認されたが、口縁、底部の資料は僅かでした。混和材としては貝殻などの2～5mmほどの石灰質粒を混入した例、2～4mm前後の石英や千枚岩などを混入した例があります。また「滑石」の粒を混和材に用いた底部小片が一点得られています。

## II 室川貝塚範囲確認調査

### 1. 概要

範囲確認調査の資料は表面採集資料と発掘資料を合わせるとコンテナBox（縦50横30深15cm）で量ると5箱分余となります。無文割部の片数は3万点以上となります。ただし、その中には東地区と崖下地区の発掘調査区域の資料は含まれません。発掘調査区域での試掘調査資料は、それぞれの区で報告に含めて資料の分離と作業の重複を避けました。※試掘において未攪乱遺物包含層の確認された所は、記録保存発掘調査の対象区域に含まれましたので、本項（範囲確認調査）の紹介資料は全部が攪乱層あるいは表採資料です。

本貝塚の遺物包含層の分布状況を図版3「室川貝塚一帯平面図」に示しました。本体部と東地区の両地区ともに包含層は琉球石灰岩台地崖縁から下方に及んでいます。今回の調査ではその広がりが島尻マージの2次堆積の分布と見事に一致していることが明らかになりました。

本体部の西から北西では表土あるいは覆土の下層は直ちに基盤層である島尻層のクチャ（青灰色泥岩）となっています。本体部と東地区の間はクチャあるいはその風化土のジャーガルが分布しています。貝塚本体部は島尻層が谷状になった所へ崖上の台地から赤土（島尻マージ）が流れ込んで堆積しています。その2次堆積したマージの上に包含層が分布しています。

先述のように本報告の資料は、風化や摩耗したものがかなりの量を占めています。図版の作成で当初は拓本を予定していました。ところが風化や摩耗の程度により、拓本の濃度に著しい差が見られるという問題が生じました。特に土器混和材が表面に露出し、ザラザラの状態になっているものは良い拓本が取れません。そこで途中からは拓本を止めてすべて実測図を採用することにしました。これは後述の東地区も同様です。

### 2. 出土遺物（土器）

#### 第1群（室川下層式土器）・第2群（面鏡前庭式グループ）

第1群の中で図示できるものは6片（図7-1~4、図33-1,2西地区）だけで、他は無文の小片だけです。7-1は貝殻の腹縁など、7-2・3はヘラなどによる施文と観察されます。7-4は丸底の破片と思われる資料です。

第2群は僅かに2片（口縁部、頸部）（図7-5,6）だけです。両群が得られたのは、室川貝塚本体部の下方、室川団地C棟沿いの擁壁付近に限られました。これまでの発掘調査などを考慮しますと、この分布は沖縄国際大学考古学研究室で発掘したM・Sトレンチを中心とする狭い範囲に集中することが明らかになりました。

#### 第3群（伊波・荻堂式土器）

（図7-7、図8、図9、図10-1~4、図13-3~19、西地区）（図14-1~6東地区）

第3群は本貝塚で最も多数出土しています。特に本群の土器は遺物包含層の分布する場所から離れた試験穴でも採集されました。無文胴部なども含めた全土器資料の60%を越えるのは確実です。資料整理では、角が取れて丸くなった土器粒の中から文様の有無、口縁部あるいは底部の資料を選別しました。径が1cm以下の玉砂利状となった粒の量は土嚢袋で3袋ほどもありました。本報告では文様や形状の良い資料を図示しました。

**伊波式** 代表的な口縁に平行の列点・沈線文などの例(図7-7~14)。これに綾杉文を組み合わせた例、単に沈線による綾杉文だけではないかと考えられる例(図7-15~29, 図8-1~3西地区)(図14-1東地区)。

**荻堂式** 荻堂式に特徴的な肥厚した突起(図8-8~12西地区)、鋸歯状文の例(図8-13~19西地区)(図14-5, 6東地区)。

**その他** 山形口縁の頂部(図8-4~7西地区)(図14-2, 3東地区)。その他の資料(図8-20~34, 図9, 図10-1~4西地区)(図14-4東地区)として口唇部の施文など特徴の有るものと比較的大きい破片を図示しました。

### 第3・4群の不明土器(図10-5~16, 図19~21, 33, 図14-7~9, 図12-1~19西地区)

第4群と判断可能な資料はありません。第3群か第4群のいずれかに属するか不明の例。第4群の可能性の高いのは10-12~16です。同10-19, 20の2例は伊波式などの山形頂部とその近くの破片です。前者は施文具の先が斜めに切れ、後者は押し引しながら曲げる稀な施文手法例です。同21は削られた痕か凹線かが不明瞭です。同33は先端が二又(伊波・荻堂期)の施文具で「曲げる」手法が見られます。

底部の資料は胎土や混和材の検討では、ほとんどが3群の伊波・荻堂式土器の底部だと判断されます。この中で底径を推計できる例は1例だけです(図12-1)。なお、図12-19は第5群に含まれる可能性が有ります。

### 第5群(カヤウチバンタ式土器)(図10-22~27, 図13-20~22西地区)

この群の土器は西地区で得られ、東地区では採集されていません。図10-23は押し引しながら曲げる手法です。先述の同図20とこの土器は面縄東洞式の施文手法の影響を受けていると考えられます。図13-22は面縄西洞式になるのではないかと考えられる例です。

本群からは胎土に含まれる混和材に前群との違いが見られる様になります。石灰質白色細粒と輝きをもった黑色細粒が含まれるものが大半です。また、器面に細かい小さな穴や空洞が散見される例もあります。

#### 第4・5群の不明土器(図10-29~32、図13-23、26西地区)

4群と5群は外部で段があるか無いかという点を除くと文様・胎土・混和材などで共通する要素が多く、小片では区別できません。図10-30, 31は半截の竹管状の施文具で器面にはほぼ垂直に刺突されたと見られます。施文具先端部の形が良く残されています。伊波・荻堂式の一般的な手法である押引の施文例との違いが明瞭です。

#### 第6群(宇佐浜式土器など)(図11-13~25、図12-20、図13-24, 25, 27~31西地区)

本貝塚での宇佐浜式の分布密度は第3群に次いでいて、東西の両地区で採集されています。先述のように胎土・混和材に2種類があります。石英粒を含むものとアバタ状の器面との比率は5:1ほどになります。器面がアバタの例(図11-20~22)。

この群の底部は図12-20のような丸底あるいは尖底が普通ですが、今回、図13-31の平底が得られました。なお、比較的大形図13-24, 25, 29は崖下地区の資料です。

図11-16は胎土に金色の雲母を含み、他の土器と区別されます。類例は無文胴部資料にも稀で、沖永良部島などからの「移入品」と考えられます。「喜念I式土器」の特徴な細隆帯文が施されています。

#### 第5・6群の不明土器(図11-26, 27)

口縁の口唇部が欠損あるいは小片のために不明の例です。26は4~6群の不明とすべきですが取り敢えずここに含めました。27は石英粒混和材などの点では第6群と共通します。

#### 第7群(仲原式土器)(図11-28、西地区)(図14-15東地区)

本群は西地区では崖下地区の近くに集中する傾向が見られます。東地区では遺物包含層分布範囲内で多量に出土しています。

#### 第8群(フェンサ下層式土器)(図12-21~29、図14-16~21)

本貝塚での出土は表採を除くと西地区の崖際に集中します。東地区では口縁、底部などの採集例はありません。口縁部は図14-16の1例で他は底部だけです。底径は4~5cmです。製作時に穿孔した例(図14-21)は、底径が約3cmです。図12-29の小片は注口などの破片ではないかと考えられる例です。

#### 第9群(フェンサ上層式土器)(図11-30, 31、図14-22)

この群の土器の採集も少なく、前8群と関係するのではないかと感じられるが明確ではありません。3例とも壺形で単に内湾する無頸(図14-22)の例と口縁部がやや外反あるいは垂直に

立ち上がり、頸部のある例(図11-30, 31)の2種があります。

#### その他・不明土器など(図11-17, 18, 28, 図11-32)

宇宿下層式のグループが3点得られています。嘉徳1式の土器片(図11-17, 18)とかなり摩耗した面縄東洞式(図11-28)があります。

その他に弥生前期の壺形土器の頸部片(図11-32)では無いかと思われる例です。明赤褐色で焼成は良好で堅緻、胎土中に0.5mm前後の透明な石英粒が含まれています。崖下地区の発掘調査では「弥生前期」ではないかと想定される口縁部が出土しています。この資料との比較検討を予定しています。

### III 東地区発掘調査の層序・出土遺物

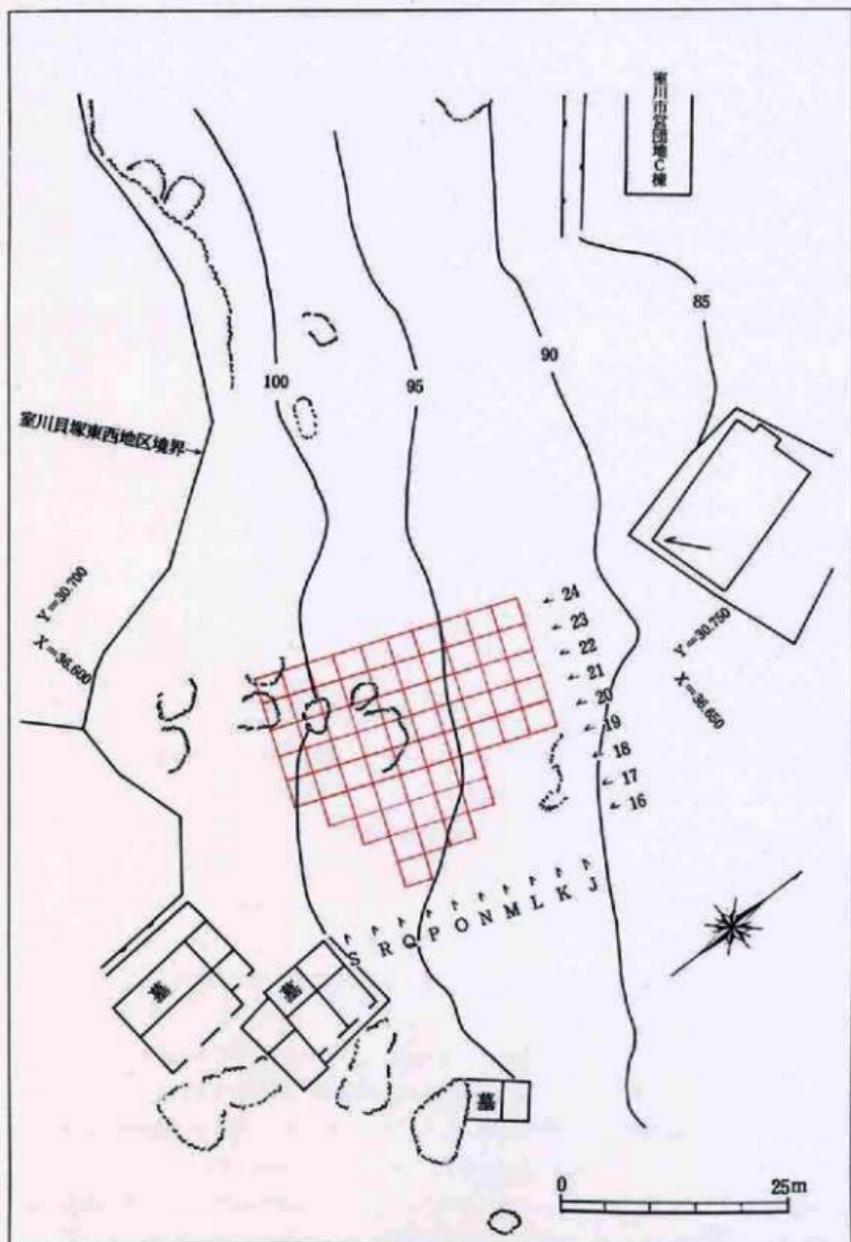
#### 1. 概要

本貝塚は室川貝塚の本体部から南東に約70m離れています。遺物包含層分布範囲の南東から東にかけては水脈があり、ここでは段々畑状に畑地や棚田として利用され田芋などが作られていました。そして、比較的平坦な北側は畑となっていました。上方の琉球石灰岩台地縁の崖に近づくにつれ傾斜が急になり、転石が多くなります。

本地区全体を見ると地滑りで運ばれた数mの巨大な石灰岩が赤褐色の島尻マージ土に半ば埋まった状態になっています。このマージ層は流れ込みによる二次堆積です。同層には仲原式土器を主体に宇佐浜式、伊波・萩堂式の小破片や石材片などが包含されています。これらの土器片は仲原式を除いて、ほとんどが4cm以下の小破片です。割れ口は摩耗して角が取れて丸くなっており、別の場所から流れ込んできた事を示しています。

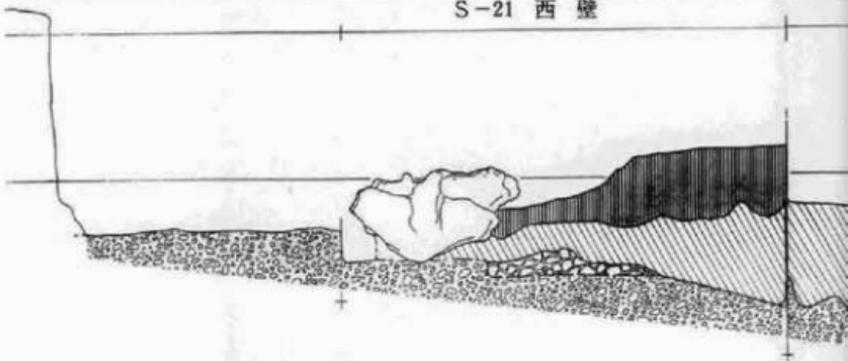
地山は島尻層の青灰色泥岩です。同層の近くまで掘り下げて行くと数箇所で空洞の部分があり、斜面の上から下に直線的に次々と検出されました。これらの空洞部は地滑りによって生じた隙間で、伏流水の水路となっていました。本地区は急斜面でもあり発掘調査中は地滑りによる災害の発生が予想されました。実際、発掘中に土層観察のために残した柱が下方に動き出す事件が2、3度ありました。そのために、大岩の下になっている部分の遺物収集は、あまりにも危険が大きいのので断念しました。

本地区の北東部に他の所とは性格を異にする暗褐色ないし黒褐色遺物包含層が堆積していました。伊波・萩堂式の土器片、石材片が他の部分とは比較にならない密度です。そして、包含層の検出面の観察では遺構の存在が予想されました。ボーリング棒による観察では遺物包含層がほぼ垂直に掘り込んだように落ち込んでいる箇所が数ポイントで確認され、当初は住居址などの遺構が存在するのは確実だろうと判断しました。しかし、人為的な遺構と思われた包含層の落ち込みは、地滑りによってズレが生じたためと判明しました。なお、この部分を「北東部



図版4 東地区発掘グリッド

S-21 西壁



I層 茶褐色混礫土層

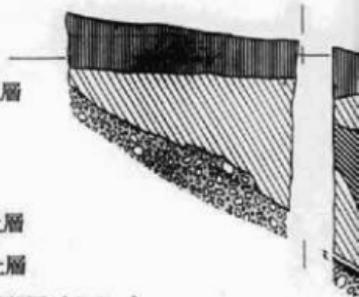
II層 黒褐色土層

III層 赤褐色土層

地山 青灰色土層 (クチャ風)

地山 青灰色泥岩基盤層 (クチャ)

S-23 西壁



I層 赤褐色混礫土層

II層 黒褐色土層

III層 赤褐色土層

III C層 暗赤褐色土層

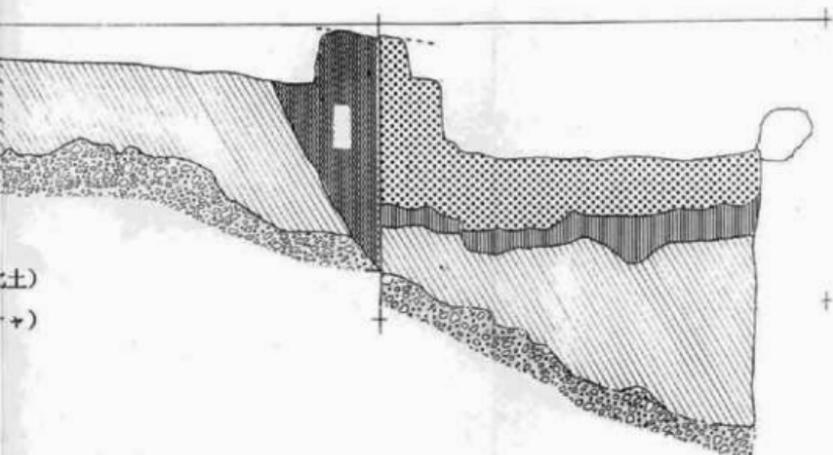
赤・茶・黒土混合土層

地山 青灰色泥岩基盤層 (クチャ)

R-21 西壁

100,000m

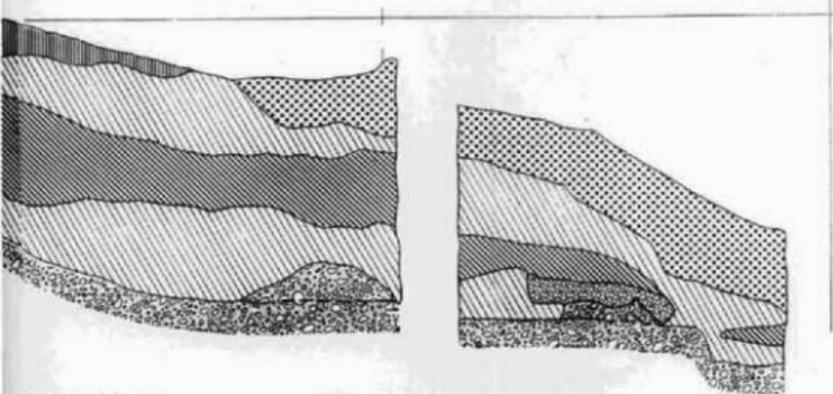
Q-21 西壁



R-23 西壁

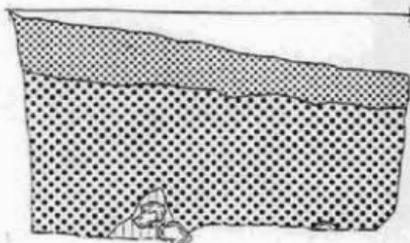
Q-23 西壁

100,000m

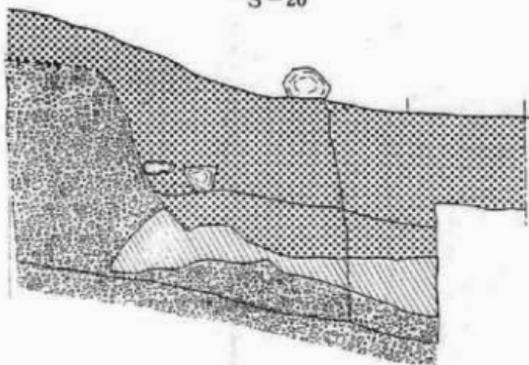


地区层序图

○-18 西壁



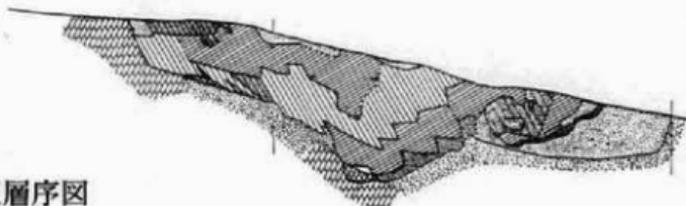
S-26



M-22 西壁

L-22 南壁

95,000m

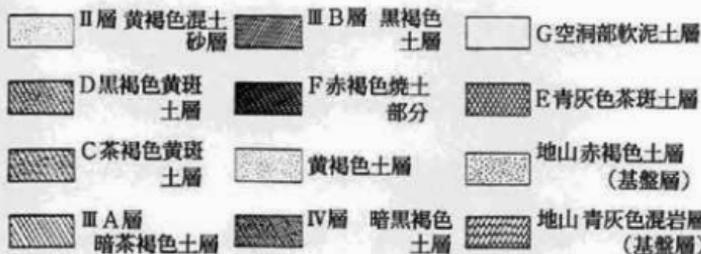
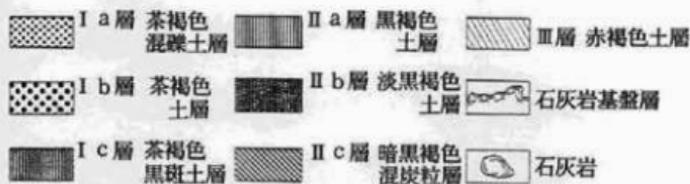
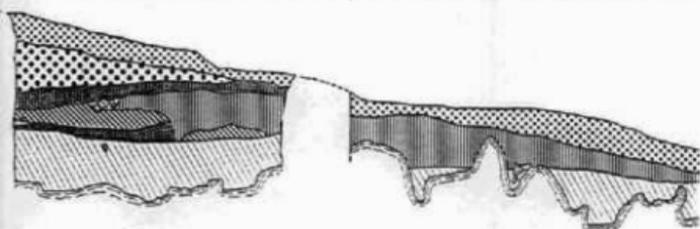


图版 6 東地区層序图

N-18 西壁

M-18 西壁

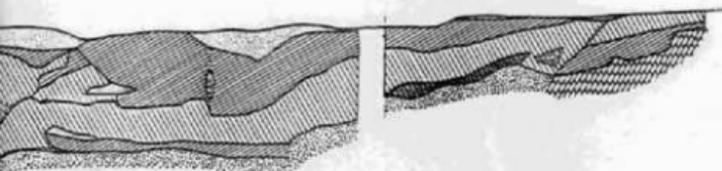
96,000m



L-22 西壁

L-21 南壁

95,000m



の黒色遺物包含層凹地部」として他の地区と区別しました。

## 2. 層序

本地区での遺物包含層は「北東部の黒色遺物包含層凹地部」以外では赤褐色土層の単層として把握可能です。同層の堆積する途中で暗褐色となる部分があり、グリッドR-23付近では上・中・下と区別できる場所もあります。しかし、先述のように本地区は地滑りの多発した所で、層の乱れが各所で見られました。本地区の基本層序は整理しますと下記のようになります。

### A. 包含層中心部の層序 (参図版4, 5 グリッドQ-23, R-23, S-23面壁面層序図)

- |         |          |  |
|---------|----------|--|
| I 層     | 茶褐色混礫土層  | 石灰岩の小礫(30cm以下が主)と腐食土の層。現代物がかなり混入しており、戦後の堆積と観察される。  |
| II 層    | 黒褐色土層    | 本来の表土層と判断される層で、土器小片が含まれる。                          |
| III 層   | 赤褐色土層    | 本地区の遺物包含層で、下記のIV層の確認される場所では上・下に区別された。下部での遺物の出土が目立。 |
| III C 層 | 暗赤褐色土層   | 赤褐色土層が中位で黒くなる部分。グリッドR-23付近を中心に分布が見られる。             |
| 地 山     | 鳥尻層(クチャ) | 地山に至る前に地滑りによって生じた破砕クチャと包含層の混在する部分があったりする例も確認された。   |

### B. 包含層東端近くの層序 (参図版4, 6 グリッドM-18, N-18, O-18面壁面層序図)

- |        |          |                                    |
|--------|----------|------------------------------------|
| I a 層  | 茶褐色混礫土層  | 中心部のI層と同一層ですが、礫が小さく5cm以下となる。       |
| I b 層  | 茶褐色土層    | 上記の層下部で礫を含まない。                     |
| I c 層  | 茶褐色黒斑土層  | 茶褐色土と黒褐色土の混在する層。                   |
| I d 層  | 濁赤褐色混砂土層 | 石英砂を多量に含んだ赤色土で僅かながら土器粒を含む。         |
| II a 層 | 黒褐色土層    | 上記のII層と同一層であるが粘性が強い。               |
| II b 層 | 淡黒褐色土層   | II a 層の下部で1cm以下の炭粒が散在。             |
| III 層  | 赤褐色土層    | 中心部III層と同一であるが出土遺物が極端に減少する。        |
| 地 山    | 鳥尻層(クチャ) | 一部では地滑りで運ばれた径数mの石灰岩や鳥尻層風化土の青灰色粘土層。 |

### C. 北東部の黒色遺物包含層凹地部 (参図版4, 6)

- |       |      |                        |
|-------|------|------------------------|
| I a 層 | 耕作土層 | 一部では腐植土層が見られたがこの層に含めた。 |
|-------|------|------------------------|

I 層	茶褐色混雑土層	本地区の他のI層と同一。ほとんどが耕作されI a層になる。
II 層	黄褐色混土砂層	粒の大きさが1mm前後で揃った石英砂の層で傾斜面の上方側に広がる。第6群土器の出土が目立ち、現代物は含まない。
III A層	暗茶褐色土層	第3群の土器片や石材片が出土するが下記のIII B層よりは少ない。両者は遺物包含層面では明確に区別された。
III B層	黒褐色土層	多量の第3群土器片、石材片を含む。III A層との上下関係は不明で、両層は本来は同一層の可能性が考えられる。
IV 層	暗黒褐色土層	この層は基底部で見られる。多量の獣魚骨を含んでいた。しかし、土を水洗いする段階で溶け、残った土が乾くとボロボロと崩れて粉になり採集されたのはわずかある。
V 層	赤or黄色褐色土層	島尻マージの二次堆積と考えられ遺物を含む。
地 山		斜面の上方側では島尻層のクチャで下方側では島尻マージとなっていた。なお、上方側では地滑りによって生じた幅5cm前後の裂け目に遺物を含んだ粘土が充填。 また、本来ならば地山であるはずの島尻マージ層がIII A層の上になる部分がグリッドM-20, 21で見られた。

※ 以上が基本的な層序と把握されますが、本凹地部では地滑りが何度も発生し、各層が混ざり合っています。この混ざった層は下記のように分けて遺物を収集しました。

- |   |         |   |
|---|---------|---|
| C | 茶褐色黄斑土層 | III A層とII層が混ざりあった層とIII A層の裂け目に充填されたII層。 |
| D | 黒褐色黄斑土層 | III B層とII層が混ざりあった層とIII B層の裂け目に充填されたII層。 |
| E | 青灰色茶斑土層 | クチャ風化土とIII A, III B層が混ざりあった層。           |
| F | 赤褐色焼土部分 | 凹地北側の焼土で約5cmの厚で層をなし、出土遺物は土器小片だけ。        |
| G | 空洞部軟泥土層 | 地割れで生じた空洞に流れ込んで堆積した軟泥土。                 |
| H | 基底地割充填層 | 地滑りでできた島尻層の裂け目に充填された土層。包含層の2次堆積。        |

### 3. 出土遺物

#### (1) 土器

本地区での遺物の出土状況は、一部の例外的なグリッドを除きますと極めて少数です。無文胴部の破片数は相当な数値を示しますが口縁・底部・有文片など形式を示す資料となると激減し、3×3m四方グリッドの深さ1m以上で数点だけの出土箇所もあります。そこで報告に際しては出土の少ないグリッドを一つにまとめ「東地区全域」とし、性格の異なる「北東部の黒色遺物包含層凹地部」とに分けて報告します。

なお、グリッドR-23は本地区では例外的な存在で、他とは比較にならない遺物の出土量です。そこで同グリッドの資料は他と区別して、微小片を除いた、ほとんどの資料を層・深さ別に図示しました。※同グリッドでは観察畦が発掘調査終了直前に地滑りで崩壊してしまい、深さが不明の資料があります。その場合は層別に採集しました。

#### A. 東地区全域

本地区は「北東部の黒色遺物包含層凹地部」を除くと第6群・7群が圧倒的に多数を占めています。出土した資料を見渡すと比較的に大型の破片はほとんどが後者の7群土器で、この中原式土器の単純遺跡のような印象を受けます。

#### 第3群土器(図14-23~28,30,図15-1,2,図16-1~3,図18-1~3,10,11,18,図20-5,6,17,18,19,図22-22~24)

無文胴部片の資料にはかなりの数量の第3群伊波・萩堂式と判断される微小片があります。これらは角が丸くなっており、斜面上方の台地から流れ込んできたものと理解されます。遺物包含層の上部から下部までこれら第3群土器無文胴部片が満遍なく出土しています。

#### 第3・4群の不明土器(図14-28,29,図20-7)

3例とも混和材などが第3群土器と共通しています。図14-29は押ししながら曲げる手法で施文される例です。

#### 第5群(カウチバンタ式土器など)(図15-3,4)

カウチバンタ式土器の底部は伊波・萩堂式や大山式土器以来、変わらない例もありますが、3のように底面が少し丸みを持ち、立ち上がりがくびれ気味なのに特徴があります。

#### 第6群(宇佐浜式土器など)(図14-19,図15-9~11,図18-4,12,図20-32,図22-5~7,19,26,27)

口縁が山形になる図15-11は、同様な山形頂部の形状例が同図15の例のように後述の第7群にもあります。胎土や混和材の粒が等質的なことから本群に含まれると判断されます。

#### 第4~7群の不明土器(図15-12~14,16,17,図18-21,22,図20-1,図22-25)

図15-12は4群か5群のいずれか不明。同図13,14は5群か6群の不明です。同図16と17の2例は8mmほどの厚さの6群か7群かが不明の例で、混和材の状況は宇佐浜式の6群と共通しています。

第7群(仲原式土器) (図15-15, 18~22, 図16-1~15, 図17-1~13, 図18-5  
~8, 14~17, 22~25, 図19-1~15, 図20-2~4, 8~16, 20~31, 図21-1~13, 図  
22-1~4, 8~17, 28)

本群の土器は器形の推定があるていど可能なものでは、無文の深鉢形が圧倒的に多数を占めています。有文の例は図17-11, 図21-1, 図22-17, 28で沈線文が施されています。器種はこの深鉢と壺があります。壺形(図16-9~12, 図20-4, 図21-1, 2)は3種類が確認できます。図16-9は口径が10cm前後の大型の壺、同図-10は口径約9cmで無頸と予想されます。図21-1は長い頸部が特徴的で、内面の頸部から口にかけては積み痕が明瞭に残されています。

外耳は本群の深鉢形土器の最大の特徴です。しかし、単に外耳の部分だけの例がほとんどです。外耳がどのように取り付けられたかを示す資料は図18-1, 図19-1の2例だけです。口径が推計できたのは図20-2の1例で約11cmの鉢形です。僅かながら図16-3のように肩部付近で段が見られる例もあり、これを以前は「天久A式」と呼ばれていました。底部は図17-12, 13, 図22-4の3例で、今のところは丸底だけです。

第8群(フェンサ下層式土器) (図17-14~16, 図12-9)

この群の土器は僅かに4点が得られただけです。本地区に近接する仲原根貝塚でも本群の出土が報告されており、上方の琉球石灰岩台地に広く分布していたようです。

第9群(フェンサ上層式土器) (図17-17, 18, 24)

これらは内湾する壺形と考えられます。小片のために傾き状況などは不明。

その他・時期不明土器など (図17-19~23, 図18-20, 図22-18)

嘉徳I式と見られるもの(図18-20, 図22-18)があり、これらは第3群の時期の移入土器と考えられます。

B. 北東部の黒色遺物包含層凹地部

本地区の中でもこの凹地は異彩を放っています。他の部分があまりに遺物の包含密度が希薄なのに対して圧倒的な出土量を誇っています。特にⅢA層(暗茶褐色土層)とⅢB層(黒褐色土層)は本来は第3群土器の単純層だったと考えられます。

当初は遺構の存在が考えられ可能な限り層を細分しました。しかし、整理作業の段階ではⅡ層の黄褐色混土砂層以外は異なる層の間でも接合する例が多く、細分した層別に出土を比較する事はほとんど無意味であると判断されました。なお、本凹地部では第1群と第2群の土器は出土していません。

東地区北東部黒色遺物包含層凹地部 Lグレット土器出土表

グ リ ッ ド	L20					L21								
	I層	III A層			F	Ia層	I層	II層	III A層				0-2020-40	
		0-20	20-40	40-60					0-20	20-40	40-70	70~		
第1群室川下層式	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
第2群面鏡前庭式	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
第3群伊波・萩堂式	30	73	9	20	8	1	21	35	17	11	35	45	32	113
第4群大山・室川式	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
不明第3or4群	0	2	0	0	0	0	0	2	0	0	0	1	1	2
第5群カヤウチパンタ	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0
不明第4or5群	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
第6群ウザ浜式	0	1	0	0	0	1	3	0	0	0	0	0	0	0
不明第5or6群	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
第7群仲原式	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
不明第6or7群	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
第8群フエンサ下層式	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
第9群フエンサ上層式	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
不明・その他	0	1	0	0	1	0	3	1	0	0	0	0	0	0

東地区北東部黒色遺物包含層凹地部 Mグレット土器出土表

グ リ ッ ド	M20											M21		
	表面 採集	社	#A層	III A層							H	I A層	I層	
				0-10	10-20	20-30	30-40	40-50	50-60	60-70				70-80
第1群室川下層式	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
第2群面鏡前庭式	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
第3群伊波・萩堂式	11	8	12	7	10	11	26	2	4	2	1	12	16	3
第4群大山・室川式	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
不明第3or4群	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	2	0
第5群カヤウチパンタ	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1
不明第4or5群	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
第6群ウザ浜式	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
不明第5or6群	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
第7群仲原式	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
不明第6or7群	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0
第8群フエンサ下層式	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
第9群フエンサ上層式	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
不明・その他	0	0	1	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	1



### 第3群土器 (図23～図28)

伊波式土器と荻堂式土器は沖縄諸島を代表する土器形式名として有名です。しかし、両者の差異は僅かです。伊波貝塚を発掘した大山柏氏は「相近似セル両者内ニアリテモ、微細ノ点ニ於テ、亦其相違モ発見セラルハ、興味アル現象ナリトス。」「沖縄トシテノ地方的特色圏内ニ於ケル、更ニ小ナル地方的、否地点のトモ稱スヘキ特色ナリト觀察セントスルモノニシテ、」と、地域差ではないかと述べています。

この両者の差異は沖縄国際大学考古学研究室で行った本貝塚の本体部のS-9で下層から伊波式土器が出土して「時間差」であることが明らかになりました。

この凹地では比較的大型の土器片が多数出土しています。本項では文様の構成を中心に伊波式・荻堂式をA～Eの5類に分類しました。

#### A類 (図23-1～4, 図24～図26-1, 25～24, 図27-1～6, 8, 図29-7)

口縁に沿って1～2条の列点文や短沈線文などを上段に施し、中段は2～5cmの文様空白部を、下段に水平方向の同様な列点文などが施される例です。これらは伊波式土器を代表する文様です。器全体の文様が明らかな資料では、このように口縁に沿って横位の文様だけに終始する場合(図23-1, 3, 図24-1,)が確認されます。これとは別に山形頂部の部分あるいはその谷部で垂直に下る「文様区画文」を伴うもの(図24-7, 図27-1～6, 8)もあります。

なお、以下の分類でもこの「文様区画文」は必ずしも必要な要素ではないと判断されます。これを組み入れて分類を行うと非常に複雑になるとともに取り扱える資料が激減します。以下の分類ではこれを除いて行い、補足的に取り上げる事にします。

文様の施文は圧倒的に先端が叉状になった「二又」の例が多く、施文具の先端が平坦な「単麓」(図25-18, 19, 図26-11, 21～24, 図27-3, 48,)の例はやや少なくなります。図29-7は3mm程の薄手で小型あるいは注口などの特殊な土器と予想されます。ところで図24-10の土器は口縁内部に施文される非常に稀な例です。

#### B類 (図27-9～18, 図28, 図29-1～4)

ここには前A類の文様空白部に沈線や押しで、「綾杉文」あるいは「羽状文」を施すグループをまとめました。文様の器形全体における構成が明確な例は図28-18の一例だけです。また、図28-1の例では口縁に沿った上段の文様が欠落したものと考えられます。図29-2は山形頂部から垂直に粘土紐を貼付した稀な例です。

施文具は本類でも「単麓」(図29-2～4, 8)は少例ですが、図28-4では上段横位の文様を「二又」施文具の一端で施し、下段は「二又」の施文具をそのまま用いた例が観察されます。本類ではこのように中段と上・下段の文様を「別の施文具を用いた例」あるいは二又の施文具の一端を用いるなどの「変わった施文具の使用法」と考えられる例(図27-14, 図28-1～4, 9

～15, 図29-4)があります。

#### C類 (図29-9～18, 図30-1～8)

口縁に平行な列点あるいは水平方向の沈線などと「鋸歯状文」の組み合わせられた例をまとめました。なお、口縁から文様帯の最下段まで構成が明確な例は図30-1の一例だけです。しかし、同時期の他の遺跡の資料を参考にしますと「B類の中段に相当する位置に鋸歯状文を施す例やこの下段にさらに鋸歯状文を施す複雑な文様の構成」(図29-9～12, 図30-2～5)、「口縁に平行な2条以上の点刻文や連点文、押捺刻文を施し、最下段だけに鋸歯状文を加えた例」(図29-4, 図30-1)に大別されます。また後者の最下段だけが鋸歯状文の構成では、ほぼ水平な口縁に「コブ状の把手」の付く例が多くなる傾向が見られます。

図30-12は同図-1の最下段の鋸歯状文が変化した例と考えられます。他にも同様な例としては図31-15があり、図31-13の例では鋸歯状文が細線で施されています。本類も他と同様に二又の施文具の例が圧倒的です。

#### D類 (図30-9, 10, 13, 14, 図31-1, 2)

口縁に平行な横位の連点文、押捺刻文だけに終始するグループです。他遺跡の報告例を見ますとこの類は平口縁が多くなる傾向があります。単麗による「押捺刻文」で平口縁の場合は次群の第4群との区別ができないと考えられますが、本凹地では両者の施文手法に違いが認められます。

山形口縁で本類に含まれる図32-17～23では、施文具を器面から離さずに連続的に施す「押し」の手法が多く用いられています。例外的に口唇部に施文される例(図33-3.)で押しではなく、一度器面から離れて連続的に刺突する手法があり、これは第3群で多用されています。

図33-24は同一器体と判断される他の破片があり、押し手法や胎土・混和材の状況等から本類に含まれると考えられます。図31-1, 2の凸帯文の2例は萩堂貝塚の報告資料などを参考に、口縁に平行な文様と理解して本類に含めました。

#### その他、細分不可の第3群土器 (図30-11, 図31-3～27, 図32-1～16, 24, 図33-1～23)

小片のために分類不可の資料や口縁部の山形突起部あるいは口唇部に施文される例などをここにまとめました。山形突起の中で図31-3～7のように肥厚する例は萩堂式土器の特徴とされています。無文土器と確認可能な例(図30-11)は1点だけで、他に図32-24の山形口縁片が無文と考えられます。

図34の底部資料は胎土や混和材などの観察から、これらの大部分が本群に含まれると判断し取り敢えずここにまとめました。しかし、一部は大山式などの第4群の底部が含まれる可能性が予想されます。底径は4～7cmにほぼ収まり、最小が20で3.5cm、最大が25の約8cmです。

底面から胴への立上がり部は1~26, 37~42のように緩やかな例がふつうで、27~30のややくびれる例は製作時の部分的な変形とも考えられます。内部の底面から胴へも緩やかな曲線ですが、21~24は中央部が窪んでいます。また、やや難な作りの25, 26の例もあります。

注目される資料として35, 36(P.L. 34-11, 12)の2例の底面に2~3mmの段差が見られる事です。本凹地や室川県塚崖下地区で嘉陽層系砂岩の板状節理を利用して割った15~20mm厚で10~20cm大の平板状の石材が多量に出土しています。この石材には磨かれ、砥石などに利用されたのではと思われる例もあります。しかし、多くの同砂岩が加工された痕跡も見られず、何に利用したのか不明でした。

板状石材の中には同一の節理面で剥離せず途中から段を生ずる場合もあります。この段差と土器底面の段差がほぼ一致しています。この板状石材を土器製作の台に利用したのではないかと予想されます。また、同様な底面の段差の例が崖下地区でも得られています。

#### 第4群土器 (図35-1~11)

本凹地では第3群と本群土器の間にやや空白期ないしは土器製作の変化が予想されます。これは本群にまとめた土器の胎土が均質でない点、混和材に石英粒の他に赤褐色千枚岩粒が目立っているなどが観察されるためです。

文様の施文技法にも同図1, 4では長い幅広の凹線、あるいは前3群で記述した「一度器面から離れて連続的に刺突する手法」(1~3, 4~6, 8~10)があります。資料は小片ですので当然ながら平口縁ではない場合もあると考えられます。

#### 第5群土器 (図35-12~14, 16)

カヤウチバンタ式土器の一般的な例としては12があります。その他に14は口縁外端が突き出していますが、その下方で明瞭に段が見られます。16は段差ではなく凸帯のように見えますが、カヤウチバンタ式の段差はこの凸帯を付けるように作られています。15の底部は器面に非常に小さい穴が散在する点と底面から胴への移行部が軽くくびれる点で本類に含めました。

#### 第6群土器 (図35-17~27)

本群土器は混和材に石英粒を含むもの(17~19)と器面がアバタ状(20~27)の2種類があります。有文の26と27は前者が単麗、後者は伊波・荻堂式の施文具と同様の「二叉」の例です。

#### 第3~6群の不明土器 (図36-1~16, 20, 29)

口縁部では第3群か4群かが不明(5, 6)、4群か5群の不明(3)、5群か6群の不明(1, 2, 4~9)です。12~16の底部は5群か6群かが不明です。29は押し引しながら曲げる施文手法と予想される3群から5群のいずれかに属するか不明です。なお、本凹地では第7群に分類可能な資料は

得られていません。

#### 第8群不明土器 (図34-32, 33)

低部の破片が2点得られました。当初、33は仲原式の外耳片と思われました。ところが堅緻で緻密な胎土で混和材がそれとは異なります。そこで馬上原遺跡や崖下地区の本群の資料と比較検討したところ、「くびれ平底」の破片と判断することができました。

#### 第9群不明土器 (図34-16, 17)

表面採集で17の底部片が1点得られただけです。底から胴への部分を「削り」によって仕上げています。

#### その他の土器 (図36-18~31)

18, 19の貼付や凸帯文は胎土・混和材の観察では第3群ないしは第4群に共通します。類似がありませんので本項で取り上げました。

22の曲線を描くような凸帯文は第2群の面縄前庭式グループに類似しますが、混和材が0.5mm以下で厚さが8mmと厚手で、これとは区別されるようです。また表面から割口の内部まで黒褐色で還元炎で焼かれたような感じを受けます。

嘉徳I式と見られる21, 24, 26や面縄東洞式の23、これらに25, 28, 29を加えて「宇宿下層式」として一つのグループにまとめられるようです。これらは21, 26が伊波・荻堂式の胎土・混和材と共通します。しかし、他は4~5mm前後の薄手で精選された胎土という共通する特徴があります。

27は第3群土器と胎土・混和材が共通しますが、28と細沈線文様が共通類似しているのでここに含めました。31は胎土中に1~2mm前後の石英粒が散在する硬質の土器で「面縄西洞式」と見られます。

## (2) 石器

石器は石材も含めて今回に報告する資料以外にも表面採集で収集されています。しかし、ほとんどが小破片です。図示して形状の示せる資料を東地区の発掘出土品を中心に範囲確認調査の資料もまとめて本項で紹介します。なお、石質同定ならびに図版作成終了後、石器の未整理資料が確認され、石質の同定を行っていない資料や未実測資料もあります。これらについては今後に発刊が予定されている「室川貝塚崖下地区」などの報告書で紹介する予定です。

#### 頁岩製薄手利器 (図37-1~6)

これらはすべて東地区の北東部の黒色遺物包含層凹地部のⅢA層とⅢB層で出土しています。

表面採集資料・範囲確認調査試掘グリッド

	観	観	あ-1	あ-3	あ-5	あ-7	あ-9	あ-11	あ-13	あ-1	あ-1	7-4	7-6	TP2	TP4	TP	
第1群室川下層式	0	0	0	0	2	2	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
第2群面縄前庭式	0	0	0	0	2	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
第3群伊波・萩堂式	23	17	32	47	55	25	23	15	24	6	9	2	2	0	0	0	
第4群大山・室川式	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
不明第3or4群	0	0	0	0	0	0	0	0	6	0	0	0	1	0	0	0	
第5群カヤウチバンタ	0	1	2	2	0	1	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	
不明第4or5群	0	1	1	1	1	0	4	0	2	0	1	0	0	0	0	0	
第6群宇佐浜式	1	3	0	2	2	5	1	0	3	0	0	0	0	0	1	1	
不明第5or6群	0	3	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	
第7群仲原式	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
不明第6or7群	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	
第8群フエンサ下層式	0	4	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	
第9群フエンサ上層式	1	1	0	0	0	1	0	1	0	0	3	1	0	0	0	0	
不明・その他	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	

東地区グリッド別土器出土表

グリッド	G23		I22		J20		J21		K20		K21		N17		N24		P24			Q20			Q21				
	Ⅱ層	Ⅲ層	Ⅱ層	Ⅲ層	Ⅱ層	Ⅲ層	Ⅱ層	Ⅲ層	Ⅱ層	Ⅲ層																	
第1群室川下層式	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
第2群面縄前庭式	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
第3群伊波・萩堂式	4	1	1	5	2	2	15	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
第4群大山・室川式	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
不明第3or4群	0	0	0	2	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
第5群カヤウチバンタ	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
不明第4or5群	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
第6群宇佐浜式	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
不明第5or6群	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
第7群仲原式	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	2	0	4	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
不明第6or7群	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	3	3
第8群フエンサ下層式	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
第9群フエンサ上層式	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
不明・その他	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

土器出土表

TP14			TP32							TP33							
1層	2層	3層	TP17	TP18	TP29	TP26	TP28	TP30	TP31	1層	2層	3層	1層	3層	TP43	TP51	TP52
0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	1
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
2	2	0	0	0	4	1	0	0	7	1	4	0	1	1	0	1	1
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0
2	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0
0	0	1	0	0	3	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	1
3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0
0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
0	0	0	4	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

0-3040-5050-6060-7070-8080-	Q22							Q23				Q24								
	I層	II層	III層				I層	II層	III層	II層	I層	II層	III層							
			不明	0-2020-3030-4040-5050-60	II層	II層								II層						
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0			
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0			
0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	1	1	0	1	0	1	5		
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		
1	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	1	0	0		
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0		
5	3	9	0	0	3	1	0	8	17	4	2	8	1	3	1	3	2	7	0	10
2	0	0	0	0	3	0	1	0	5	0	0	0	1	0	0	0	2	0	0	0
0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	1	1	0	1	0	0	0	1

東地区グリッド別土器出土表

グ リ ッ ド	R20		R21								R22			R23		
	I層	II層	I層	II層	不明	III層						I層	II層	III層	IV層	II層
						0-20	20-40	40-60	60-80	80-						
第1群室川下層式	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
第2群面縄前庭式	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
第3群伊波・萩堂式	3	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	3	2
第4群大山・室川式	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
不明第3or4群	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
第5群カヤウチパンタ	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
不明第4or5群	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
第6群字佐浜式	1	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0	3	1	1	1
不明第5or6群	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
第7群仲原式	0	0	3	3	3	4	1	6	5	5	1	2	4	6	4	4
不明第6or7群	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
第8群フェンサ下層式	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
第9群フェンサ上層式	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
不明・その他	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0

東地区グリッド別土器出土表

グ リ ッ ド	S23								S23				S25		S26	
	不明	0-10	10-20	20-30	30-40	■C■	80-	III層				■C■	III層	I層	II層	
								0-10	10-20	20-30	30-40					
第1群室川下層式	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
第2群面縄前庭式	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
第3群伊波・萩堂式	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	1
第4群大山・室川式	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
不明第3or4群	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
第5群カヤウチパンタ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0
不明第4or5群	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
第6群字佐浜式	0	1	1	0	0	1	1	0	0	0	0	3	0	0	0	0
不明第5or6群	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
第7群仲原式	2	4	0	4	1	18	0	0	2	5	3	24	0	2	0	0
不明第6or7群	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	2	0	0	0	0
第8群フェンサ下層式	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
第9群フェンサ上層式	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
不明・その他	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

										R24				S20	S21		S22		
Ⅲ 層										Ⅲ 層				Ⅲ層	Ⅰ層 Ⅲ層		Ⅱ層	Ⅲ層	Ⅲ層
不明	0-10	10-20	30-50	50-60	60-70	70-80	80-	EC層	0-20	20-40	40-60	60-	Ⅲ層		Ⅰ層	Ⅲ層	Ⅱ層	Ⅲ層	Ⅲ層
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
5	3	2	0	0	0	1	3	3	0	0	0	0	0	0	3	0	6	1	
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
3	0	1	0	0	2	1	3	1	0	0	1	0	0	0	0	0	7	4	
0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
3	9	16	13	4	11	2	0	41	2	2	1	4	1	1	2	5	26	34	
3	0	1	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0

	T25
Ⅲ層	Ⅱ層
0	0
0	0
0	0
0	0
0	0
0	0
0	0
0	2
0	0
3	5
0	0
0	1
0	2
4	2

両層は先述のように第3群の伊波・荻堂式土器が圧倒的多数を占め、本来は第3群土器の単純層だったと見られます。この6例も伊波・荻堂式土器に伴うものと予想されます。

5は刃先部の1~2mmが刃こぼれなどで欠けるだけのほぼ完全形です。両側縁の頭部寄りに捺り切るようにして抉部を作っています。これと同様な抉部が2にもありますが残存部では片側だけです。

4は刃縁が円弧状になり、全形がほぼ長方形と判断されます。4カ所に小孔があり、刃部側の2カ所では片側からの穿孔し反対の面からは補足的に加工するだけです。また、残り2カ所ではこれとは逆の面から重点的に穿孔されています。

6は刃部が破損し頭部だけと予想されます。中央部と考えられるあたりに頭部に直交するように捺切で孔を設けていたようです。他の5例よりも幅広くて厚いのが目立っています。

1と3は刃部だけの資料です。前者はやや片刃で後者は両刃になっています。以上の6例とも平面、側面ともに丁寧に磨いて仕上げられています。石材の頁岩は沖縄本島では具志川市から石川市の「名護層」で採集されるそうです。

頁岩製薄手利器出土・計測値表

図版番号	グリッド	出土層	深さ	最大厚	最大幅	最大長
1	L 2 1	Ⅲ B	0~10cm	2.2mm	25.0mm	不明
2	L 2 1	Ⅲ A	50~60cm	3.0mm	31.1mm	不明
3	L 2 1	Ⅲ B	40~50cm	2.2mm	27.3mm	不明
4	L 2 2	Ⅲ B	0~10cm	2.4mm	29.0mm	55.4mm
5	L 2 1	Ⅲ A	70~80cm	2.2mm	28.8mm	約32.0mm
6	L 2 1	Ⅲ B	50~60cm	4.0mm	36.4mm	不明

#### チャート製石鏃 (図37-7, 8・PL. 37-7)

7は横幅が34.3mm、厚さ9.7mm、先端部は欠損していますので推定長37mm程と予想されます。菱形で県内で従来知られている石鏃の約2倍もの大きさがあります。石材のチャートはヒビ割の貫入が見られます。細部の仕上げはやや雑な印象を受けます。東地区の北東部の黒色遺物包含層凹地部グリッドR21の表土・腐食土層で採集されました。

同図8は両面の稜の部分を研磨している石鏃です。7と比較すると非常に細かく調整剥離し丁寧に仕上げられています。材質も透明感ある良質なチャートです。幅は17mm、厚さ5mm、長さは欠損している先端部を含めると26mmほどと予想されます。この石鏃もグリッドR21のⅢB層で出土しています。1点だけの出土ですので本資料が伊波・荻堂式土器に伴うのか、地滑りによる層の攪乱で上層から紛れ込んだものか問題があります。

#### 石鑿状石器 (図38-1~4)

4点はすべて東地区北東部の黒色遺物包含層凹地部で得られました。一般に石斧と総称される石器よりも細長く、普通は「石ノミ」と呼ばれています。全的に研磨している1、2と刃部だけを研磨する3があります。4は両者の中間的な仕上げで、図左の面は刃部だけの研磨、図右面は全体的に磨かれています。

残存部の全面に研磨が施される1、2には仕上げ途中の敲打痕が散見されます。3は刃先に平行ないしはやや斜めに研磨の捺痕が観察されます。4は摩耗がやや目立つ資料です。4点とも伊波・萩堂式土器に伴う可能性が高いと考えられます。

#### 石斧類 (図38-5, 6, 図39~図42)

ここでは一般に「石斧」と呼称されるものをまとめてみました。打ち割っただけの「打製石斧」と研磨仕上げの「磨製石斧」とに大別されます。後者には刃部付近を研磨した「局部研磨石斧」も含まれています。

磨製石斧は図38-5, 6, 図39, 図40の16点を図示しました。図38-5は図左面の頭部近くに研磨面が見られる以外は刃部だけを研磨しています。形状は前項の「石鑿」に類似していますが、それよりも横幅が広い点などを考慮してここに含めました。

全的に丹念な研磨が確認できるのは図38-6, 図39-2~5です。刃部を重点に研磨する例は、図40-3があり、図39-1も同様な資料と考えられますが風化が著しく明確ではありません。また、片面だけを研磨する図40-1, 2もあります。同-5は図右面の剖面を一部研磨しただけです。以上の資料中で使用痕が観察されるのは図38-6, 図39-5, 図40-3, 5, 7です。(参PL. 45)

打製石斧とした図41-1~3, 5の資料は荒割りしただけで細かな調整が見られません。作途中の半製品の可能性があります。これに対して図42-1, 2の刃部片2点は周縁部を丁寧に仕上げている様子が観察されます。

風化・摩耗が進み製作状況が明瞭な図41-4は図左面が緩やかな曲面ですが、右面は剖面の凹凸が残り刃先部を細かく調整しています。これよりも保存状況が劣悪な図41-6と図42-3では前者が節理面から剥離が進み、後者は角がすべて丸みを帯びています。

#### 石錘・敲打器 (図42-4~6)

この3点は一見した所は石斧のような形状をしています。4は石斧の刃部に相当する一端に細かな打痕が見られ丸くなっています。5の場合は両端に4と同様な細かい打痕が見られます。6は摩耗が著しい資料です。破損した石斧の2次的な転用例ではないかと思われます。刃部に相当する部分は丸く潰れています。

### 磨り石、凹石等 (図43-1~5)

ここには磨り潰したり製粉などに使用したために生じたとみられる滑らかな面をもつ資料をまとめました。1は表裏面が滑らかな曲面ですが周縁部は大きく打割られています。本来は磨石として使用されていたのをハンマーなどに転用した例と思われます。

2は表裏面が中央に浅い凹部をもつ「凹石」です。2~6の周縁部は敲打痕が見られ、表裏面は磨かれたように滑らかです。

### 石皿・砥石 (図44-1~6)

石皿などの用途が予想される1~4は、節理面を利用して作られた平石板の一面が平坦で滑らかになっています。これと対照的に曲面に磨いた痕跡が残されているのが5と6です。

## 石器の石質・出土一覽表

図版番号	グリッド	層	石 質	図版番号	グリッド	層	石 質
38-1	東L21	凹ⅢB層	未 同 定	41-3	東L21	凹ⅢB層	古生層砂岩
38-2	東M22	表土層	ハンレイ岩	41-4	東L21	凹表土層	嘉陽層砂岩
38-3	東M20	凹ⅢA層	黒色千枚岩	41-5	東L21	凹ⅢB層	未 同 定
38-4	東L21	凹 E 層	緑色千枚岩	41-6	東J20	攪乱層	嘉陽層砂岩
38-5	東L21	凹ⅢA層	未 同 定	42-1	東S25	Ⅲ 層	輝 緑 岩
39-6	範あ13	攪乱層	輝 緑 岩	42-2	東T25	表土層	ハンレイ岩
39-1	東N22	表土層	片 状 砂 岩	42-3	東Q20	Ⅲ 層	変 成 岩
39-2	東L21	凹ⅢB層	輝 緑 岩	42-4	東L21	表土層	石 英 斑 岩
39-3	東M21	凹ⅢA層	ハンレイ岩	42-5	東G23	表土層	石 英 斑 岩
39-4	東L21	凹ⅢA層	ハンレイ岩	42-6	範あ7	攪乱層	輝 緑 岩
39-5	東M22	凹ⅢA層	ハンレイ岩	43-1	東T25	Ⅲ 層	ハンレイ岩
39-6	東L21	凹ⅢA層	未 同 定	43-2	東Q25	Ⅲ 層	嘉陽層砂岩
40-1	東S24	Ⅱ 層	ハンレイ岩	43-3	東Q20	Ⅲ 層	嘉陽層砂岩
40-2	東P24	表土層	砂質千枚岩	43-4	東R23	Ⅳ 層	嘉陽層砂岩
40-3	東L21	凹ⅢA層	未 同 定	43-5	東N22	表土層	嘉陽層砂岩
40-4	東J21	表土層	ハンレイ岩	44-1	東M22	凹Ⅱ層	嘉陽層砂岩
40-5	東T25	Ⅱ 層	ハンレイ岩	44-2	東R21	Ⅲ 層	嘉陽層砂岩
40-6	東M22	凹 H 層	黒色千枚岩	44-3	東L21	凹ⅢB層	嘉陽層砂岩
40-7	東L22	凹ⅢA層	古生層砂岩	44-4	東S21	表土層	嘉陽層砂岩
40-8	東L20	凹 F 層	ハンレイ岩	44-5	東L21	凹ⅢB層	嘉陽層砂岩
41-1	東L20	凹ⅢA層	未 同 定	44-6	東L22	凹ⅢB層	凝 灰 岩
41-2	東L21	凹 E 層	雲母細粒砂岩	※参補注	東M21	凹ⅡA層	砂質千枚岩

※P.L. 37-8 東地区北東凹地部 M21ⅢA層

## あ と が き

本貝塚は沖縄国際大学考古学研究室の実施した数度の「学術発掘調査」の成果によって、沖縄の考古学編年で重要な役割を果たした遺跡の一つとして広く知られています。当市教育委員会でも遺跡の範囲確認調査を行ないました。その後、貝塚周辺では様々な開発が計画されました。それらに伴う調査の中で東地区の存在が確認され、開発が断念された計画もあります。

今回報告する本市総合庁舎建設に伴う調査は、これまで行われた調査とは比較にならないほど大規模なものでした。室川貝塚西地区と東地区の遺跡範囲確認調査から記録保存発掘調査、さらに「保存区域」と「記録保存発掘調査区域」を確定するための調整と協議に多くの時間を費やしました。幾度も調整と協議の結果、保存される区域を可能な限り広くするために建物の位置を設計変更することになりました。またその後実施した範囲確認調査では、1981年度（昭和56年度）の「遺跡詳細分布調査」で居住場所であろうと予想していた崖上の琉球石灰岩台地で「馬上原遺跡」が新たに確認されました。

最終的には従来知られていた室川貝塚の範囲を歴史公園として保存整備する「本体部」と、記録保存発掘調査の対象区域となった「崖下地区、東地区、馬上原遺跡」に分け、後述の三地区で発掘調査を実施することになりました。

以上の調査経過の概略は第Ⅰ章から第Ⅲ章で述べました。本貝塚のように学術調査から開発に関連する調査でひとつの遺跡が数十年もの長期間にかけて詳細に発掘調査が行われた事例は沖縄県内では少ないと思います。本市総合庁舎建設に伴う一連の発掘調査の成果は「室川貝塚範囲確認発掘調査と室川貝塚東地区」、「室川貝塚崖下地区」と「馬上原遺跡」の二冊に分けて報告書を順次作成する予定です。

その第一冊目として『室川貝塚範囲確認発掘調査と室川貝塚東地区』の報告を終えるに当たって、一連の調査成果を要約しますと以下ようになります。

- ① 室川貝塚一帯の遺物包含層の詳細な分布と遺構などの有無が確定したこと。
- ② 室川貝塚は崖下一帯だけに限定されるのではなく、崖上の琉球石灰岩台地上の平坦な島尻マージに形成された馬上原遺跡を含む広範囲であること。
- ③ 近くの琉球石灰岩台地にある仲宗根貝塚も従来は別々の遺跡として取り扱われていたが出土遺物を検討すると、室川貝塚及び馬上原遺跡と同一の遺跡として集落の範囲内であったと予想されます。

また、グスク時代にはその範囲はさらに広く、胡屋御願遺跡までの数百mに及んでいたと思われます。

最後に調査・資料整理・報告書の発刊ならびに諸々の分野で御指導と協力を賜った方々の御苦勞に対して心から厚く感謝申し上げます。

## 《原稿執筆及び遺物整理指導》

### 1. 原稿執筆

第Ⅰ～Ⅲ章	宮城 利旭
第Ⅳ章Ⅰ～Ⅲ	比嘉 賀盛
あとがき	宮城 利旭
附 録	” ”
参考文献及び注釈	比嘉 賀盛
編 集	仲本朝彦（副館長）・比嘉 賀盛・宮城 利旭

### 2. 遺物整理指導

ナンバーリング	}	比嘉 賀盛
土器・石器の実測		
” ” の集計表		
” ” の図版トレース		
” ” ” 作成		
土器・石器の撮影及び原像と焼付		
土器・石器のPL作成		

## 〈附 録〉

### 総合庁舎建設に伴う室川貝塚一帯の事前協議の経過

1984年度～1990年にかけて沖縄市役所と総合庁舎建設に伴う室川貝塚一帯の取り扱いについて協議を行った状況、さらに沖縄県教育庁への情報提供ならびに御指導を仰いだ経過を年次的に述べます。

#### 1) 1984年の経過

5月21日 沖縄県教育庁文化課において、室川貝塚の取り扱いについての指導を仰ぐ。

#### 2) 1986年の経過

8月18日 同上記

#### 3) 1988年の経過

6月21日 6月定例議会において、市長は新庁舎を現本庁跡に建設する旨の答弁をする。

8月1日 沖縄市文化財調査審議会は、「室川貝塚を指定し保存する旨」の建議書を教育長へ提出する。〔昭和63年8月1日付、沖市文審第2号を受理〕

8月5日 定例教育委員会において、文化財調査審議会から提出された「室川貝塚の保存と指定について」の建議書を正式議案として審議し、了承する。

8月23日 庁議において、新庁舎の位置を現庁舎跡地にすることを正式決定する。

10月20日 新庁舎建設地内の文化財の取り扱いについて、総合庁舎建設室と協議を行う。

11月4日 市長以下三役に対し、室川貝塚および周辺の文化財についての説明を行う。

11月22日 沖縄県教育長文化課において、室川貝塚の取り扱いについての指導を仰ぐ。

11月28日 市総務部長名による「庁舎予定地における埋蔵文化財の有無等の調査について」の依頼を受ける。〔昭和63年11月28日付、事務連絡を受理〕

12月1日 室川貝塚周辺の範囲確認調査を開始する。

12月24日 沖縄県教育庁文化課による室川貝塚範囲確認調査現場の視察を受け、その場で室川貝塚東地区の包含層の取り扱いについて指導を受ける。

#### 4) 1989年の経過

1月17日 総合庁舎建設室と室川貝塚東地区の遺物包含層の保存、諸経費等の協議を行う。

1月30日 上記について再度協議する。

3月25日 沖縄県教育庁文化課へ「総合庁舎建設に伴う室川貝塚の範囲確認調査について」の文書報告及び指導と助言のお願いをする。〔平成元年3月25日付、沖市教博第83号で送付〕

4月14日 総合庁舎建設室より「埋蔵文化財包蔵地（室川貝塚）の取り扱いについて」と、題する12メートル道路建設についての照会を受ける。〔平成元年4月14

日付、沖市庁第123号を受理]

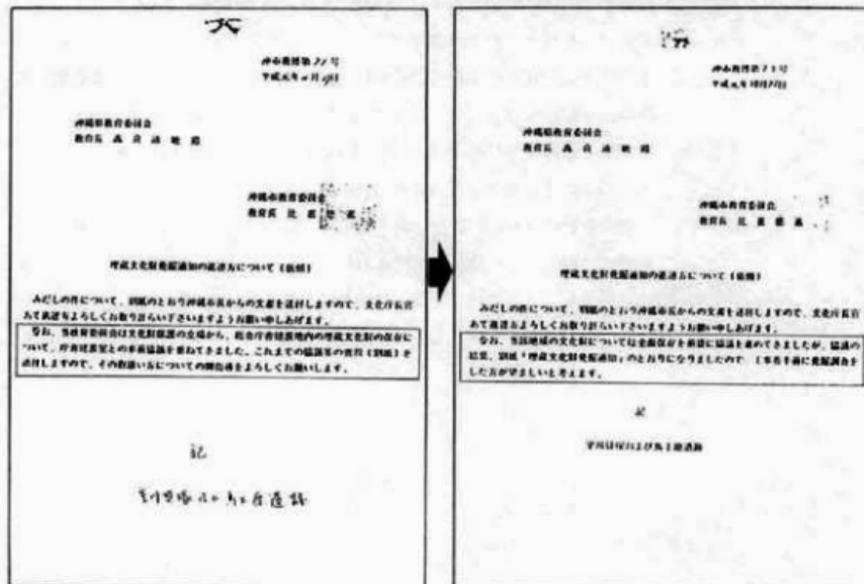
- 4月19日 上記について、再考を促す回答を行ったところ、12メートル道路建設を断念する旨の連絡があった。[平成元年4月19日付、沖市教博第9号で送付]
- 4月20日 沖縄県教育庁文化課において、室川貝塚保存のための指導を受ける。
- 4月27日 保存区域について、総合庁舎建設室と協議を行う。
- 5月23日 沖縄市長より提出された「室川貝塚東地区の発掘届」を、文化庁長官あての進達方を沖縄県教育庁文化課へ依頼する。[平成元年5月16日付、沖市庁第373号を平成元年5月23日付、沖市教博第20号で送付]
- 6月10日 上記について、沖縄県教育庁文化課より「発掘調査する旨」の通知を受ける。[平成元年6月6日付、教文第151号で受理、平成元年6月21日付、沖市教博第28号で総合庁舎建設室へ送付]
- 6月27日 沖縄市長より「室川貝塚東地区の発掘調査について」依頼を受ける。[平成元年6月27日付、沖市庁第736号を受理]
- 7月4日 総合庁舎建設室より、本庁舎脇の駐車場とパレス会館跡の所有権及び権利関係等を取付したので、当地一帯の「埋蔵文化財、有無について」の調査依頼を受ける。[平成元年7月4日付、事務連絡を受理]
- 7月11日 沖縄市長より6月27日依頼の「室川貝塚東地区の発掘調査について」を受託する。調査は沖縄県教育庁文化課の指導を仰いだ結果行われるもので、調査中途において貴重な遺構や遺物が確認されたら別途協議と調整を行う旨で受託。[平成元年7月11日付、沖市教博第29-2号で送付]
- 7月19日 「室川貝塚東地区の発掘調査通知」の文化庁長官あて進達方を沖縄県教育庁文化課へ依頼する。[平成元年7月19日付、沖市教博第33号で送付]
- 8月1～3日 本庁舎とパレス会館跡の試掘調査を実施する。
- 8月1日 上記地域において包含層を確認し、教育長および教育部長へ報告する。
- 8月3日 上記について、定例教育委員会への説明資料を作成し、教育長へ届け説明する。
- 8月4日 沖縄市役所三役に対し、上記資料をもとに試掘調査の概要を説明する。また、総合庁舎建設室とも協議をする。
- 8月10日 総合庁舎建設室において、馬上原遺跡の取り扱いについての協議を行う。総合庁舎建設室本庁舎脇の駐車場（試掘の結果、馬上原遺跡と称する）とパレス会館跡の調査結果を報告。[平成元年8月10日付、沖市教博第41号で送付]
- 8月14日 沖縄県教育庁文化課において新発見の「馬上原遺跡」の報告、及び指導を受ける。[平成元年8月10日付、沖市教博第42号で送付]
- 8月25日 沖縄市長より「馬上原遺跡」の発掘調査依頼を受ける。[平成元年8月25日

付、沖市庁第1216号を受理]

- 8月30日 上記について回答を行う。馬上原遺跡の取り扱い調整・協議を重ね双方の合意(現地保存・一部保存・記録保存)が得られた時点で諸手続きを踏まえ調査を実施する旨を報告。[平成元年8月30日付、沖市教博第45号で送付]
- 9月4日 新発見の「馬上原遺跡」の届出に関する文書を沖縄県教育庁文化課へ進達。[平成元年8月28日付、沖市庁第1240号を受理、平成元年9月4日付、沖市教博第51号で送付]
- 9月14日 上記報告の「馬上原遺跡」について沖縄県教育庁文化課より通知。[平成元年9月8日付、教第467号を受理。]
- 9月29日 馬上原遺跡発見の通知について沖縄市長へ報告。[平成元年9月29日付、沖市教博第60号で送付]
- 10月19日 新庁舎の配置計画決定により、室川貝塚本体部の保存区域と周辺の発掘区域についての協議を総合庁舎建設室と行う。
- 10月20日 「総合庁舎建設地内の文化財の保存について」と題して(室川貝塚崖下部の保存と馬上原遺跡の保存)についての要請を教育長から市長へ行う。[平成元年10月20日付、沖市教博第64号で送付]



- 10月25日 市長より上記について文書回答を受ける。〔平成元年10月25日付、沖支庁第1720号で受理〕
- 11月2日 沖縄市長より提出された「室川貝塚崖下部と馬上原遺跡の発掘通知」を、文化庁長官あて進達方を沖縄県教育庁文化課へ依頼する。〔平成元年10月25日付、沖市庁第1705号を受理。平成元年10月27日付、沖市教博第71号で送付〕  
進達文は沖縄県教育庁文化課の指導で **※※** 部分を書き直し、再提出する。



- 11月14日 地下水調査業務に伴う文化財の有無について。〔平成元年11月14日付、沖市庁第1860号を受理〕
- 11月14日 上記の業務について当該地では埋蔵文化財が確認されなかった旨の報告をする。〔平成元年11月14日付、沖市教博第79号で送付〕
- 11月16日 沖縄市長より10月27日提出の発掘通知について、沖縄県教育庁文化課より「工事着手前に発掘調査を実施する旨」の通知を受ける。〔平成元年11月9日付、教文第671号を受理〕
- 11月20日 上記、沖縄県教育庁文化課からの通知書を沖縄市長へ送付、協議を行う。〔平成元年11月20日付、沖市教博第80号で送付〕

- 11月21日 沖縄市長より「馬上原遺跡と室川貝塚崖下地区」の発掘調査の承諾についての依頼。
- 11月22日 「馬上原遺跡と室川貝塚崖下地区」の埋蔵文化財発掘調査通知の文化庁長官あて進達方を沖縄県教育庁文化課へ依頼する。〔平成元年11月22日付、沖市教博第83号で送付〕

#### 5) 1990年の経過

- 3月19日 沖縄市役所総務部長へ提出、室川貝塚東地区の調査完了報告、及びその取り扱について〔平成2年3月19日付、沖市教博第114号で送付〕
- 7月30日 沖縄市長へ提出、馬上原遺跡と室川貝塚崖下地区の発掘調査完了報告について。〔平成2年7月30日付、沖市教博第44号で送付〕報告文の中で馬上原遺跡検出の住居址については可能な限り保存〕してくれるよう再要請。
- 7月30日 沖縄市役所総務部長へ提出、馬上原遺跡と室川貝塚崖下地区の管理引き継ぎについて。〔平成2年7月30日付、沖市教博第45号で送付〕
- 7月30日 沖縄県教育庁文化課へ提出、馬上原遺跡と室川貝塚崖下地区の発掘調査完了報告について。〔平成2年7月30日付、沖市教博第46号で送付〕
- 9月19日 沖縄市長から7月30日付で保存の要請をした住居址については、「保存ができない旨」の回答を受ける。〔平成2年9月9日付、沖市庁第1448号で受理〕

## 《参考文献及び注釈》

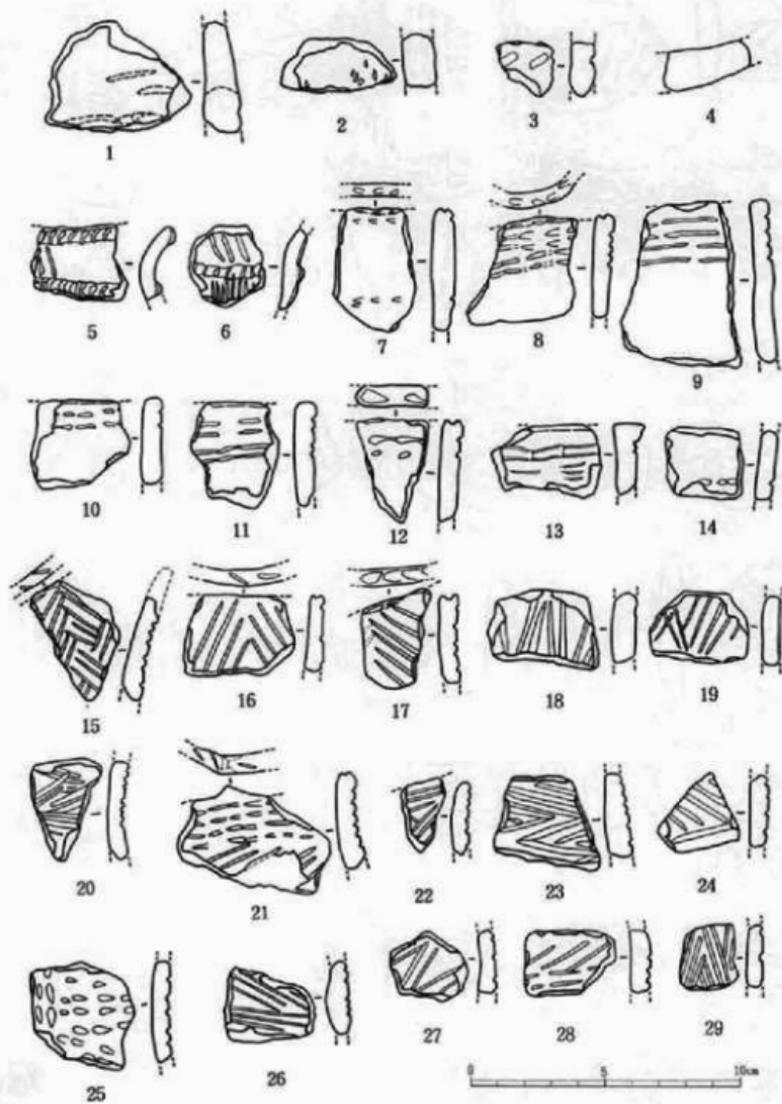
- 注1 『沖縄の自然』「沖縄第四紀調査団・沖縄地学会」(代表 木崎甲子郎)平凡社 1975年
- 注2 聞き取り調査などで第二次世界大戦前の東海岸は、現在よりもさらに内陸寄りであったことが確認されます。その旧海岸線からの距離の場合は約1.5kmほどです。
- 注3 『琉球弧の世界』海と列島文化第6巻 著者代表 谷川健一 1992年 小学館
- 注4 『沖縄大百科事典』中巻 沖縄タイムス社 1983年
- 注5 『石器時代の沖縄』新星図書 沖縄考古学会編 1978年
- 注6 『室川貝塚第2～4次発掘調査概報』冲国大考古学第4号 高宮廣衛・湖城清・嘉敷卓・東江千栄子・玉城初子・阿利直治・玉城朝健
- 注7 『奄美における土器文化の編年について』鹿児島考古 第9号 河口貞徳
- 注8 伊是名村文化財調査報告書第6集『具志川島遺跡群』第四次発掘調査報告書  
安里嗣淳、中村恵、木下尚子、大城慧、花城順子 伊是名村教育委員会
- 注9 沖永良部島神野貝塚発掘調査概報(その3) 冲国大考古第9号  
高宮廣衛・仲宗根求・宮里信勇  
沖縄国際大学考古学研究室 1987年
- 注10 文化財要覧『沖縄直野湾村大山貝塚調査概要』賀川光夫 多和田真淳  
琉球政府文化財保護委員会 1987年
- 注11 『先史古代の沖縄』南島文化叢書 12 高宮廣衛 1991年 第一書房
- 注12 文化財要覧『琉球列島の貝塚分布と編年の概念』多和田真淳  
琉球政府文化財保護委員会 1956年
- 注13 文化財要覧『地荒原貝塚発掘報告』多和田真淳・外間正幸・嵩元政秀  
琉球政府文化財保護委員会 1962年
- 注14 伊平屋村文化財調査報告書第1集『久里原貝塚』範囲確認調査報告書  
沖縄県伊平屋村教育委員会 1981年
- 注15 『奄美大島の先史時代—奄美大島笠利村宇宙貝塚発掘調査報告』「奄美・自然と文化」  
国分直一・河口貞徳・曾野寿彦・野口義磨・原口正三 九学会 1955年
- 注16 『木綿原』沖縄県読谷村木綿原遺跡発掘調査報告書  
沖縄県読谷村教育委員会 読谷村立歴史民俗資料館 1978年
- 注17 『沖原式土器の提唱について』上原静・当真嗣一 「紀要」第1号  
沖縄県教育委員会文化課 1984年
- 注18 『那覇市の考古資料』高宮廣衛 1968年
- 注19 文化財要覧『読谷村赤犬子遺跡調査報告』高宮廣衛・多和田真淳  
琉球政府文化財保護委員会 1961年

注20 『フェンサ城貝塚調査概報』「琉球大学法文学部紀要 社会篇第13号」

友寄英一郎・嵩元政秀 1969年

注21 『琉球伊波貝塚発掘報告』 大山柏 1922年

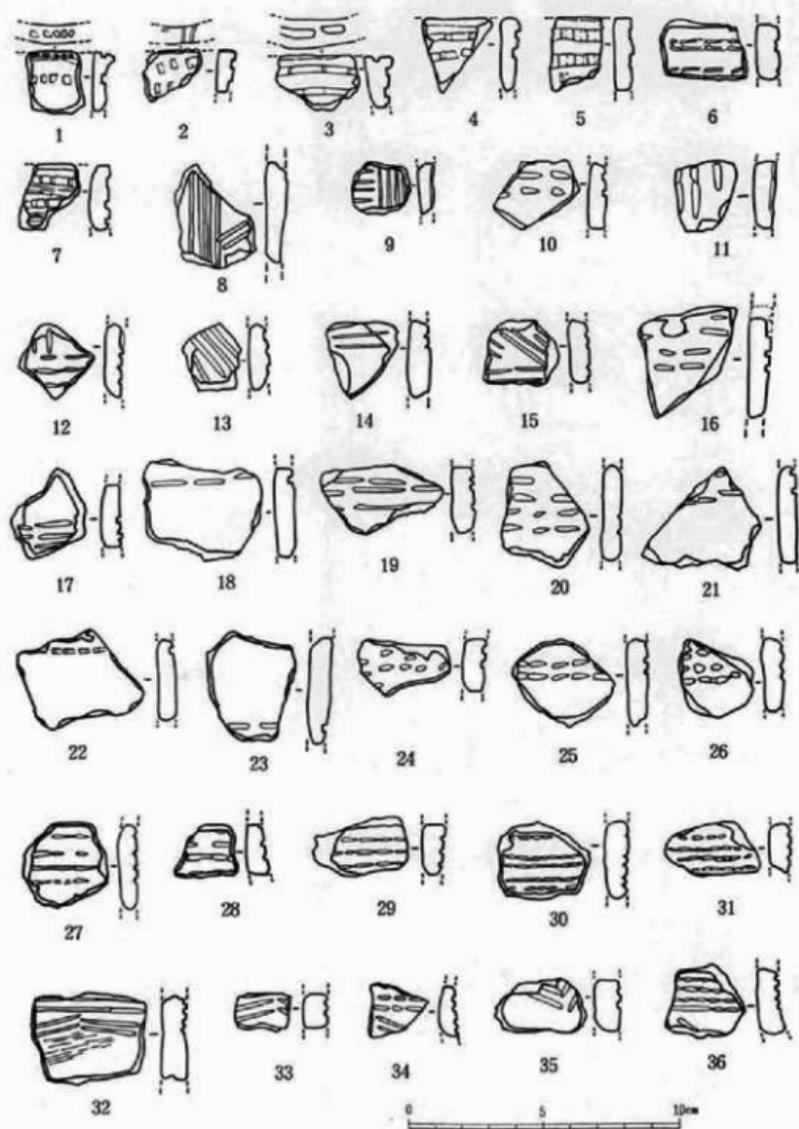
図版 7 ~ 36 • 土器



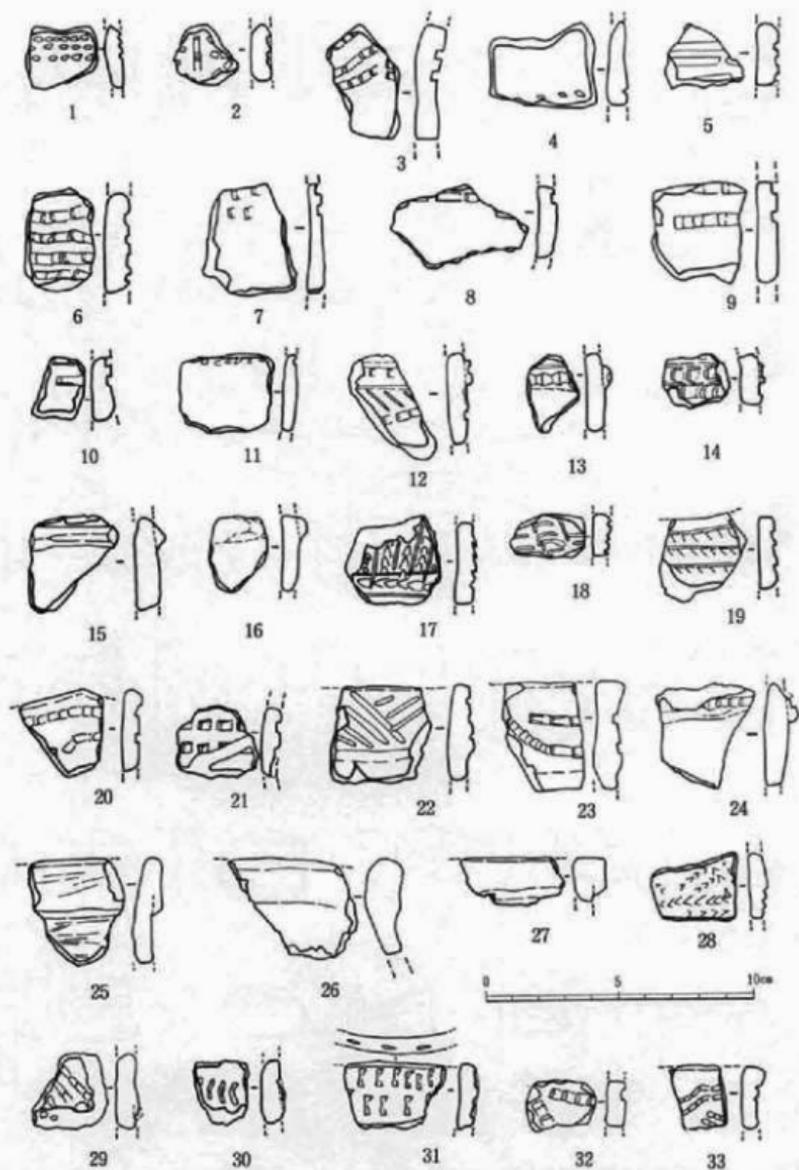
図版7 室川貝塚範圍確認調査資料 西地区



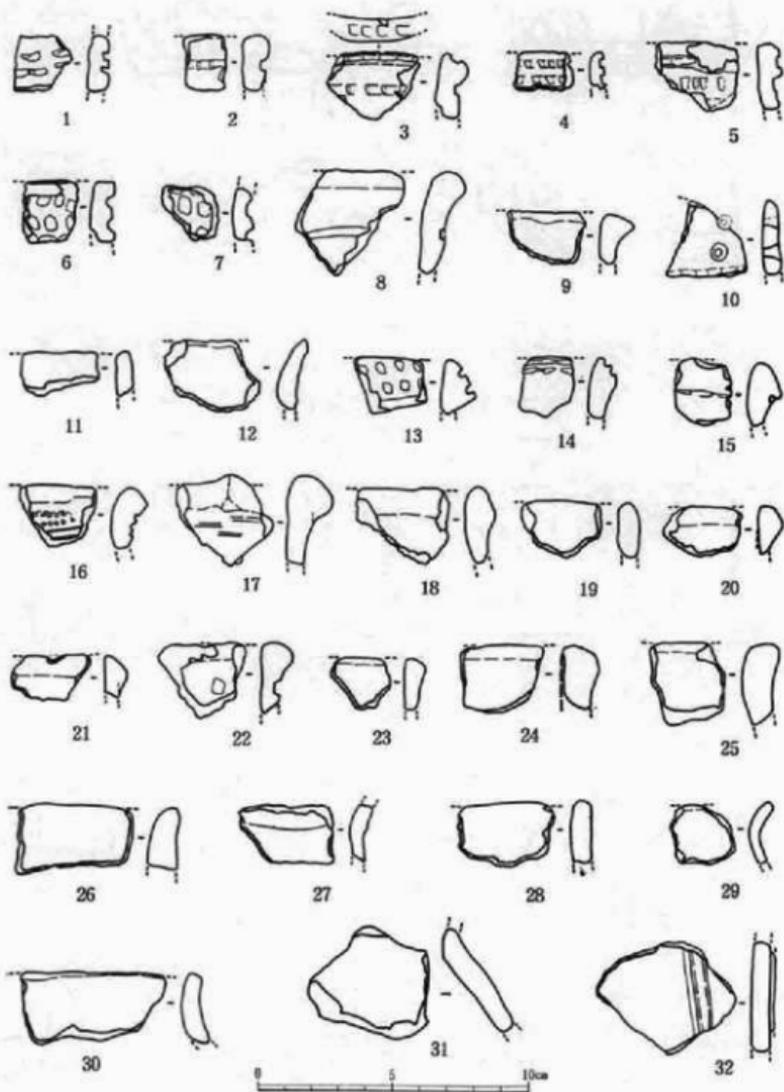
図版 8 室川貝塚範囲確認調査資料 東地区(13~16, 23), 西地区(1~12, 17~34)



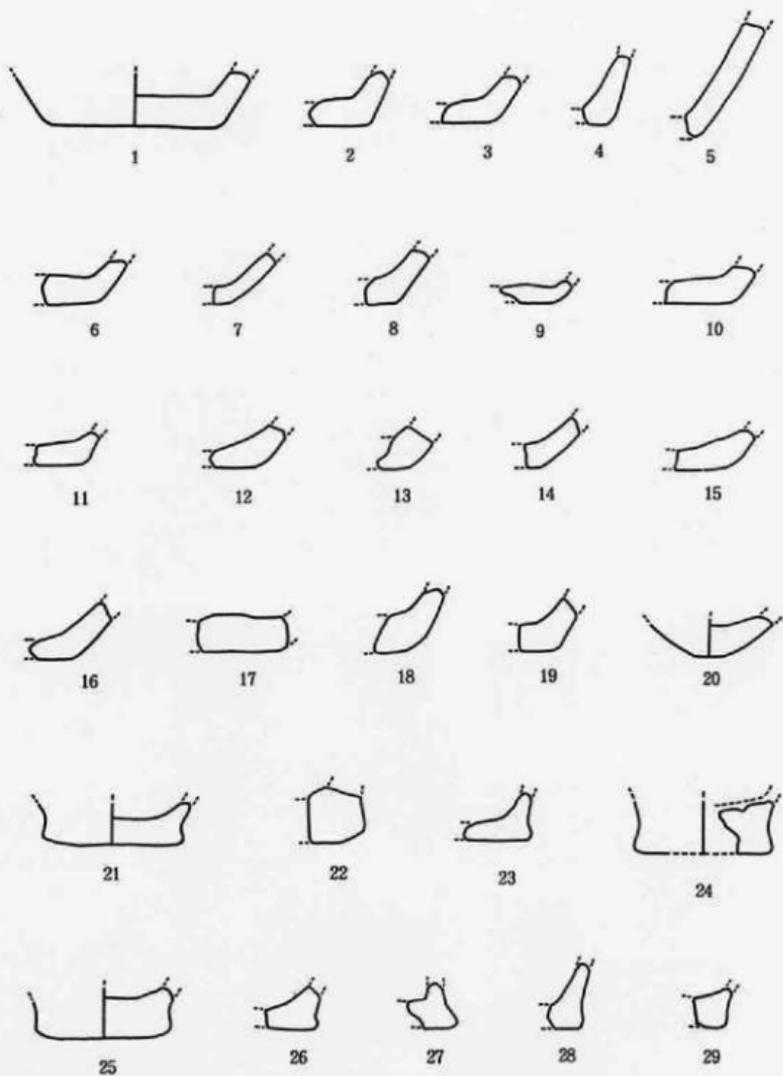
图版 9 室川貝塚範圍確認調查資料 西地区



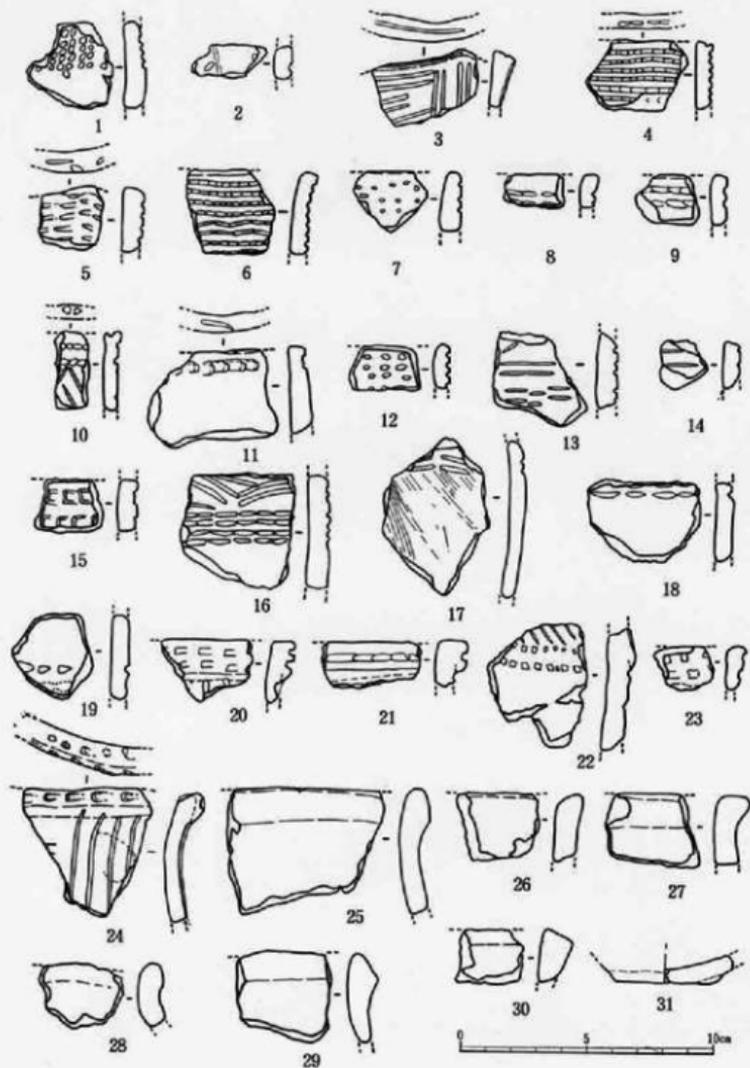
図版10 室川貝塚範囲確認調査資料 東地区(3),西地区(1, 2, 4~33)



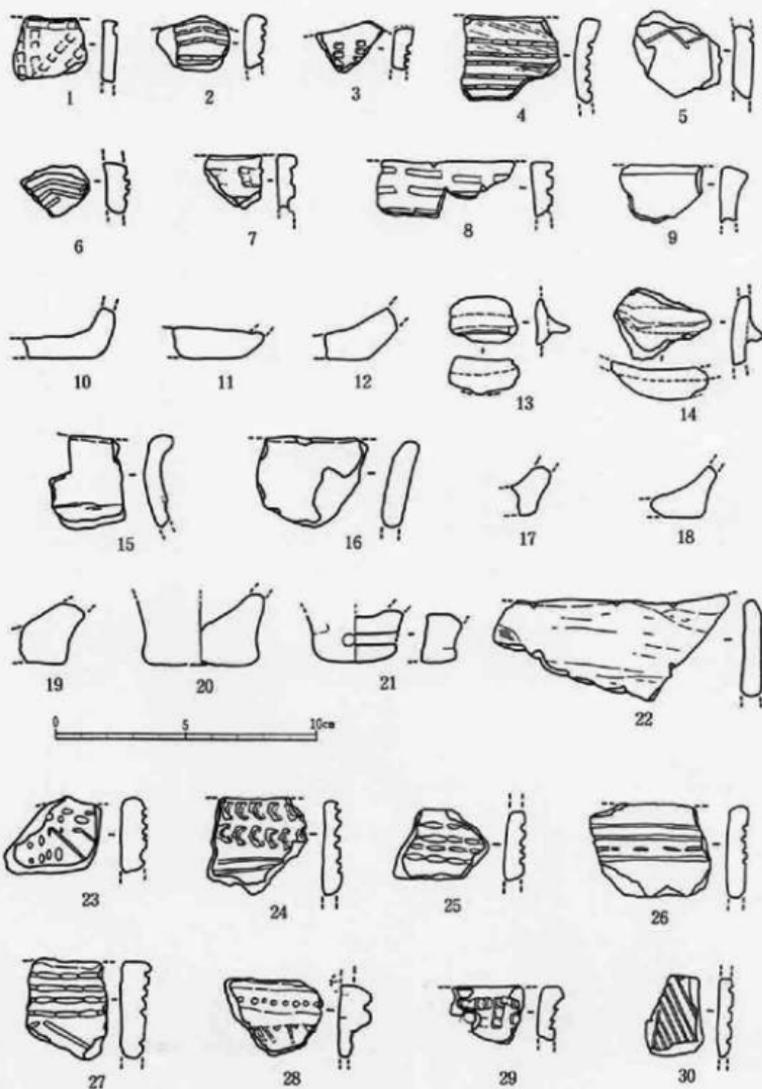
図版11 室川貝塚範囲確認調査資料 東地区(26, 30, 32), 西地区(1~20, 22~25, 27~29, 31)



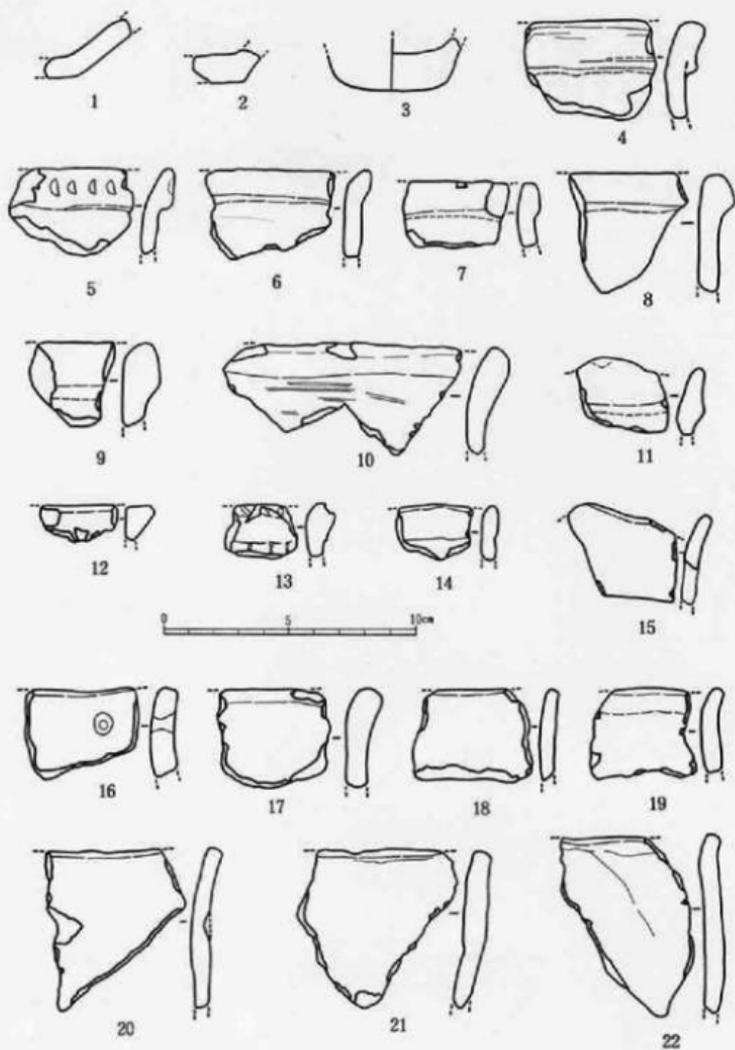
图版12 室川貝塚範圍確認調查資料 西地区



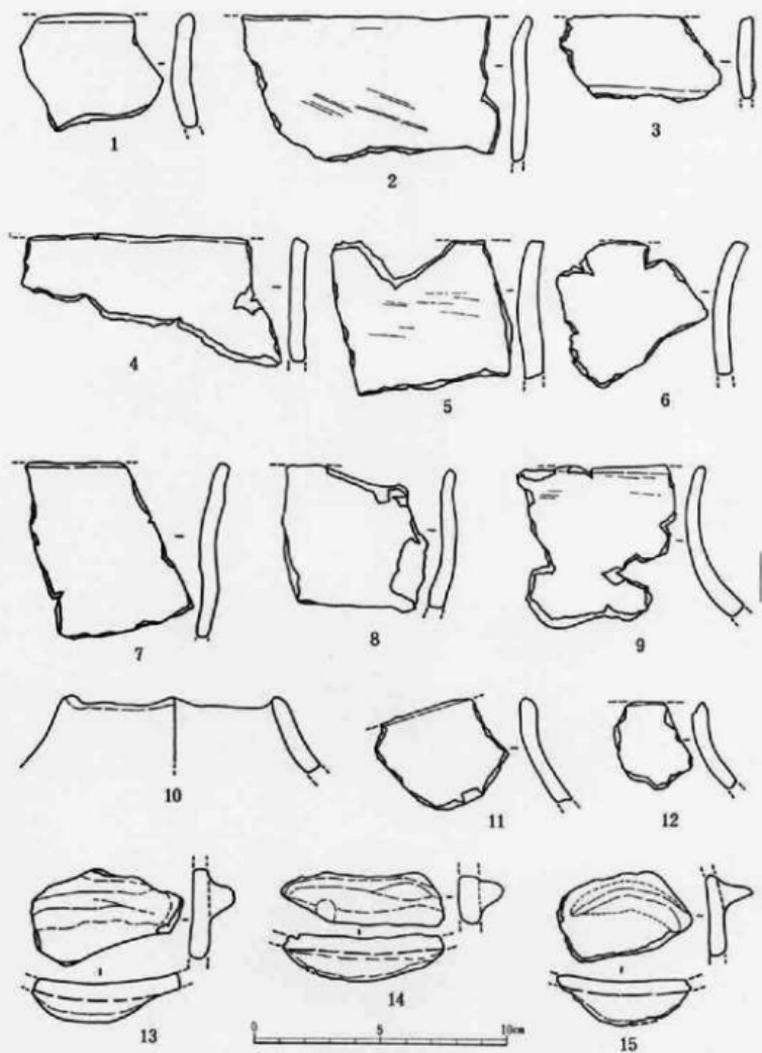
図版13 室川貝塚範囲確認調査試掘グリッド資料 西地区



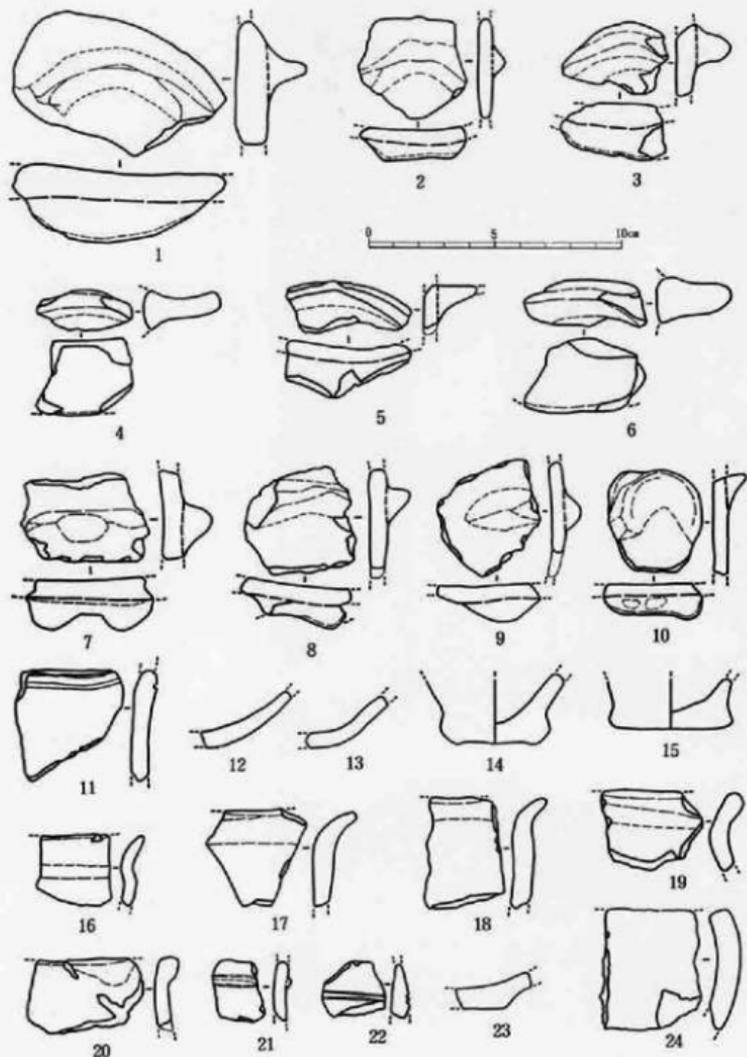
図版14 室川貝塚範囲確認調査試掘グリッド資料 東地区(1~12, 15), 西地区(13, 14, 16~22)  
室川貝塚東地区の記録保存発掘調査資料(23~ )



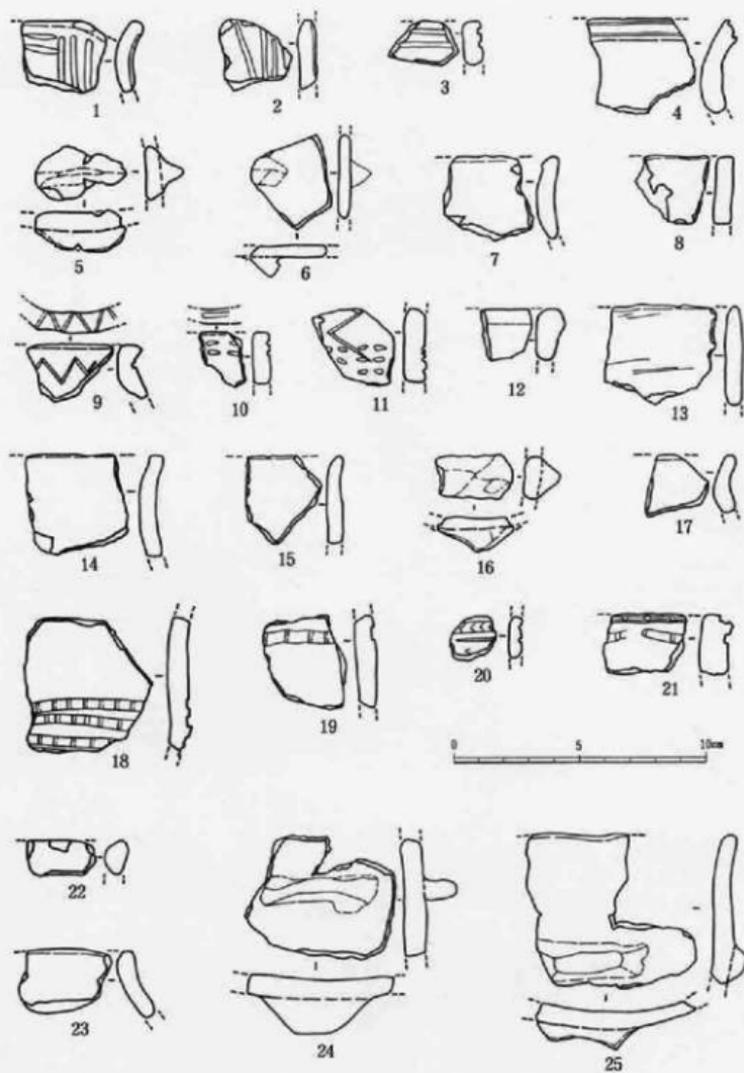
図版15 室川貝塚東地区の記録保存発掘調査資料



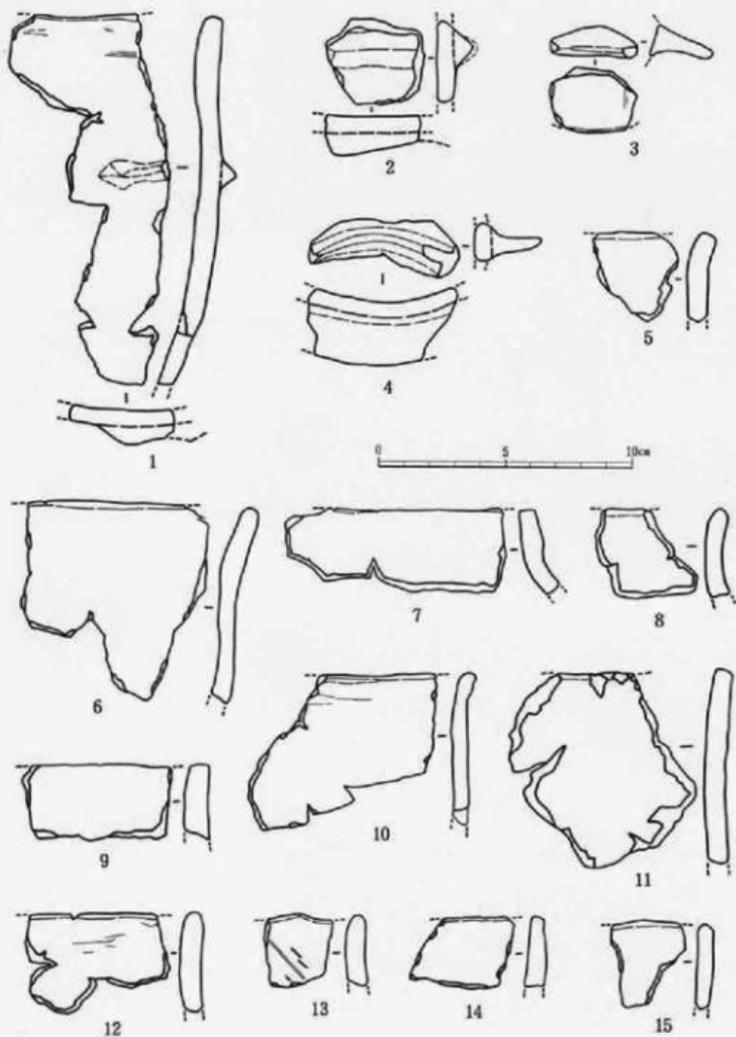
図版16 室川貝塚東地区の記録保存発掘調査資料



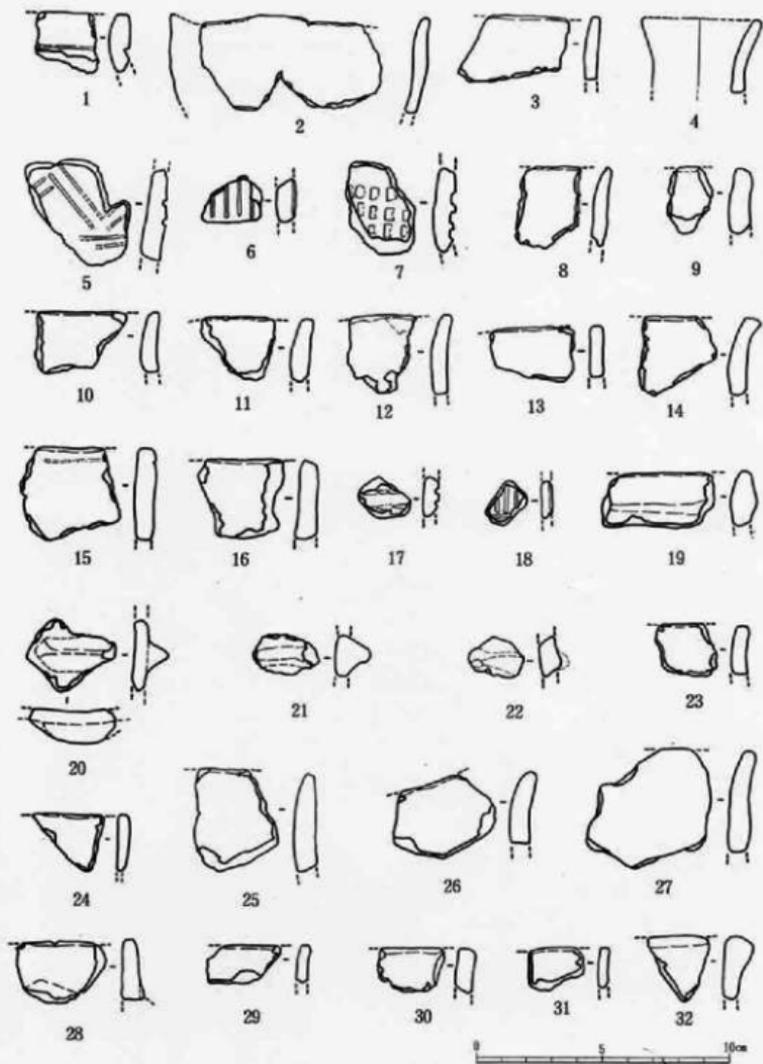
図版17 室川貝塚東地区の記録保存発掘調査資料



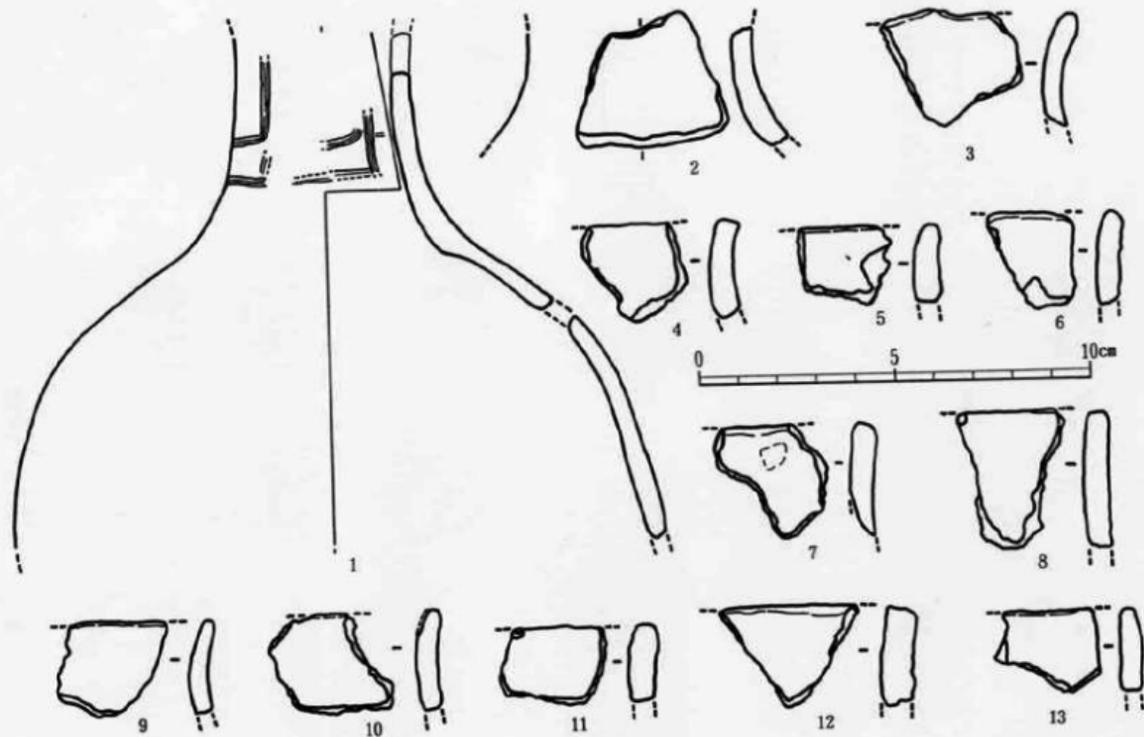
図版18 室川貝塚東地区の記録保存発掘調査資料(グリッドR23)



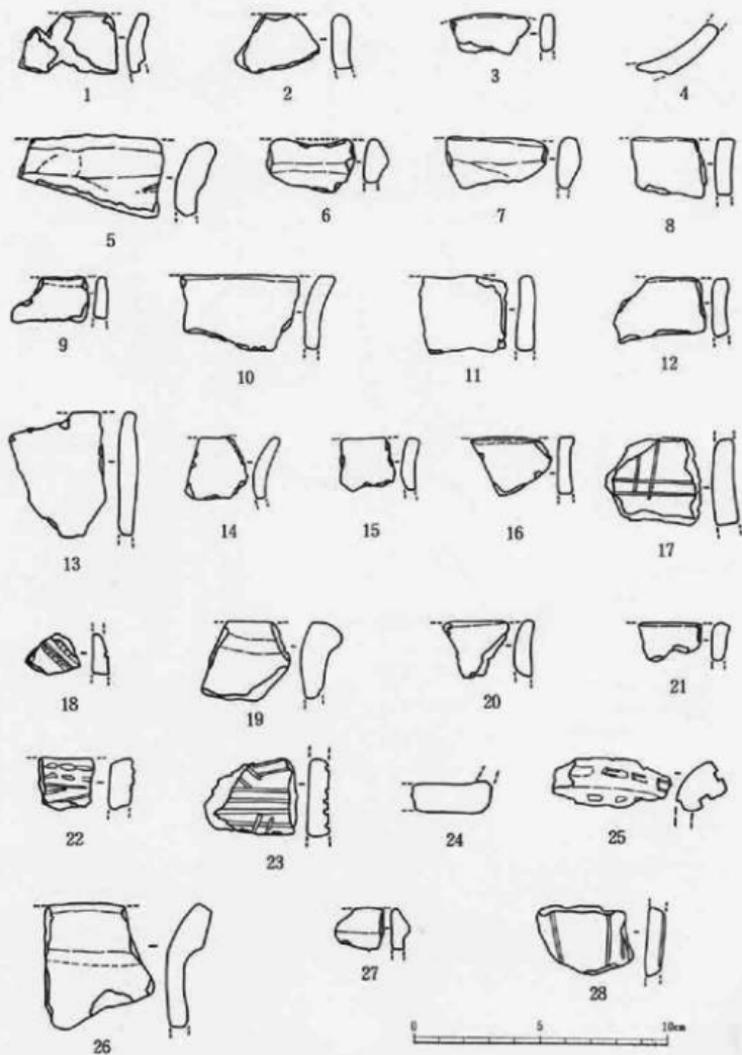
図版19 室川貝塚東地区の記録保存発掘調査資料(グリッドR23)



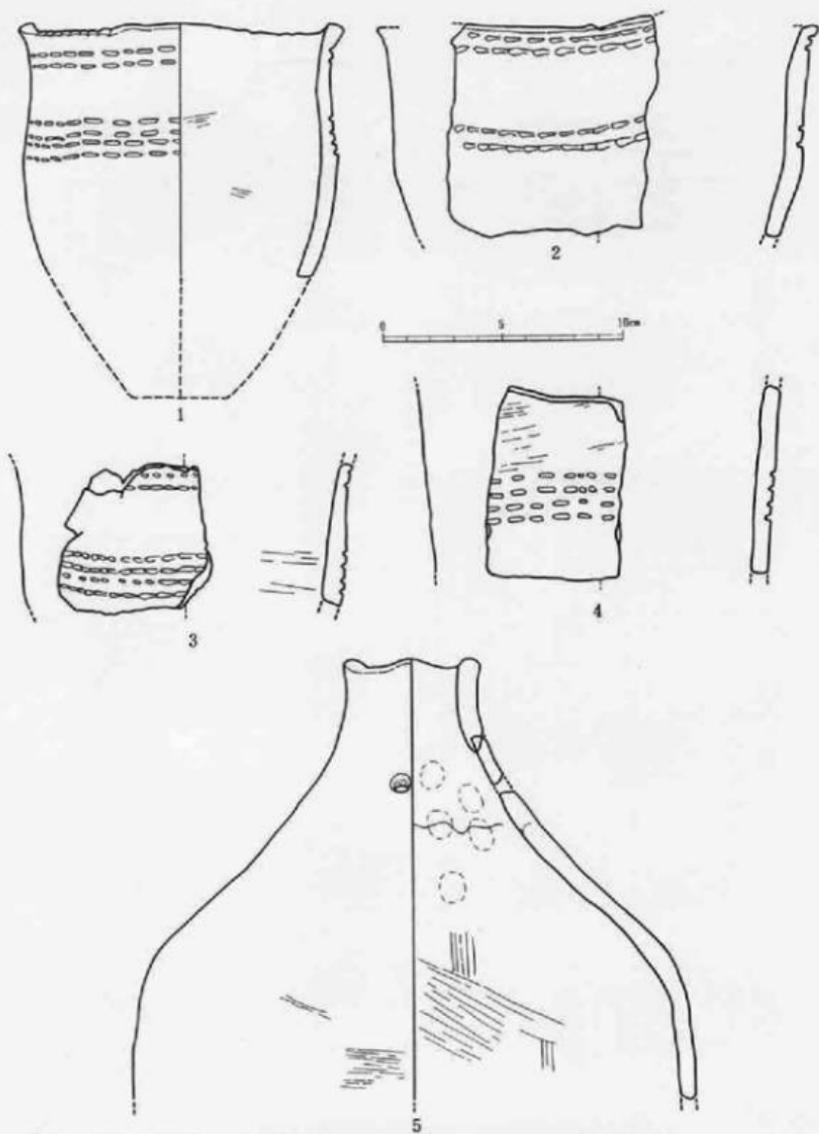
図版20 室川貝塚東地区の記録保存発掘調査資料(グリッドR23)



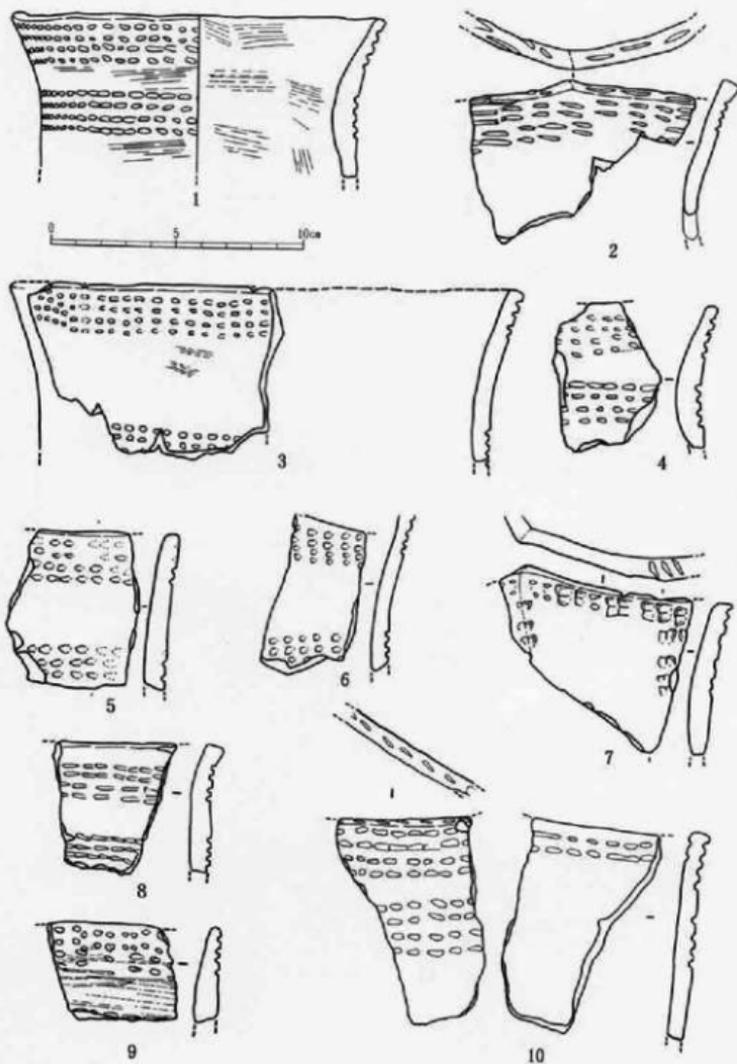
図版21 室川貝塚東地区の記録保存発掘調査資料(グリッドR23)



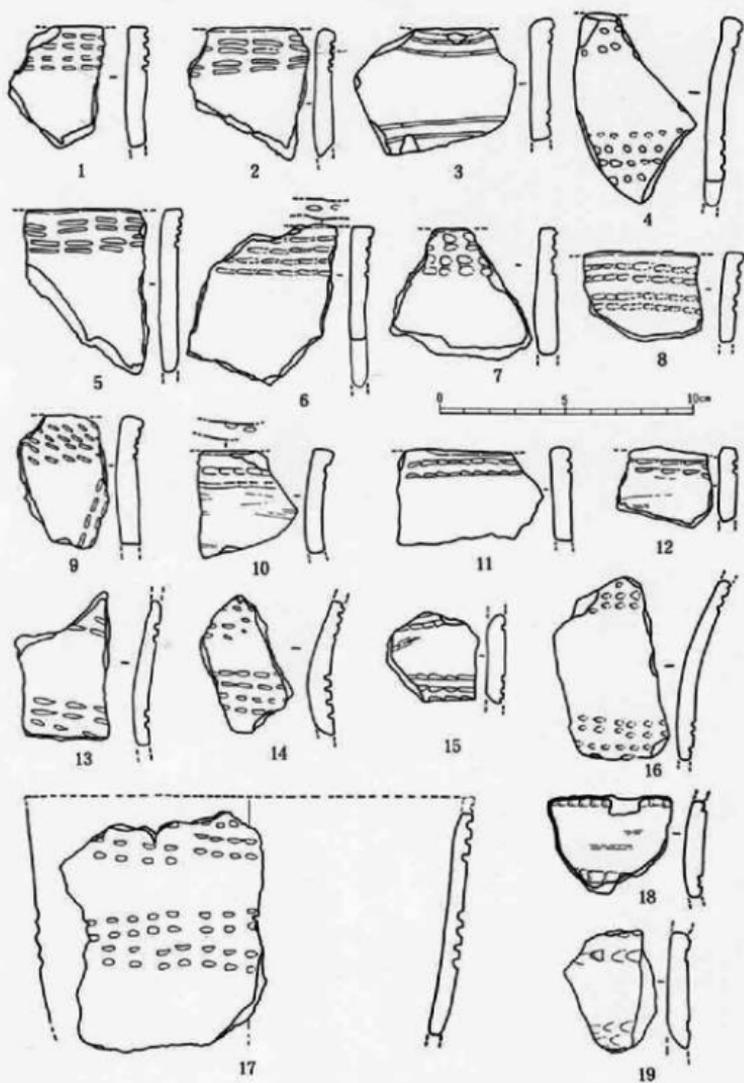
図版22 室川貝塚東地区の記録保存発掘調査資料(グリッドR23)



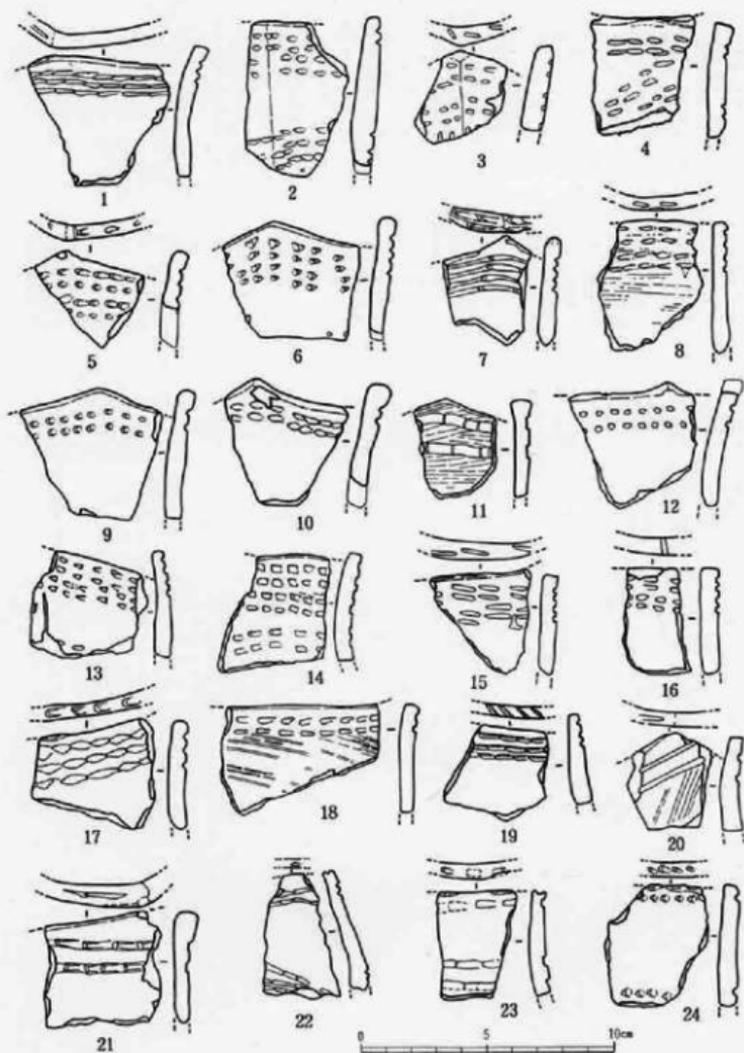
図版23 室川貝塚東地区の記録保存発掘調査資料(北東部黒色遺物包含層凹地部)



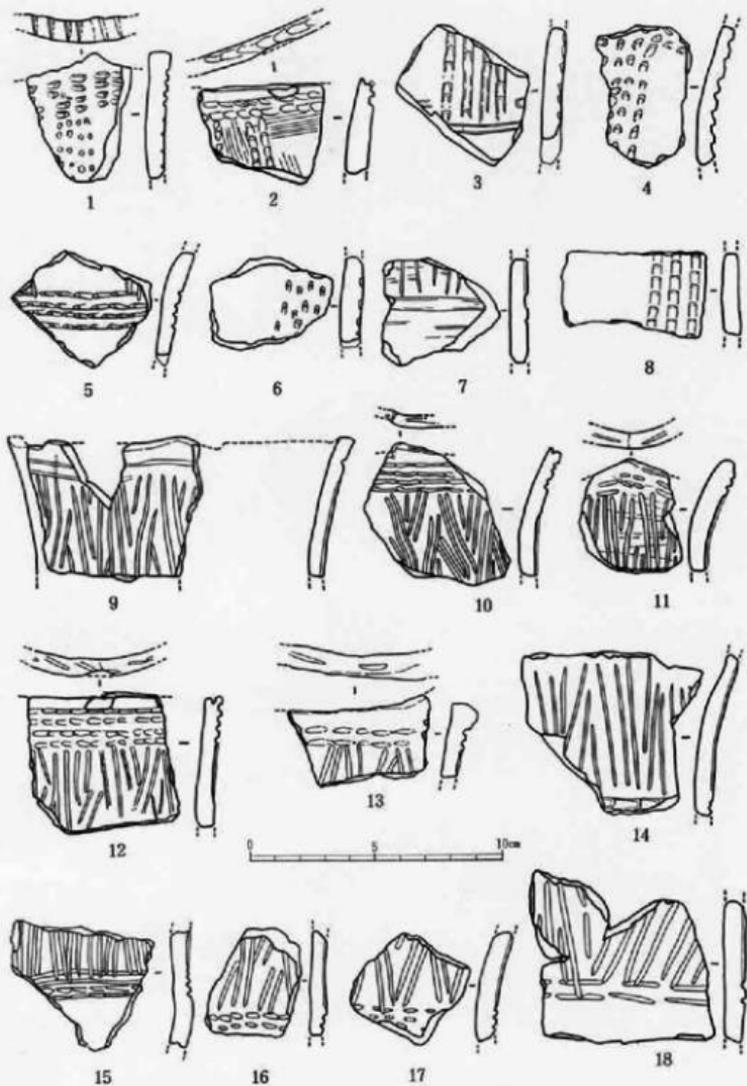
図版24 室川貝塚東地区の記録保存発掘調査資料(北東部黒色遺物包含層凹地部)



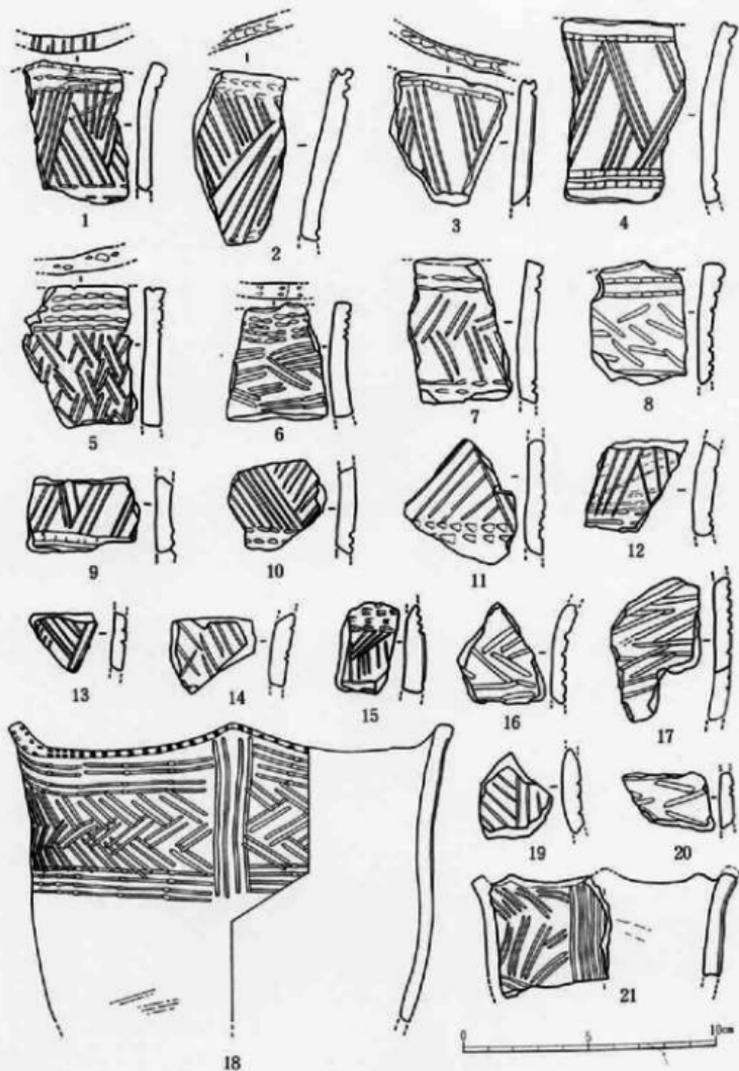
図版25 室川貝塚東地区の記録保存発掘調査資料(北東部黒色遺物包含層凹地部)



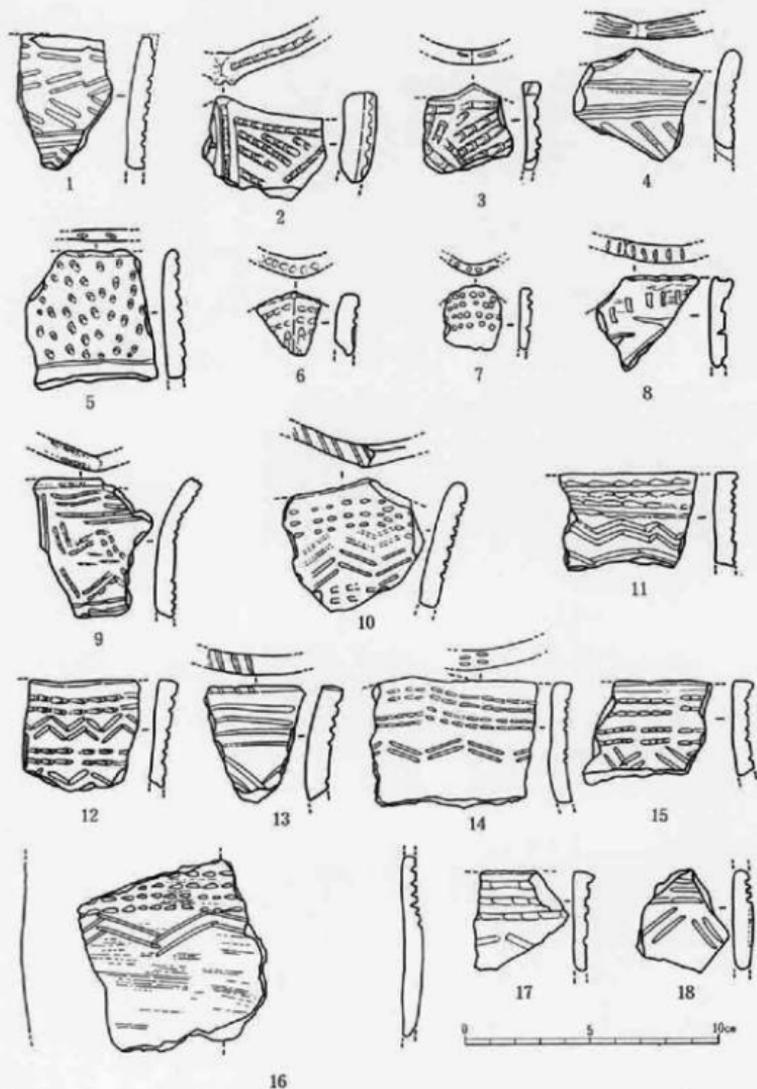
図版26 室川貝塚東地区の記録保存発掘調査資料(北東部黒色遺物包含層凹地部)



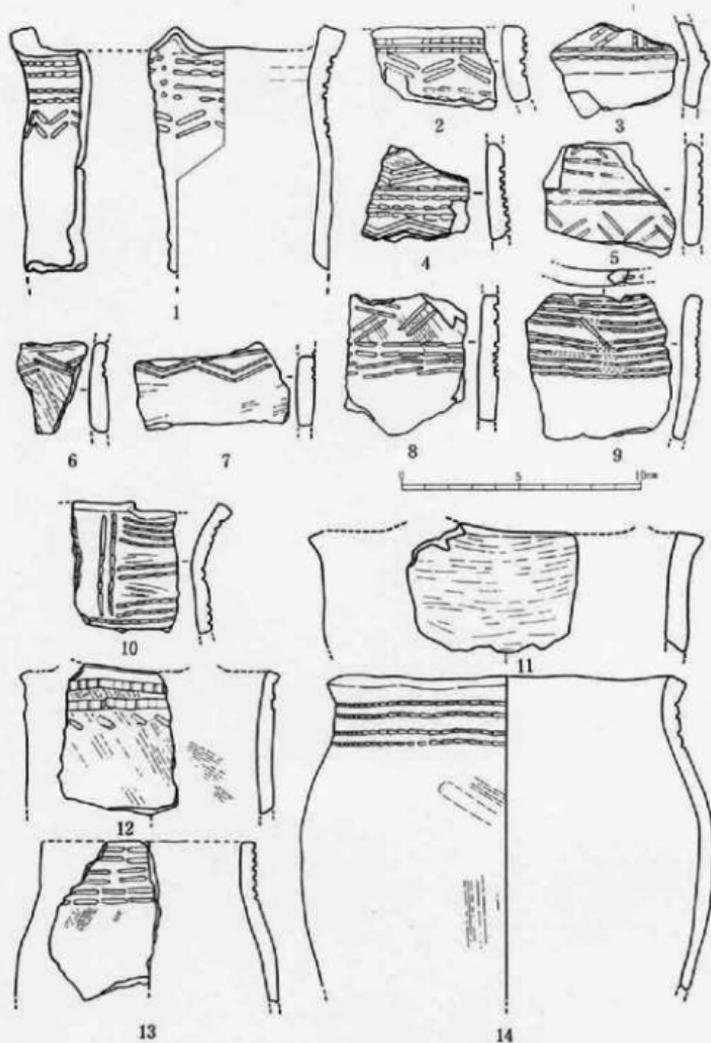
図版27 室川貝塚東地区の記録保存発掘調査資料(北東部黑色遺物包含層凹地部)



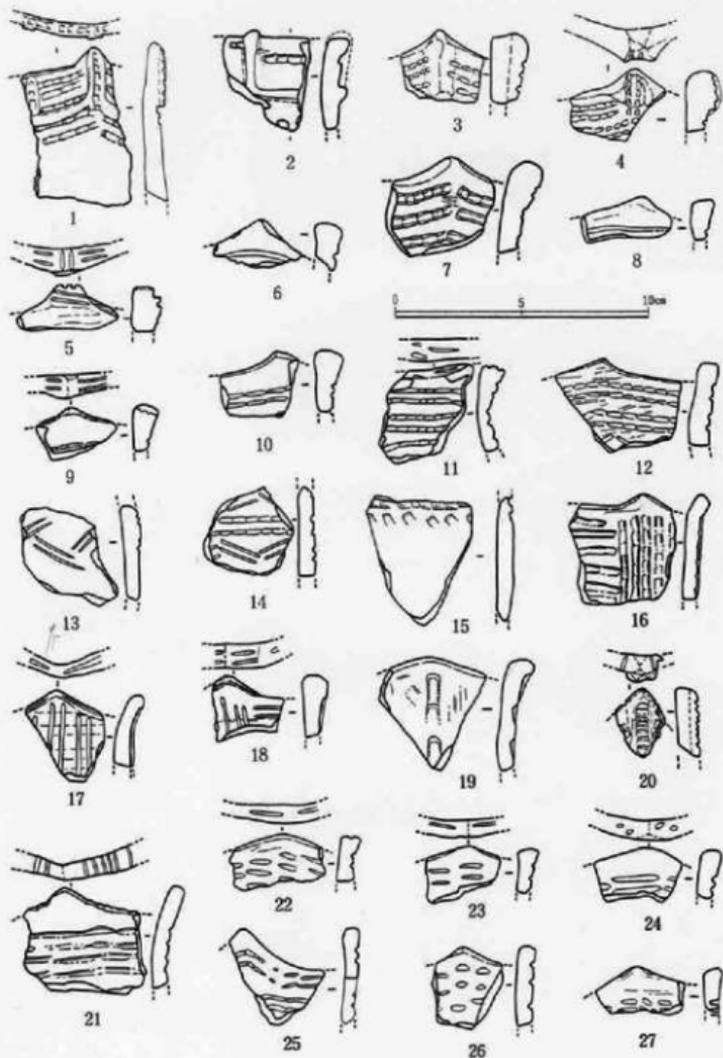
図版28 室川貝塚東地区の記録保存発掘調査資料(北東部黑色遺物包含層凹地部)



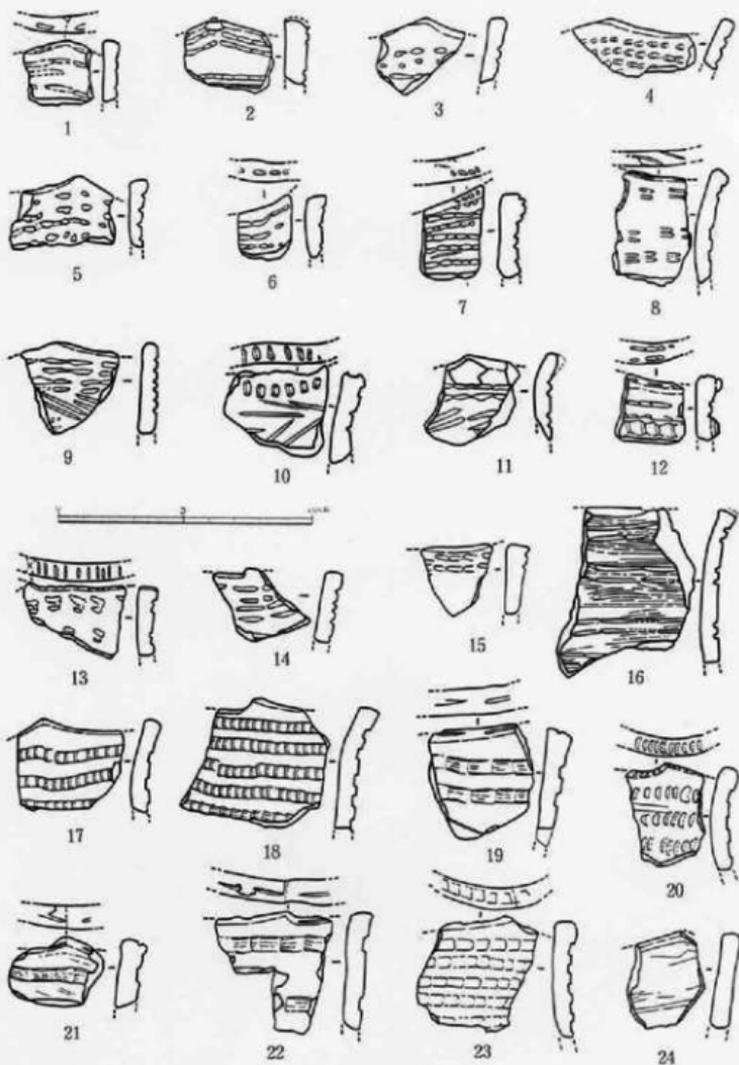
図版29 室川貝塚東地区の記録保存発掘調査資料(北東部黒色遺物包含層凹地部)



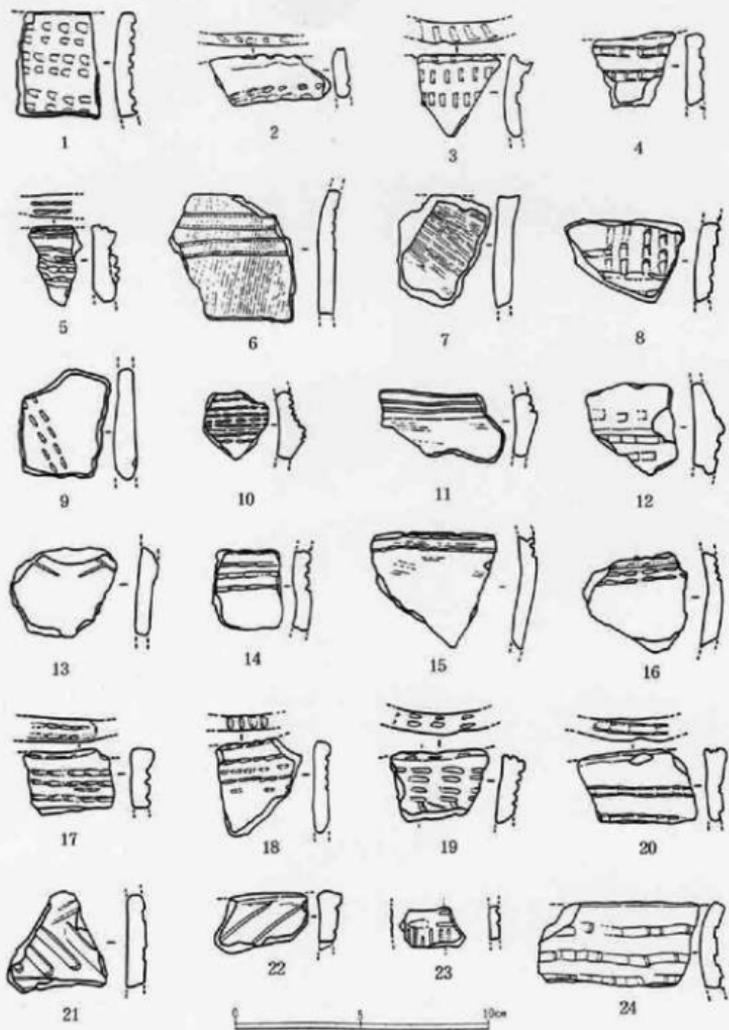
図版30 室川貝塚東地区の記録保存発掘調査資料(北東部黒色遺物包含層凹地部)



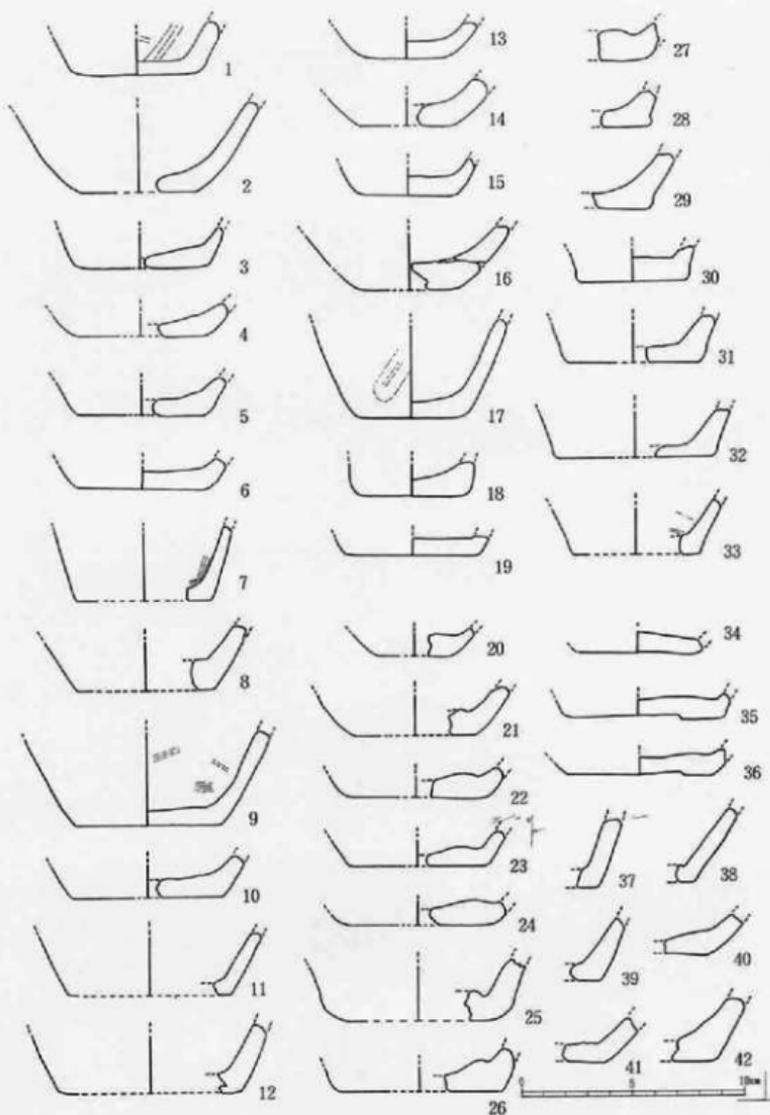
図版31 室川貝塚東地区の記録保存発掘調査資料(北東部黒色遺物包含層凹地部)



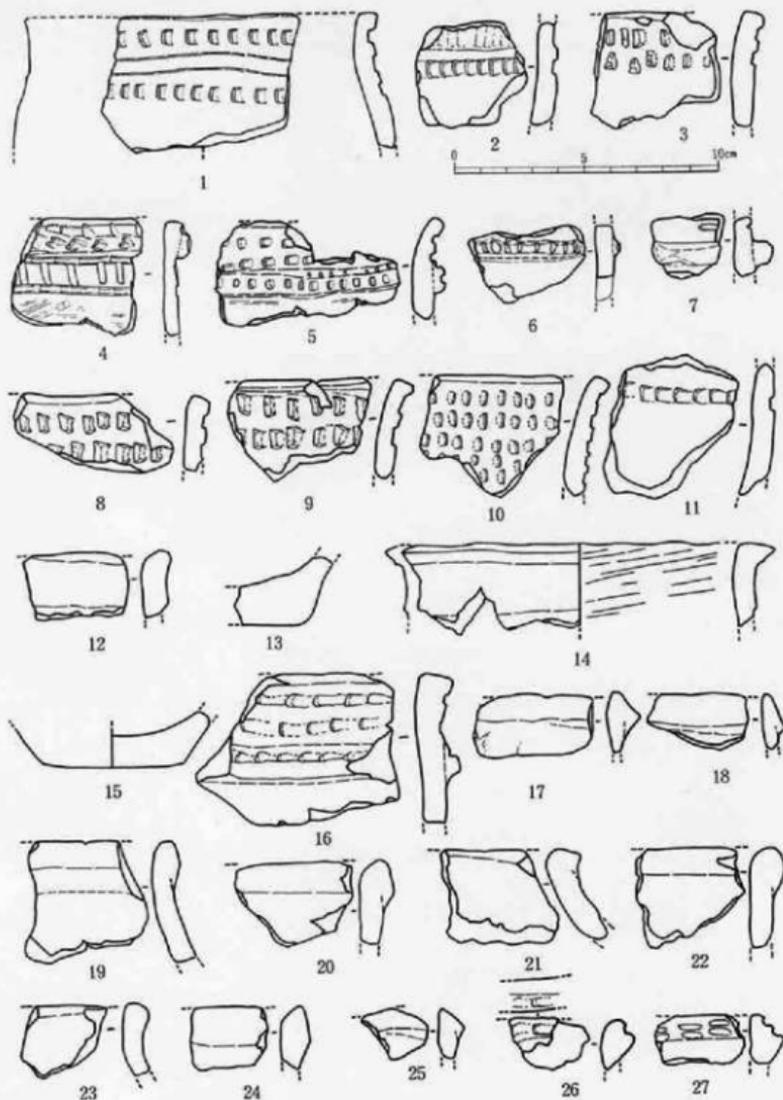
図版32 室川貝塚東地区の記録保存発掘調査資料(北東部黒色遺物包含層凹地部)



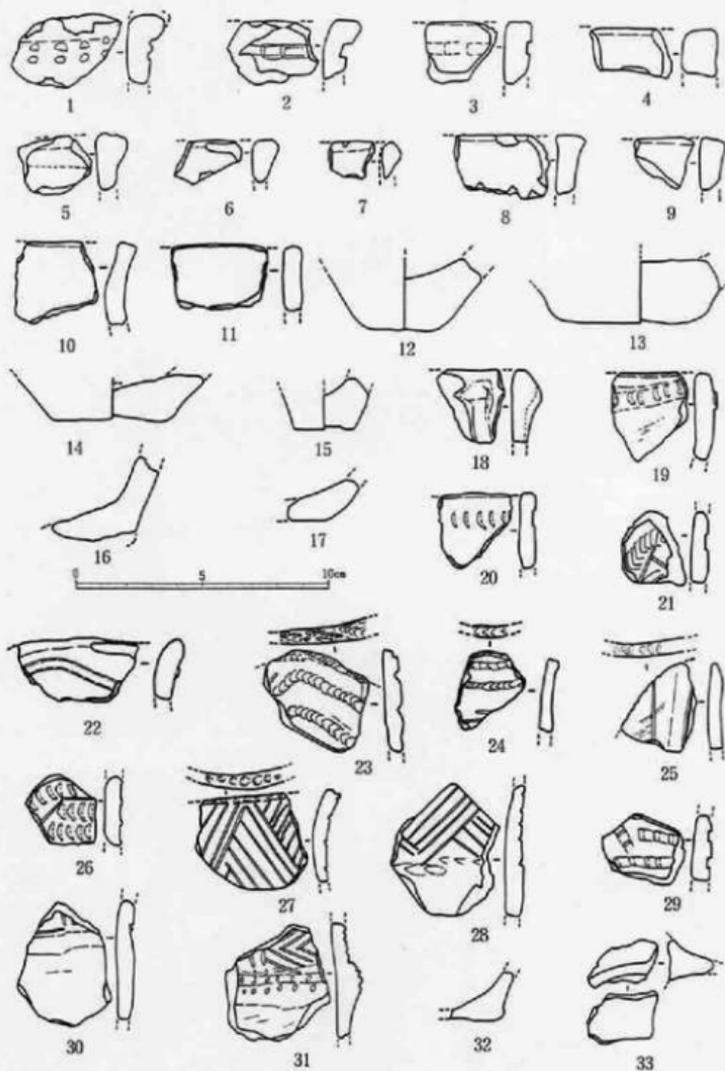
図版33 室川貝塚東地区の記録保存発掘調査資料(北東部黒色遺物包含層凹地部)



図版34 室川貝塚東地区の記録保存発掘調査資料(北東部黒色遺物包含層凹地部)

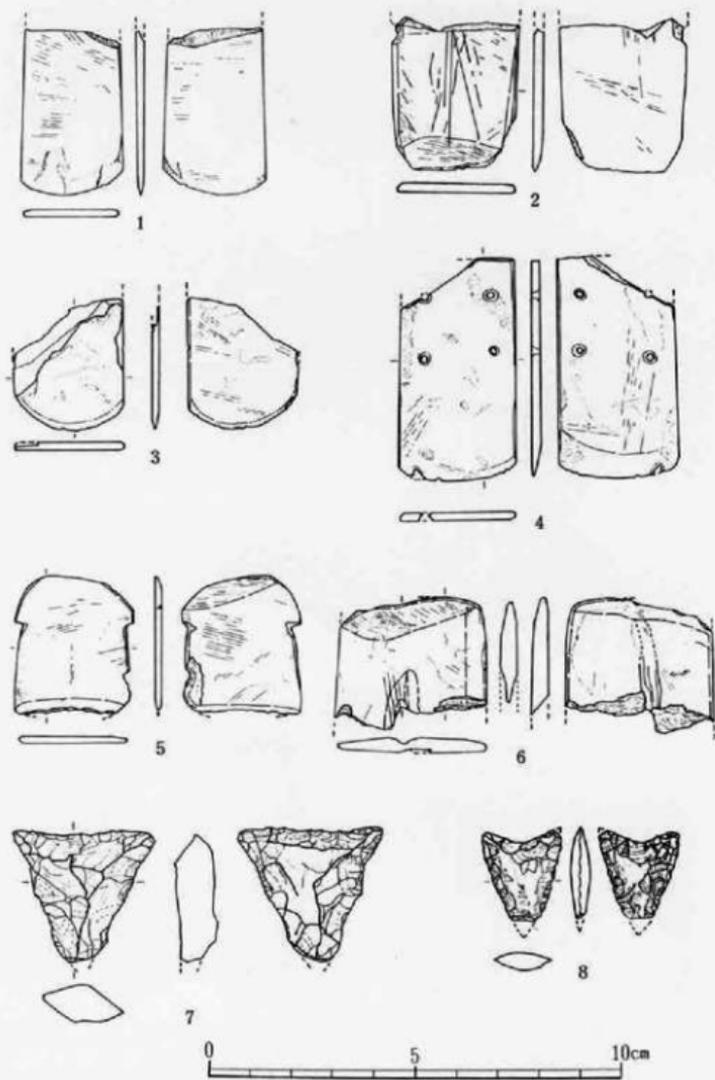


図版35 室川貝塚東地区の記録保存発掘調査資料(北東部黒色遺物包含層凹地部)

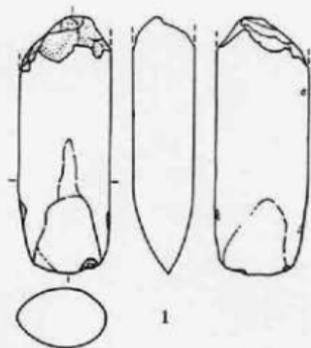


図版36 室川貝塚東地区の記録保存発掘調査資料(北東部黒色遺物包含層凹地部)

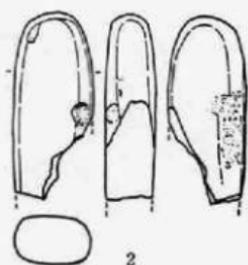
図版37~44・石器



图版37 頁岩製薄手利器・石鏃



1



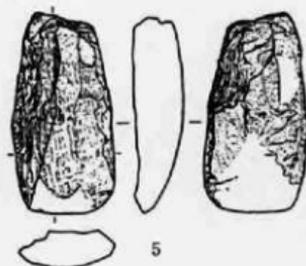
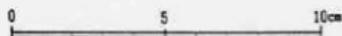
2



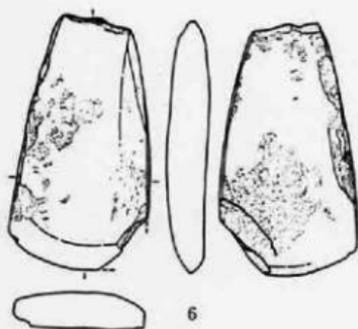
3



4

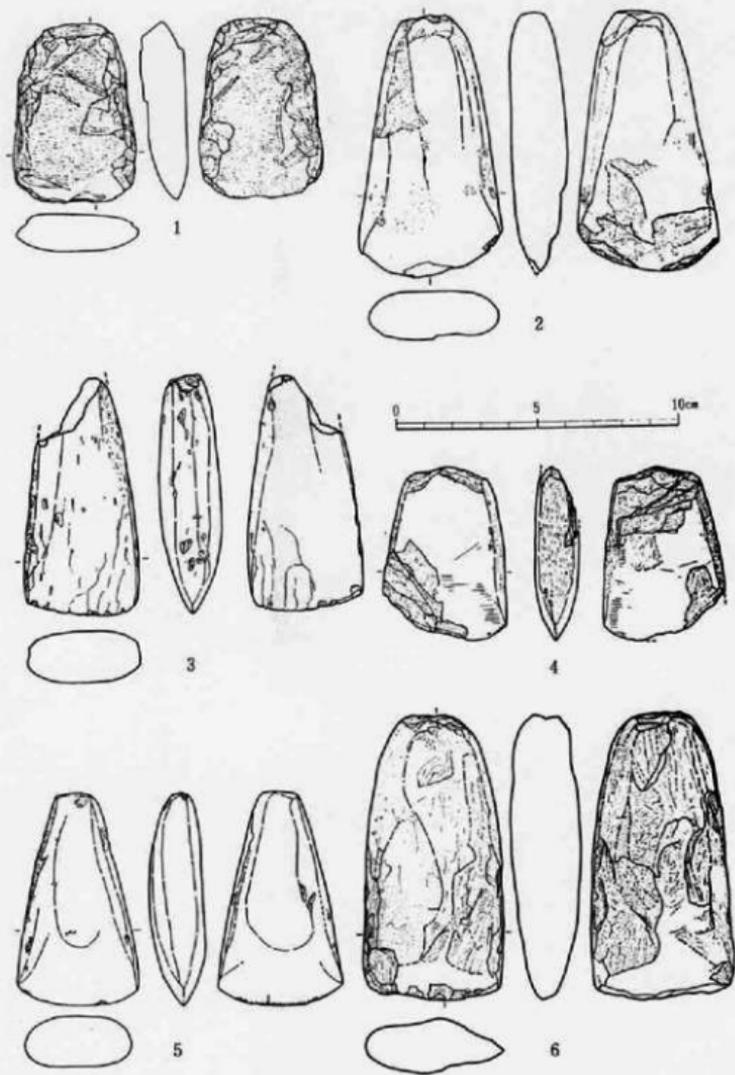


5

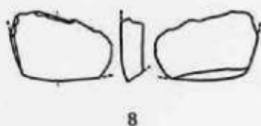
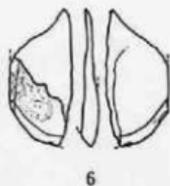
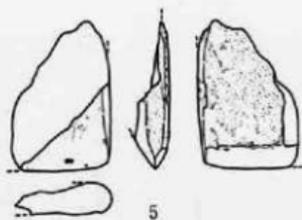
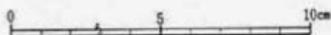
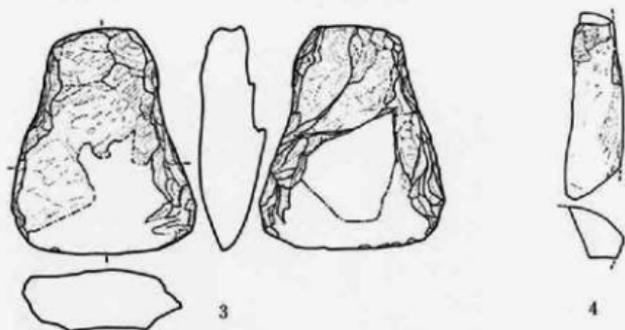
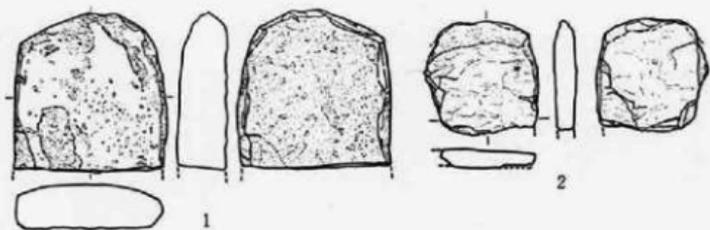


6

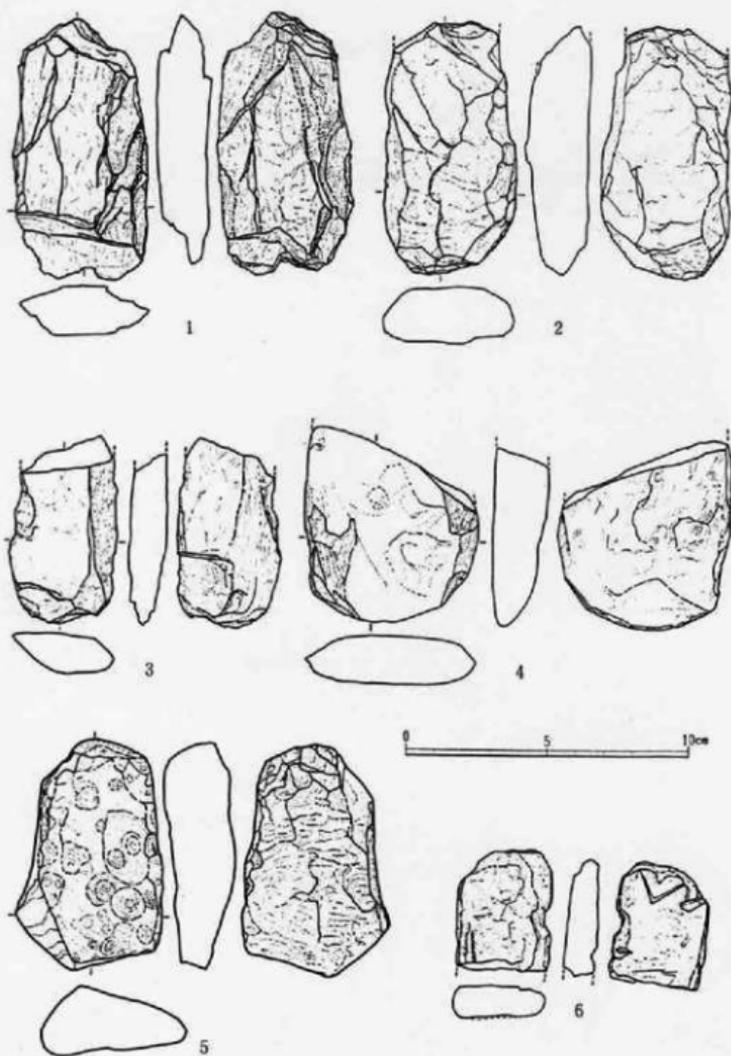
图版33 石盘状石器 1~4, 石斧类 5, 6



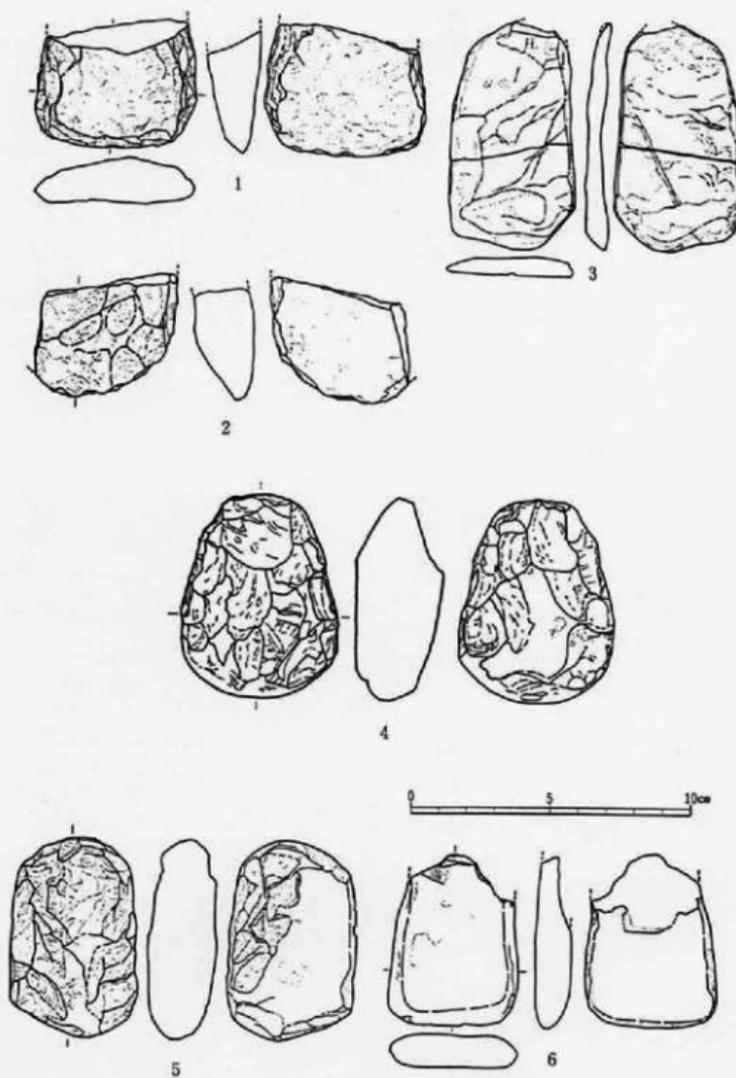
图版39 石斧類



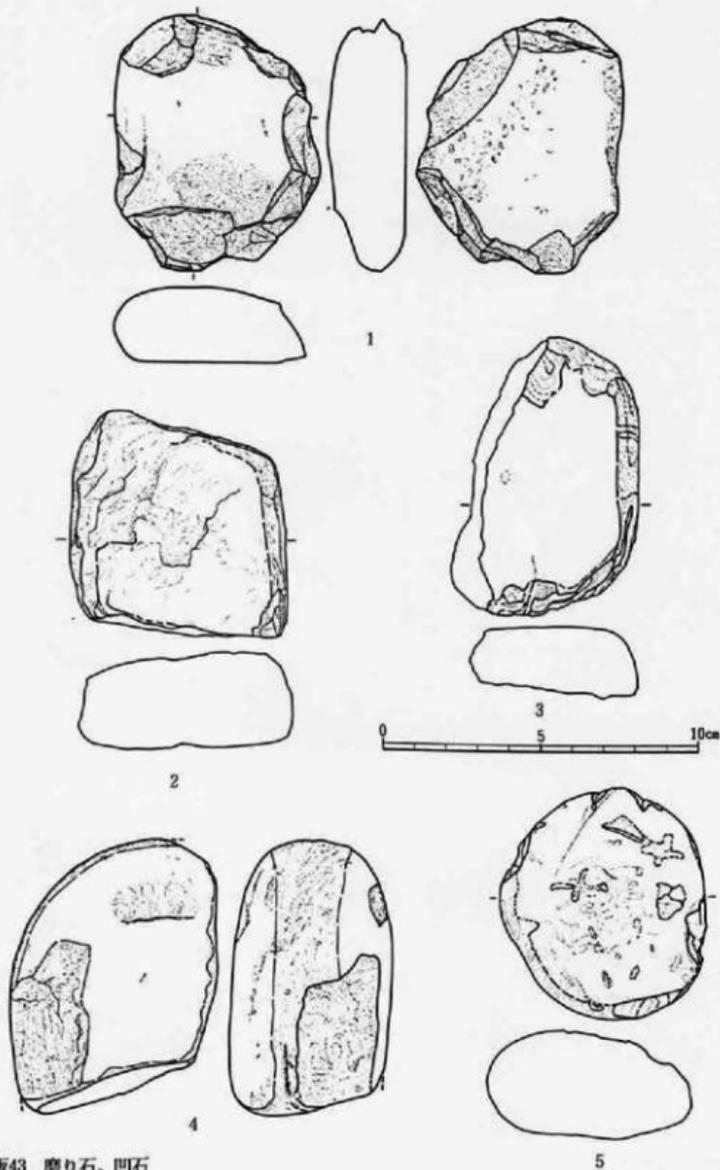
图版40 石斧類



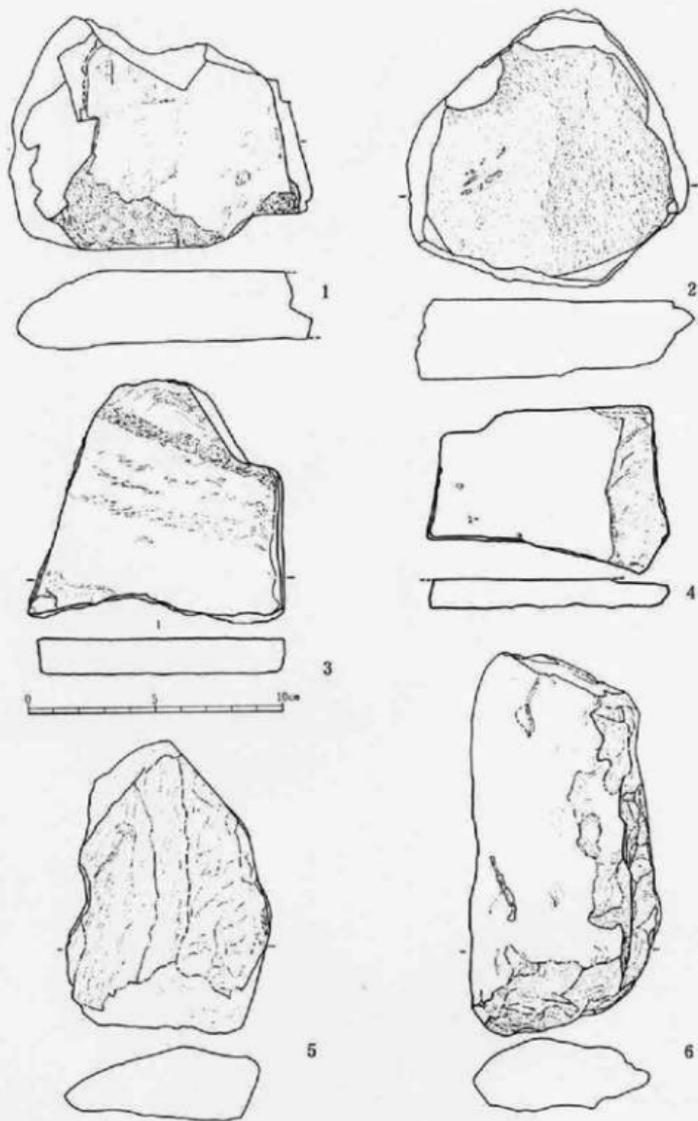
图版41 石斧類



图版42 石斧類 1~3・石鏃・敲打石 4~6



図版43 磨り石、凹石



图版44 石皿・磁石

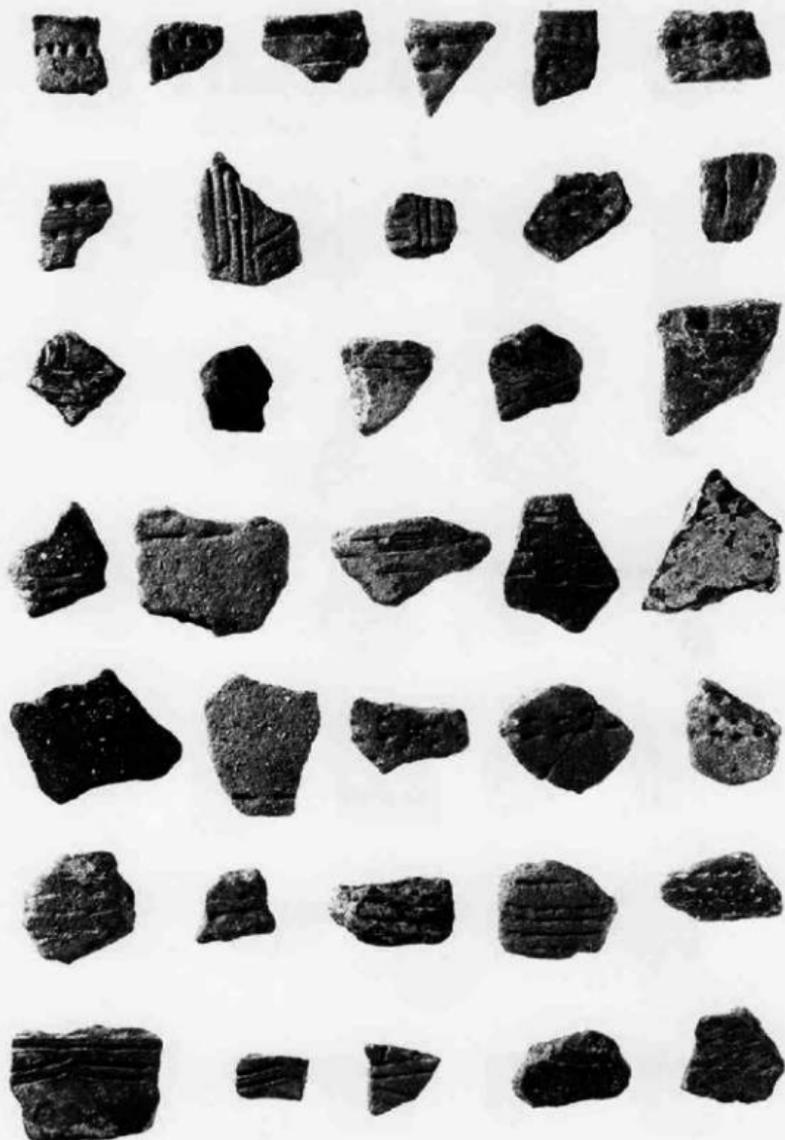
PL. 7~36・土器



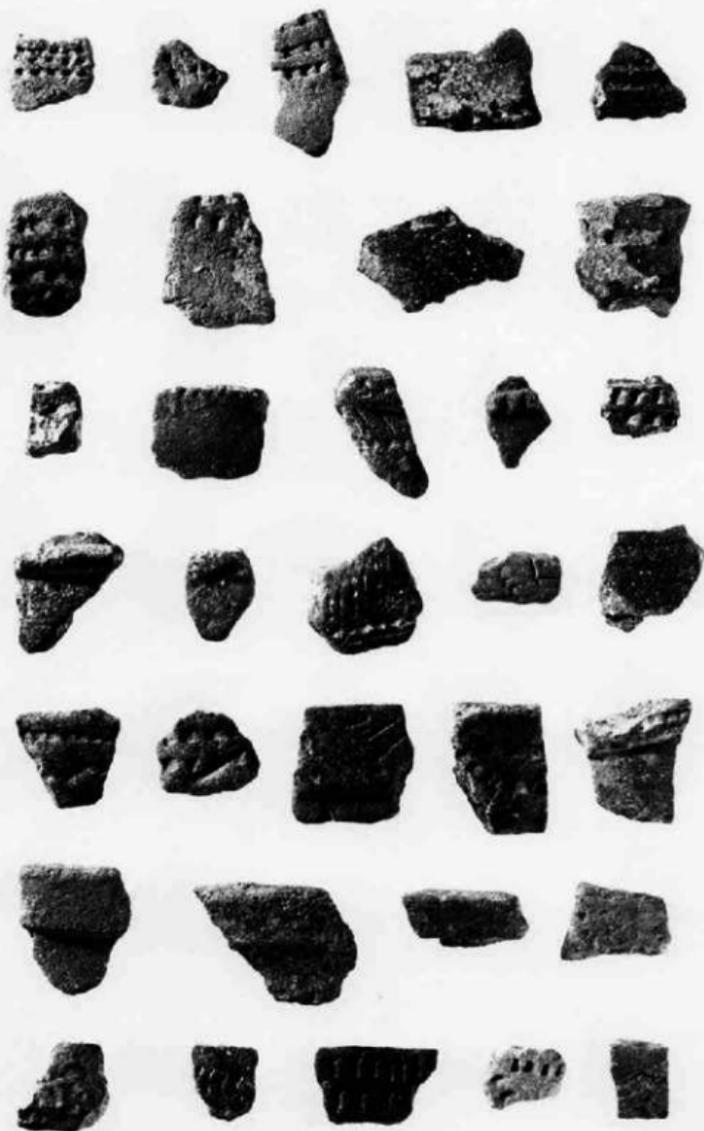
P.L. 7 室川貝塚範圍確認調査資料 西地区



P L. 8 室川貝塚範圍確認調査資料 東地区(13~16, 23), 西地区(1~12, 17~34)



P.L. 9 室川貝塚範圍確認調査資料 西地区



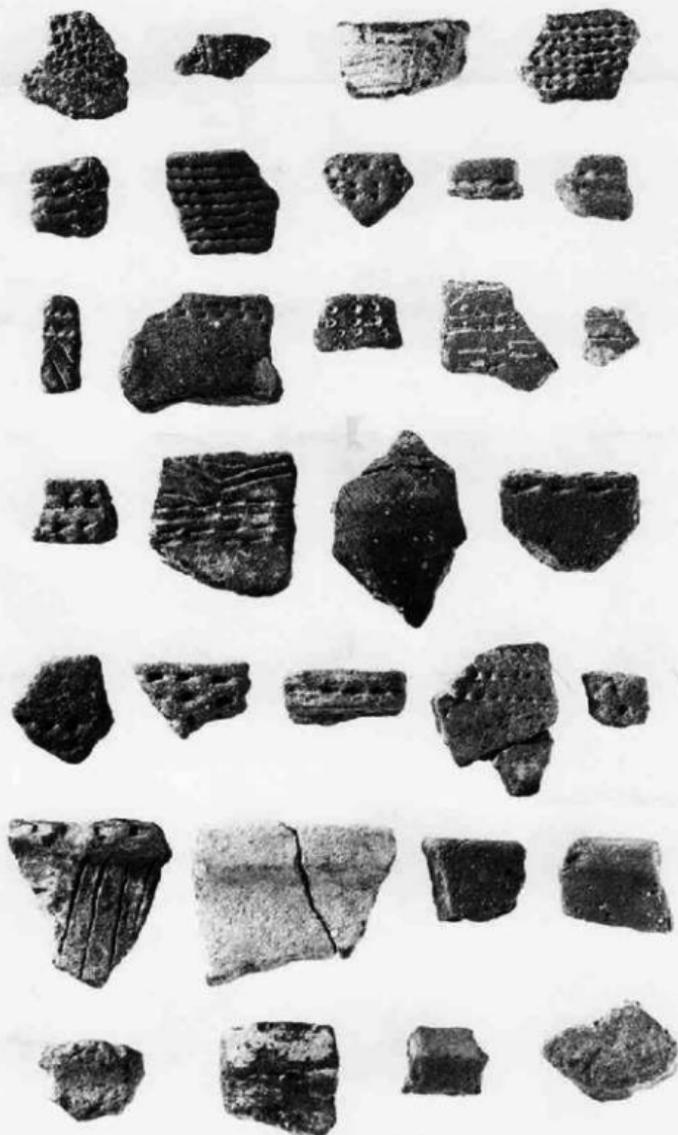
P.L. 10 室川貝塚範圍確認調査資料 東地区(3), 西地区(1, 2, 4~33)



P. L. 11 室川貝塚範囲確認調査資料 東地区(26, 30, 32), 西地区(1~20, 22~25, 27~29, 31)



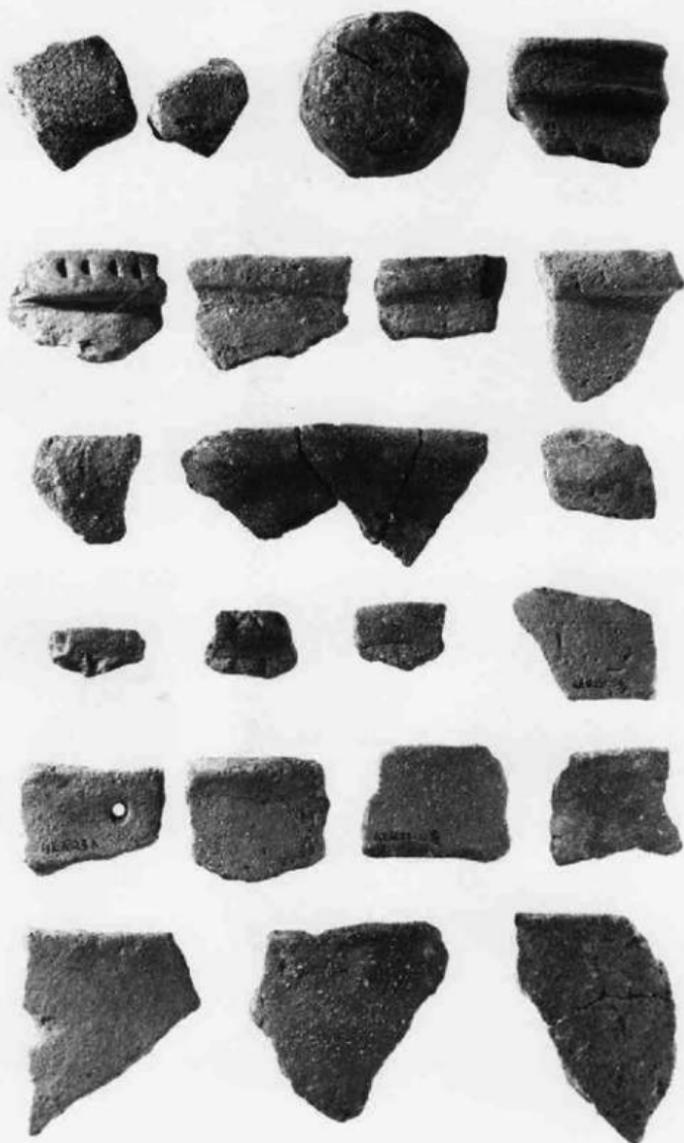
P.L. 12 室川貝塚範圍確認調査資料 西地区



PL. 13 室川貝塚範囲確認調査試掘グリッド資料 西地区



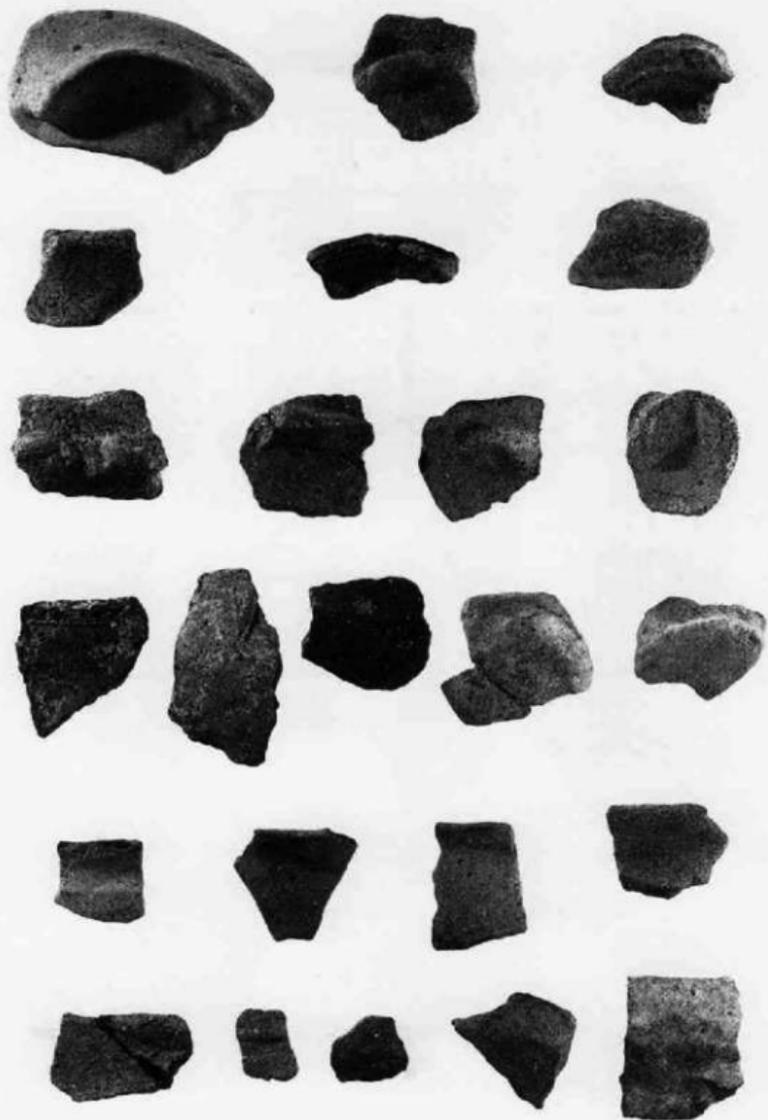
P.L. 14 室川貝塚発掘調査試掘グリッド資料 東地区(1~12,15),西地区(13,14,16~22)  
室川貝塚東地区の記録保存発掘調査資料(23~ )



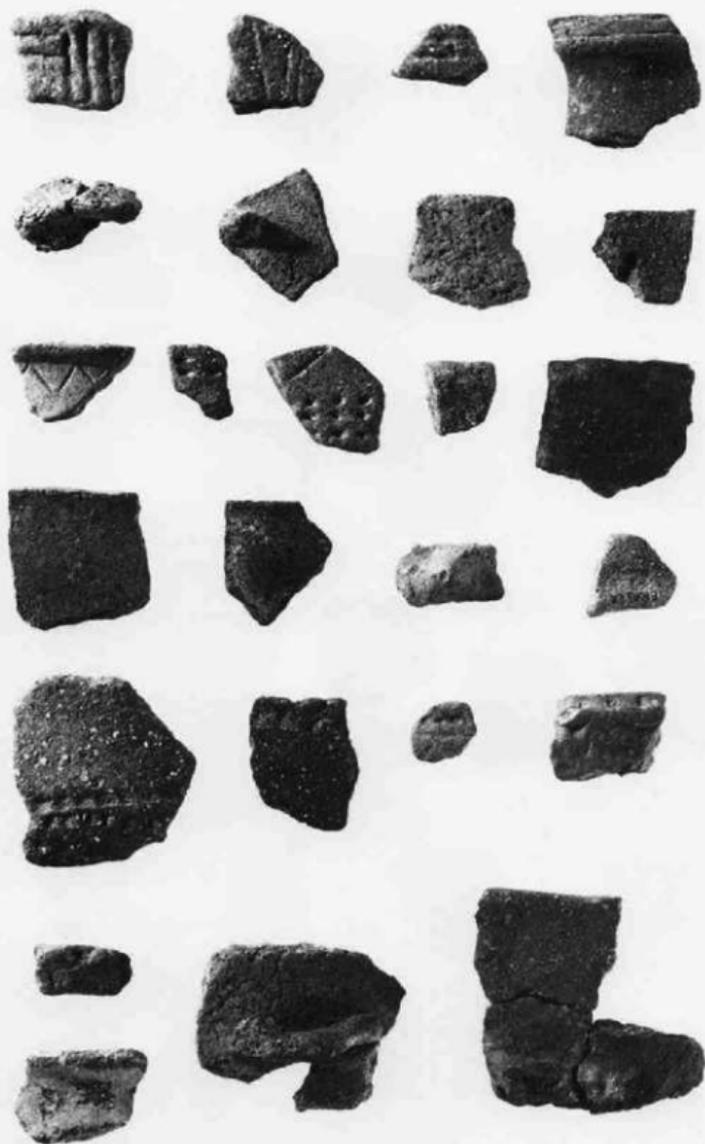
P.L. 15 室川貝塚東地区の記録保存発掘調査資料



P.L. 16 室川貝塚東地区の記録保存発掘調査資料



P.L. 17 室川貝塚東地区の記録保存発掘調査資料



P L. 18 室川貝塚東地区の記録保存発掘調査資料(グリッドR23)



P.L. 19 室川貝塚東地区の記録保存発掘調査資料(グリッFR23)



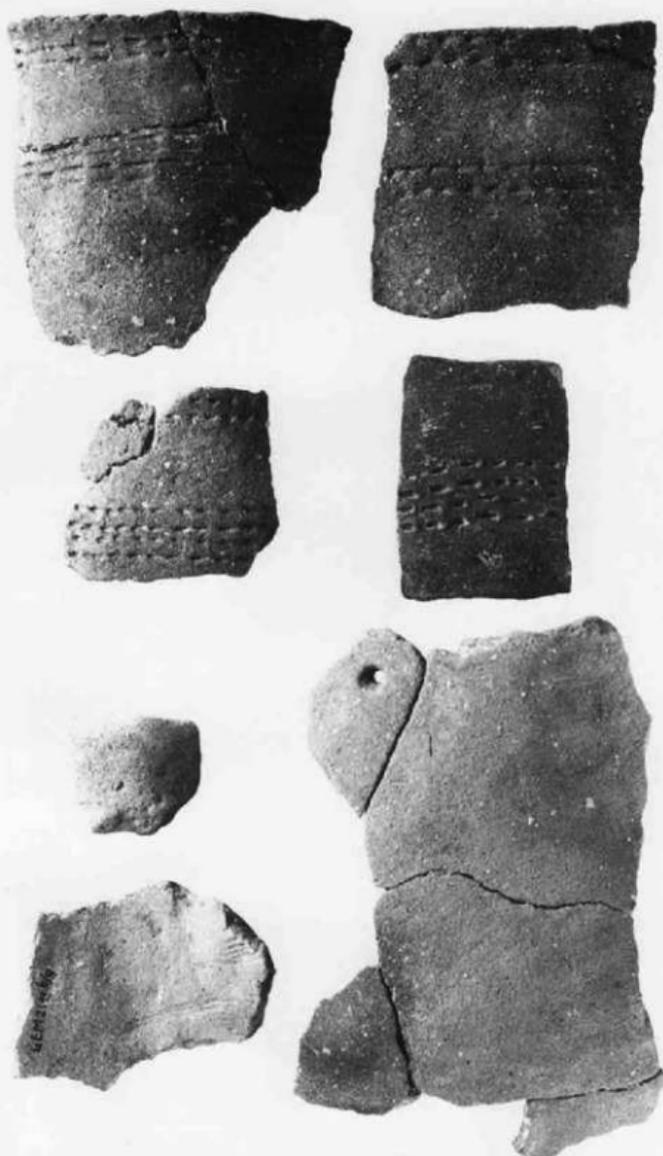
P.L. 20 室川貝塚東地区の記録保存発掘調査資料(グリッドR23)



P L. 21 室川貝塚東地区の記録保存発掘調査資料(グリッドR23)



P.L. 22 室川貝塚東地区の記録保存発掘調査資料(グリッドR23)



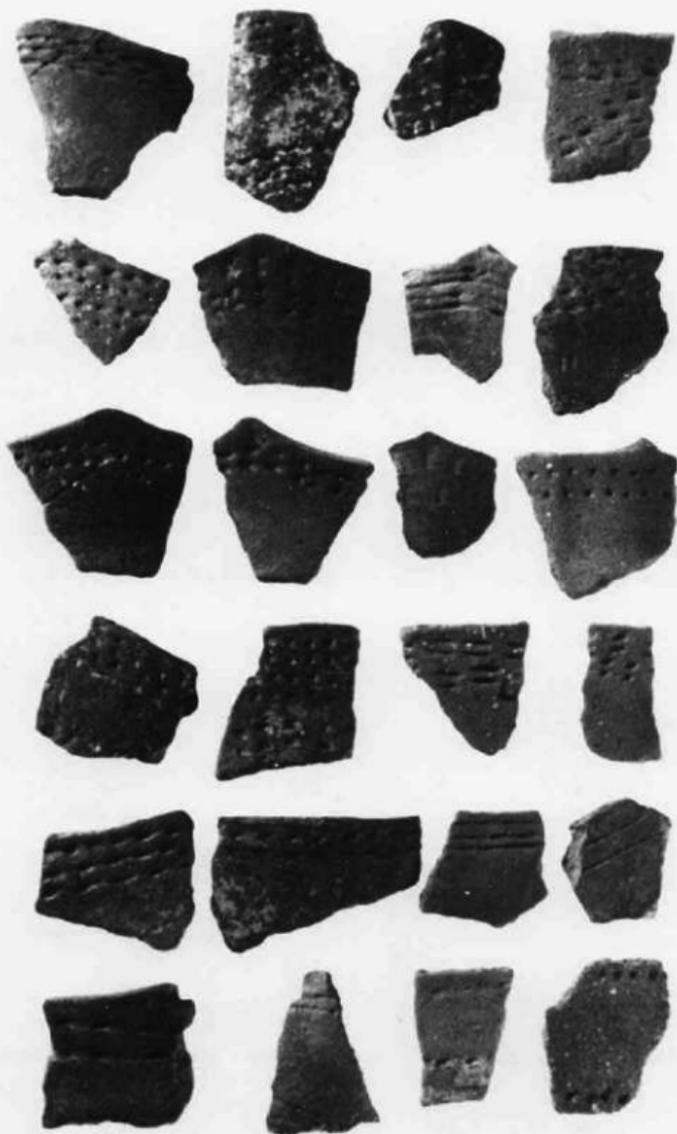
P L. 23 室川貝塚東地区の記録保存発掘調査資料(北東部黒色遺物包含層凹地部)



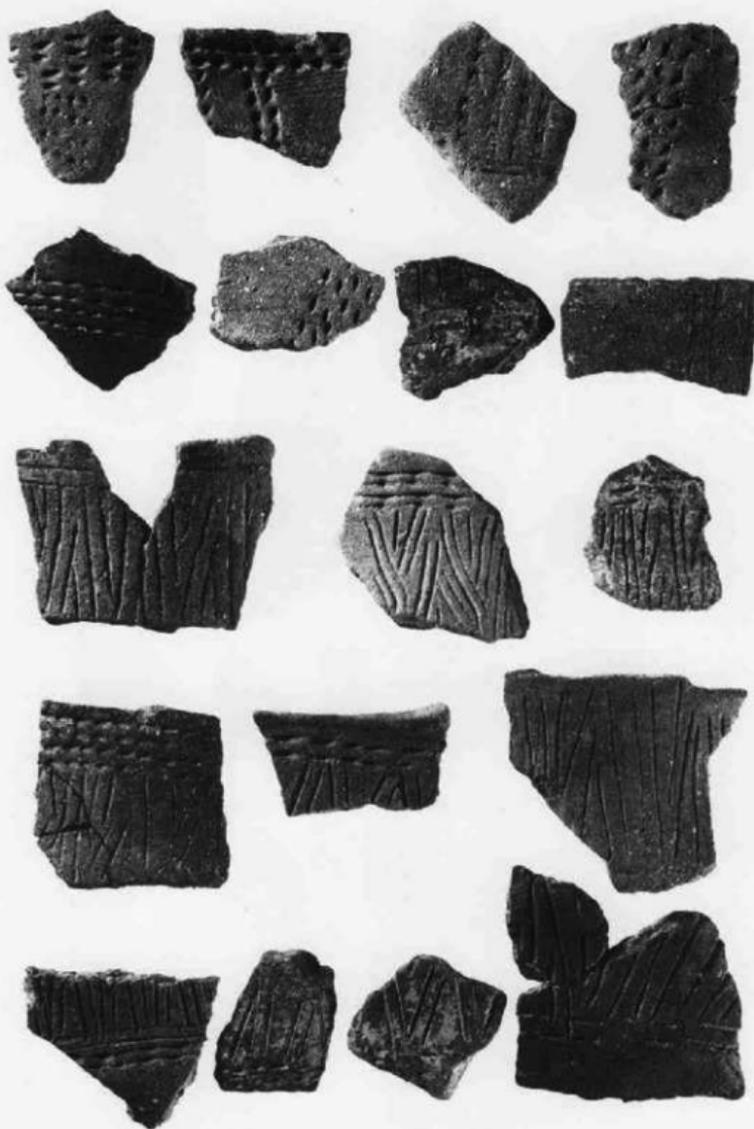
P.L. 24 室川貝塚東地区の記録保存発掘調査資料(北東部黒色遺物包含層凹地部)



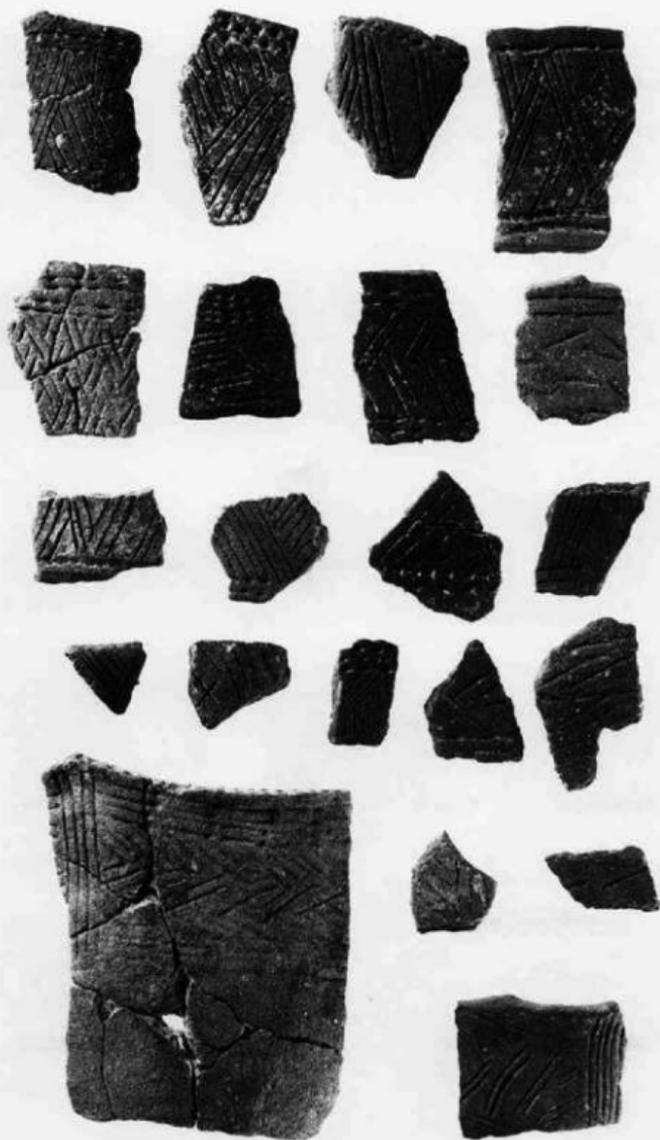
P L. 25 室川貝塚東地区の記録保存発掘調査資料(北東部黒色遺物包含層凹地部)



P L. 26 室川貝塚東地区の記録保存発掘調査資料(北東部黒色遺物包含層凹地部)



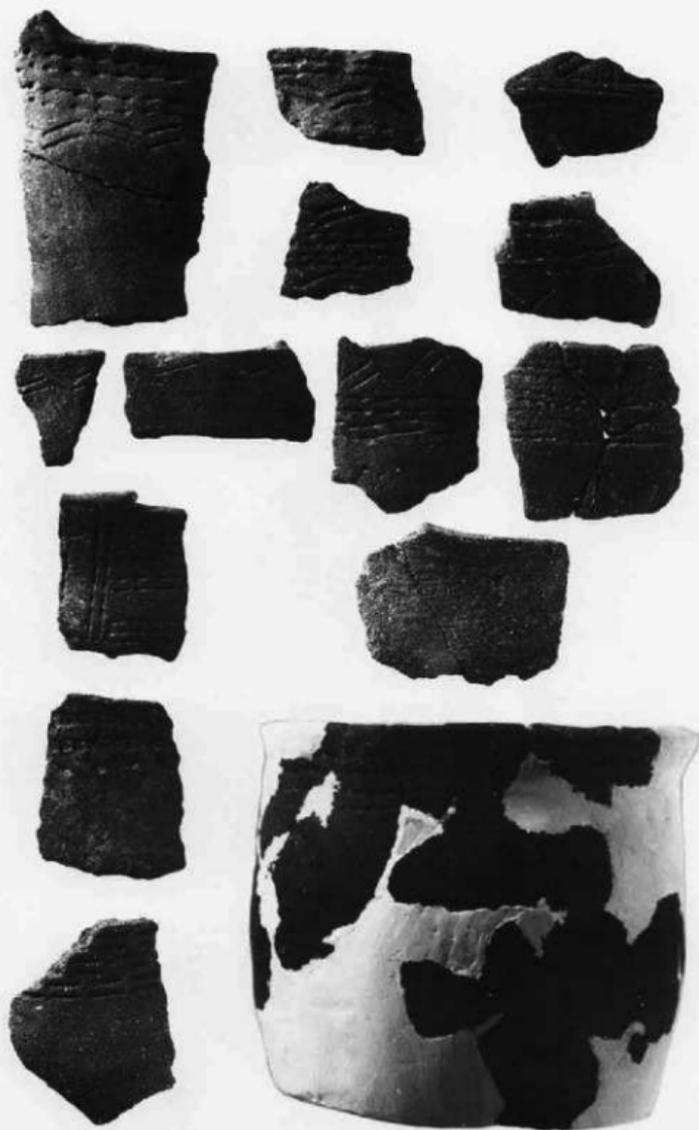
P.L. 27 室川貝塚東地区の記録保存発掘調査資料(北東部黒色遺物包含層凹地部)



P L. 28 室川貝塚東地区の記録保存発掘調査資料(北東部黒色遺物包含層凹地部)



P.L. 29 室川貝塚東地区の記録保存発掘調査資料(北東部黒色遺物包含層凹地部)



P.L. 30 室川貝塚東地区の記録保存発掘調査資料(北東部黑色遺物包含層凹地部)



P L. 31 室川貝塚東地区の記録保存発掘調査資料(北東部黒色遺物包含層凹地部)



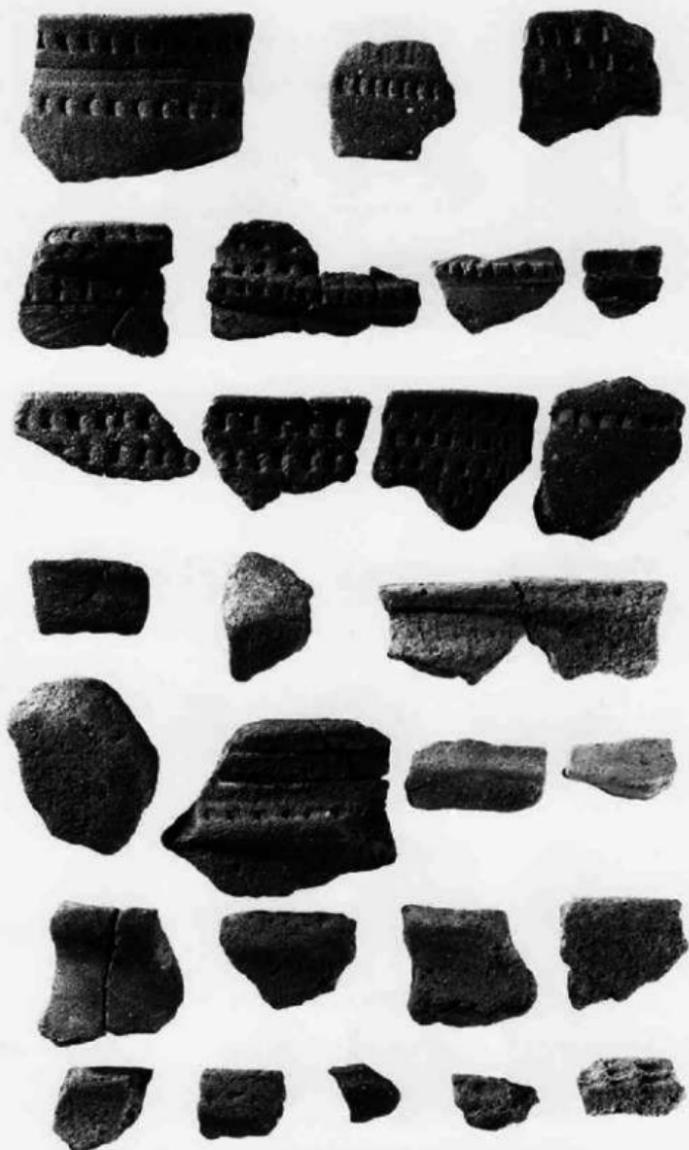
P L. 32 室川貝塚東地区の記録保存発掘調査資料(北東部黒色遺物包含層凹地部)



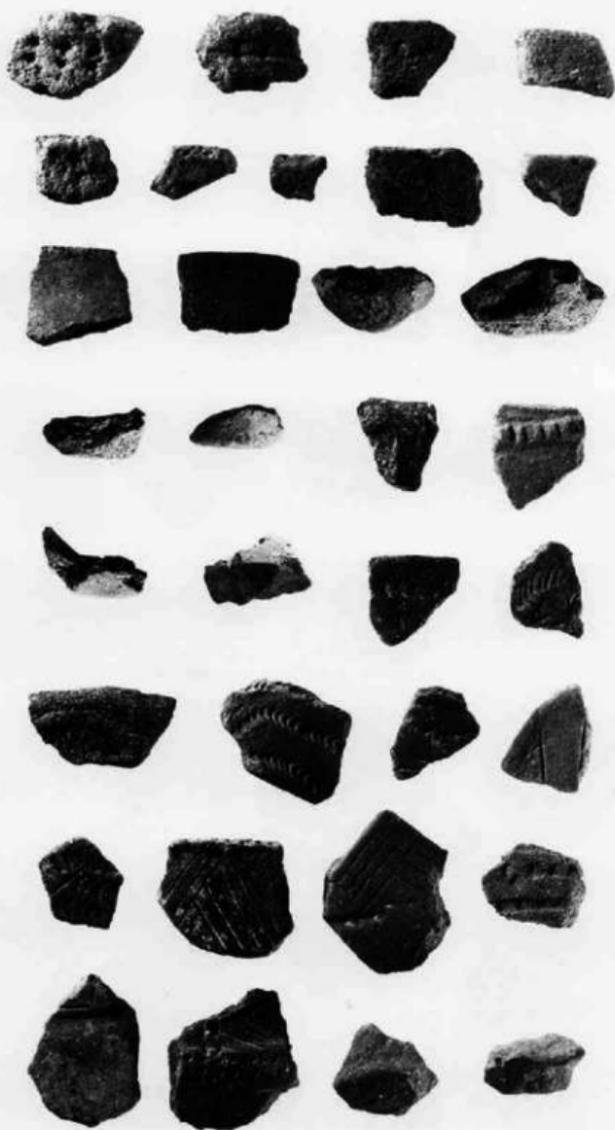
P.L. 33 室川貝塚東地区の記録保存発掘調査資料(北東部黒色遺物包含層凹地部)



P.L. 34 室川貝塚東地区の記録保存発掘調査資料(北東部黑色遺物包含層凹地部)



P L. 35 室川貝塚東地区の記録保存発掘調査資料(北東部黑色遺物包含層凹地部)



P L. 36 室川貝塚東地区の記録保存発掘調査資料(北東部黑色遺物包含層凹地部)

P L. 37~45 • 石器



1



2



3



1



2



3



4



5



6



4



5



6



7



8



7



8



P.L. 38 石鏃状石器 1~4, 石斧類 5, 6



1



3



2



4



5



6



1



3



2



4

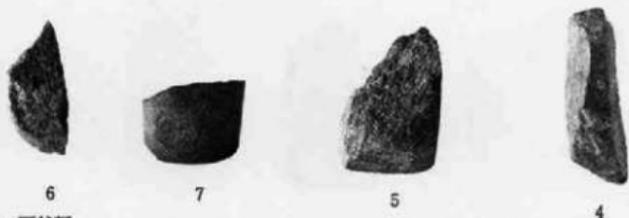
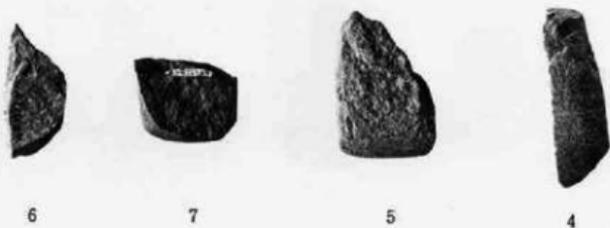
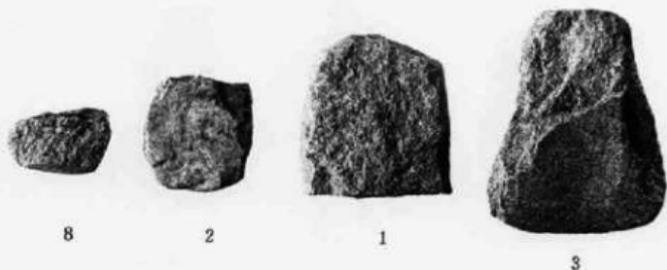


5



6

P.L. 39 石斧類



P L. 40 石斧類



1



2



5



6



3



4



1



2



5



6



3



4

P.L. 41 石斧類



1



3



2



4



5



6



1



3



2



4

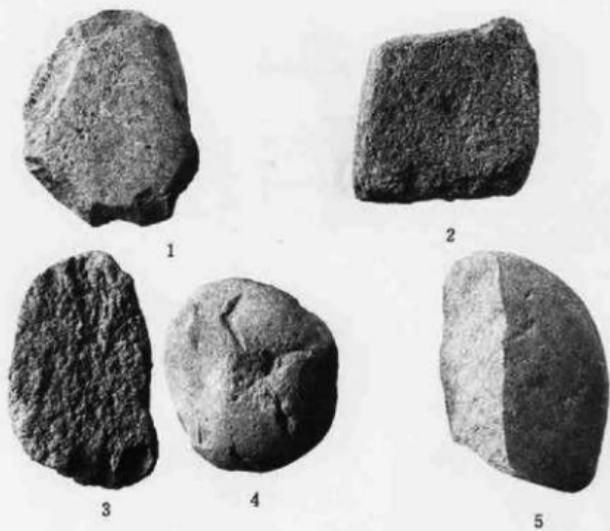


5



6

PL. 42 石斧類 1~3・石錘・敲打器 4~6



P.L. 43 磨り石、凹石



1



2



3



4

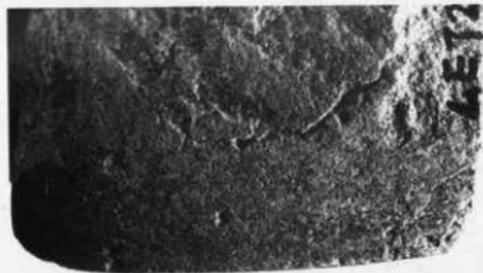


5



6

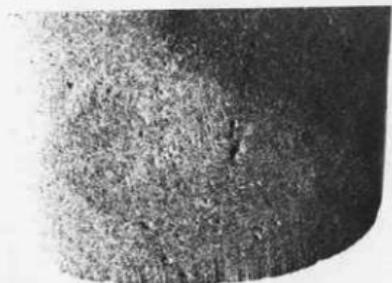
PL. 44 石皿・砥石



1



2



3



4

## 室川貝塚

総合庁舎建設に伴う範囲確認調査及び東地区発掘調査の報告

沖縄市調査報告書第17集

1993年3月10日印刷

1993年3月31日発刊

発行 沖縄市教育委員会

沖縄市美里1100番地

編集 沖縄市立郷土博物館

〒904 沖縄市字上地235番地3

TEL 098-932-6882

印刷 協業組合 丸正印刷

TEL 098-946-5151